櫛形町文化財調査報告書　No. 2

上の山遺跡

1985. 3

櫛形町教育委員会

序　　文

上の山遺跡は、櫛形町の西部に位置する上野地内にあり、以前より縄文式土器、土師器等の出土していた関係者周知の遺跡であります。昭和59年度に畑地帯総合土地改良事業の一環としてこの遺跡を含む、農道の整備事業が実施される事になり、町教育委員会では、工事に先立って文化財保護法に基づきこの遺跡の発掘調査を実施することになりました。その結果、縄文時代、弥生時代の住居址、方形周溝墓、土坑、時代不明の溝、それに伴う遺物等が多数出土しました。これらの貴重な資料が今後本町の歴史をひもとくいとぐちとなりアヤメの里づくりをめざす、本町のふるさとづくりに役立つ事を願っております。最後に今回の発掘調査ならびに報告書の作成にあたりご指導、ご協力いただきました皆さまに心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和60年３月15日

櫛形町教育委員会

教育長　**河　野　　豊**

例　　言

Ⅰ　本書は畑地帯総合土地改良事業に伴う上の山遺跡発掘調査報告書である。

Ⅰ　発掘調査は昭和59年５月21日から同年８月４日まで実施した。出土品の整理等は昭和60年２月１日から同年３月15日まで行った。

Ⅰ　発掘調査組織　　調査主体 ― 櫛形町教育委員会
調査担当 ― 清水　博
調 査 員 ― 百瀬忠幸（東海大卒）　山崎和也（駒沢大卒）　吉岡弘樹（東海大）
事務担当 ― 鶴田一雄（町社会教育係長）　石川利夫

Ⅰ　本報告書作成の業務分担は下記の通りである。
遺物の実測　清水、吉岡、小林、百瀬、大森　　遺物のトレース　出口、渡辺、百瀬、大森
遺物観察表の作成　吉岡　　遺構図版の作成　出口

Ⅰ　石器の実測、分類、観察は、大森隆志氏に協力を賜った。

Ⅰ　石質の鑑定は、柴田徹氏（都立上野高校教諭）に協力を賜った。

Ⅰ　本書の編集は清水が行った。執筆の文責は文末に記したが、主要な分担は次の通りである。
縄文時代の遺構と遺物 ― 百瀬、弥生時代以降の遺構と遺物 ― 吉岡、清水

Ⅰ　写真撮影。遺構については山崎、清水、遺物については近藤英夫氏のお手を煩せた。

Ⅰ　発掘調査、遺物整理において下記の方々に御助言、御協力を頂いた。記して謝意を表する次第である。
保坂直重（上野区長）　関根孝夫（東海大学教授）　近藤英夫（東海大学助教授）　末木　健（県教委文化課）　田代孝、新津健、坂本美夫、中山誠二、保坂康夫（県埋蔵文化財センター）　中田英（神奈川県埋蔵文化財センター）　臼居直之（諏訪西中学教諭）

Ⅰ　発掘調査参加者
藤本和弘（山梨学院大）　饗場宏、秋山昌寛、有泉雅人、青木央、有賀清仁、芦沢文明、伊藤淳司、小笠原淳、藤田稔、川名富美子（山梨大）、佐藤千佳子（東海大）、野中新市、穂坂今朝春、野中つる江、河野芳子、古屋なみ、桜田みさえ、伊藤与志恵、清水しずか、石川きみよ、石川ときじ、饗場よしみ、石川かねじ、石川いと子、石川しげ子、中沢栄、深沢道子、上田みな子（一般）

Ⅰ　整理作業参加者
小林宇一（東海大卒）渡辺順子（香蘭女学校卒）出口真由美（武蔵野美術大学）中沢栄、深沢道子、斉藤みや子、饗場啓子、河野節子、上田みな子（一般）

Ⅰ　発掘調査時に作成された図面及び出土遺物は櫛形町教育委員会において保管している。

凡　　例

1）遺構Noは原則として確認順である。但重複関係にあるものについては遺構が構築された順に従ってNoをふってある。

2）挿図縮尺は原則として次の通りである。
住居址―1/40、同炉―1/20、土坑―1/40、1/20　溝状遺構―1/160、1/40、集石遺構―1/30、土器実測図―1/4、同拓映―1/3、石器―2/3、1/3、1/6、石製品、土製品、―1/2

3）遺構実測図における指示について。
遺構実測図の水系レベルは海抜高を示す。
方位は磁北を示す。
主軸方位は、主軸線と磁北とのなす角度で示す。
平面図中―・―は床面残存部、……は推定線、――は炭化物範囲を示す。
スクリーントーン、インスタントレタリングの指示は次の通りである。
□―焼土、炉 □ ―石、●―土器、□―石器
遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。大数字は、本文、挿図、表、と一致する。

4）遺物図版について。
□ ―赤彩部を示す。

目　　次

序　文

例　言

目　次

Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ章　遺跡の概観 …… 5

Ⅲ章　調査の概要 …… 5

Ⅳ章　発見された遺構と遺物 …… 6

1節　縄文時代の遺構 …… 6

a）住居址

b）土　坑

c）集石遺構

2節　古墳時代以降の遺構 …… 26

a）住居址

b）土　坑

c）溝状遺構（方形周溝墓）

3節　遺構外の遺物 …… 41

a）土　器

b）石　器

Ⅴ章　成果と課題 …… 49

1節　縄文時代の遺構と遺物 …… 49

2節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 55

第1図　遺跡位置図　周辺遺跡分布図〔1/50000〕 1

第2図　遺跡地形図〔1/2500〕 2

第3図　遺構配置図〔1/400〕 3・4

第4図　7号住居址遺物出土状態図 6

第5図　7号住居址及び炉址〔1/40, 1/20〕 7

第6図　7号住居址出土土器 (1)〔1/4,〕 8

第7図　7号住居址出土土器 (2)〔1/4, 1/3, 1/6〕 9

第8図　7号住居址出土石器〔2/3, 1/3, 1/6〕 10

第9図　8号住居址遺物出土状態図 12

第10図　8号住居址及び炉址〔1/40, 1/20〕 13

第11図　8号住居址出土土器〔1/3〕 14

第12図　8号住居址出土土製品〔1/2〕 15

第13図　8号住居址出土石器〔1/3, 1/2〕 15

第14図　9号住居址及び炉址〔1/40, 1/20〕 16

第15図　9号住居址出土土器〔1/4, 1/3〕 17

第16図　3号、4号土坑〔1/40〕 18

第17図　5,6,8,9,10,11,号土坑〔1/40〕 19

第18図　7号土坑及び12号土坑〔1/20, 1/30〕 20

第19図　13号土坑〔1/20〕 21

第20図　14号土坑及び16号土坑〔1/20, 1/40〕 22

第21図　土坑出土土器〔1/2, 1/4〕 23

第22図　土坑出土石器〔1/3〕 24

第23図　1号集石遺構〔1/30〕 25

第24図　1号集石出土土器〔1/4〕 25

第25図　1号集石出土石器〔1/3〕 25

第26図　1号住居址及び2号住居址掘り方〔1/60〕 26

第27図　2号住居址及び炉址〔1/60, 1/30〕 27

第28図　2号住居址出土土器〔1/4〕 27

第29図　3号住居址、掘り方及び炉址〔1/20, 1/40〕 28

第30図　3号住居址出土土器〔1/4〕 29

第31図　4号住居址及び掘り方〔1/60〕 30

第32図　4号住居址出土土器〔1/3, 1/4〕 31

第33図　5，6号住居址及び掘り方〔1/40〕 32

第34図　1，2，15号土坑〔1/40〕 33

第35図　2号土坑出土土器〔1/4〕 34

第36図　溝状遺構(1)
(1,2,3,5,6,7,8,号溝)〔1/160〕 35・36

第37図　溝状遺構(2)
(4,9,10,11,12,13,14,15,16,17号溝)
〔1/160〕 37・38

第38図　溝状遺構出土土器〔1/4, 1/3〕 40

第39図　遺構外出土土器(1)〔1/3〕 42

第40図　遺構外出土土器(2)〔1/3〕 44

第41図　遺構外出土土器(3)〔1/3〕 45

第42図　遺構外出土土製品〔1/3〕 46

第43図　遺構外出土石器(1)〔1/3, 2/3〕 47

第44図　遺構外出土石器(2)〔1/3, 1/6〕 48

第45図　グリッド別縄文土器出土状況図〔1/400〕 51・52

第46図　縄文時代遺構変遷図 54

……

観　　察　　表

第1表　2号住居址出土土器観察表 28

第2表　3号住居址出土土器観察表(1) 29

3号住居址出土土器観察表(2) 30

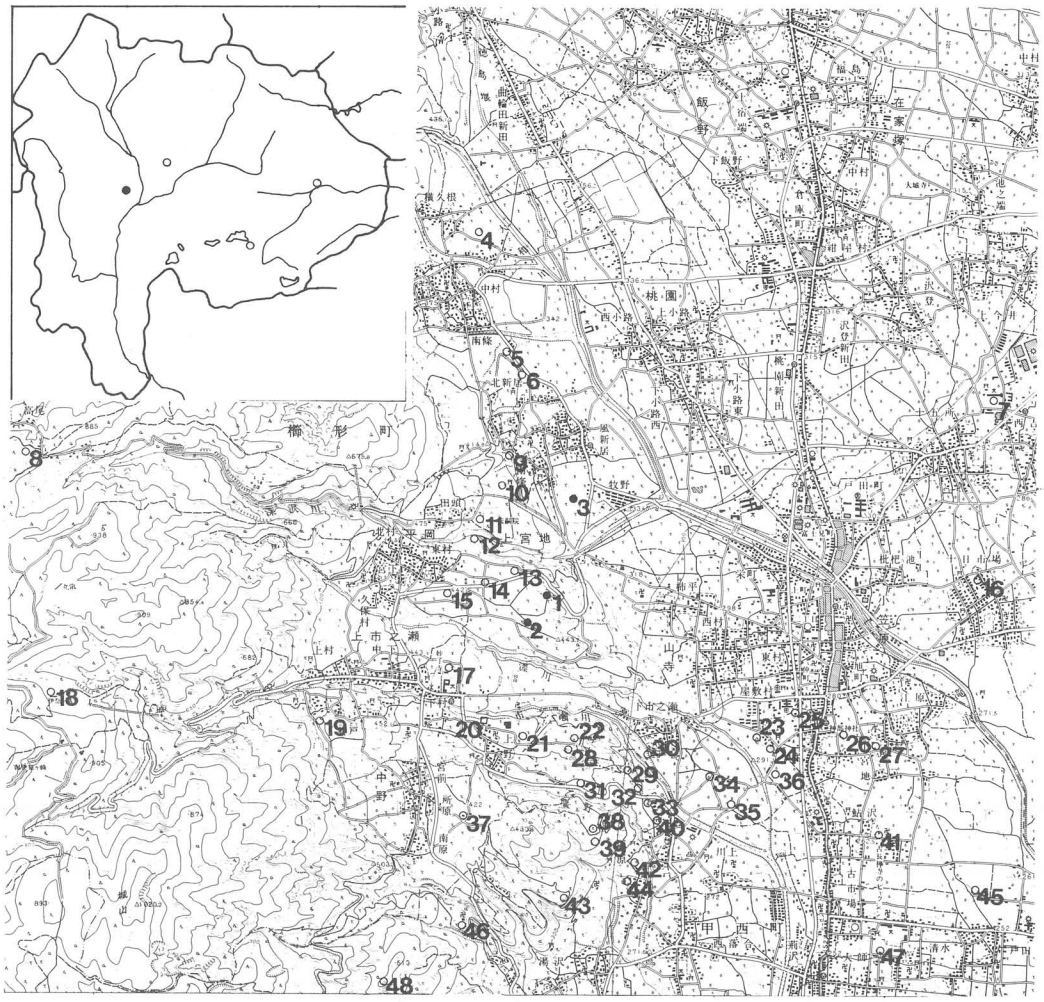
第3表　4号住居址出土土器観察表 31

第4表　2号土拡出土土器観察表 34

第１章　調査に至る経緯

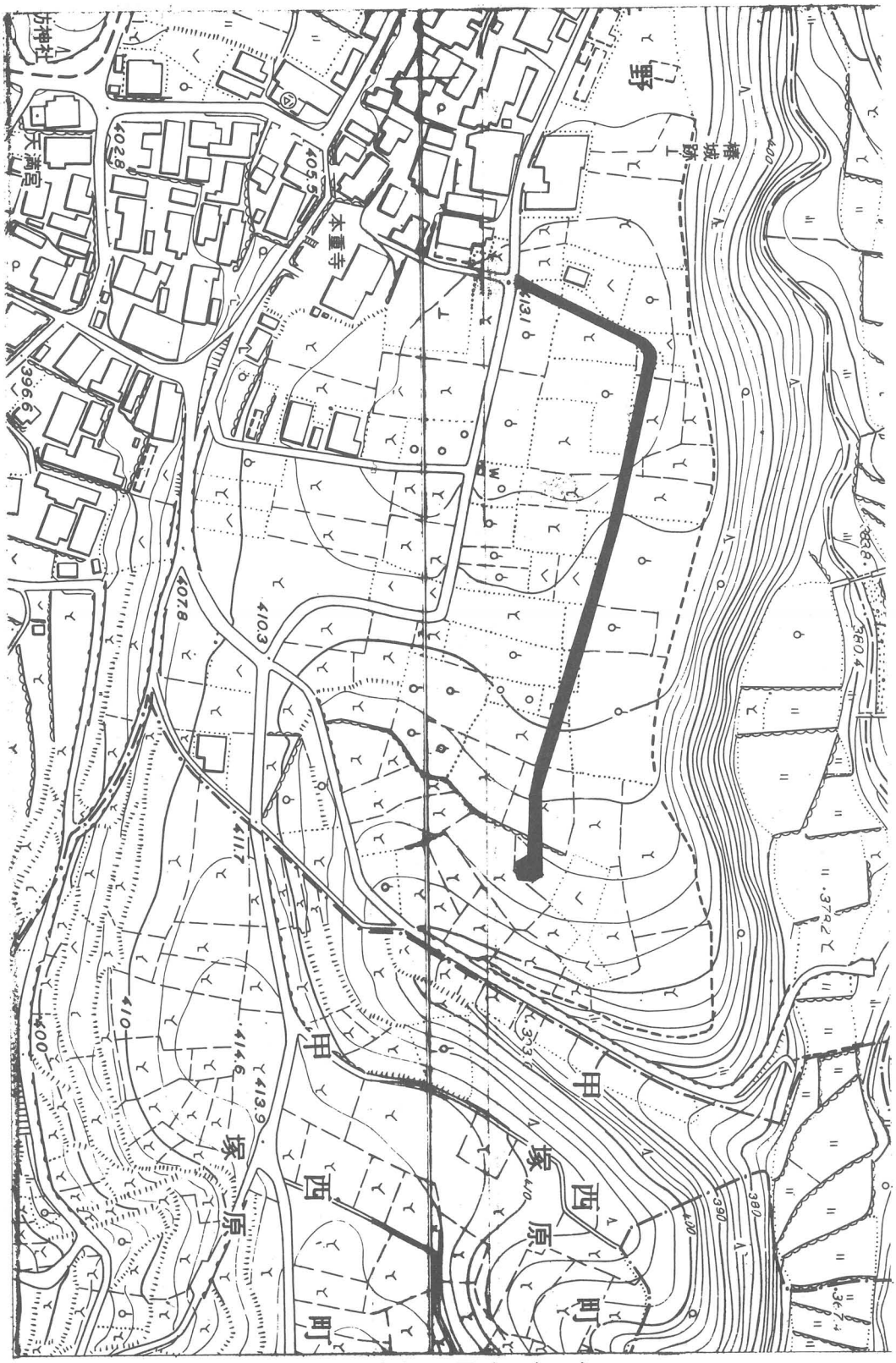
櫛形町上野区は、本町の西部に位置し古くから養蚕を中心とした農業地帯であった。この地域を昭和48年度～昭和60年度を事業年度とする畑地帯総合土地改良事業の一環として、昭和59年度に取りあげ農道の整備が計画された。この事業に伴い町教育委員会では、文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘調査を、山梨県農政部峡中土地改良事務所の負担金と昭和59年度埋蔵文化財発掘調査に係る文化庁及び山梨県教育委員会の補助を受けて昭和59年５月１日～８月４日まで現地調査を行った。調査の過程で多くの遺構や遺物が出土したが、予定通り無事に調査を完了する事ができた。

（鶴田一雄）

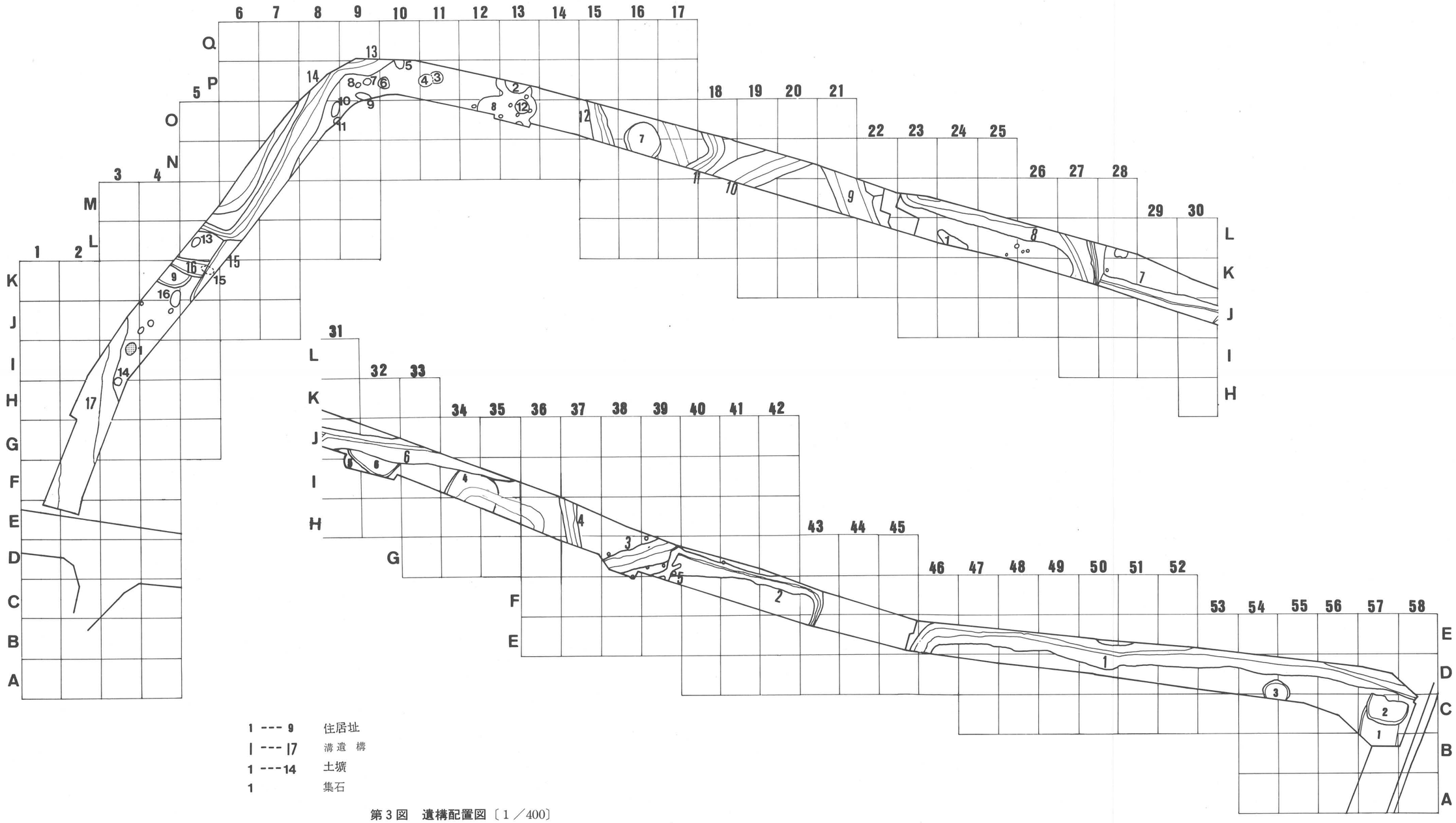


第１図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔1/50000〕

１－六科丘古墳　２－六科丘遺跡　３－曽根遺跡　４－曲輪田遺跡　５－北新居遺跡　６－神明遺跡　７－十五所遺跡　８－高尾遺跡　９－御坂Ｂ遺跡　10－御坂遺跡　11－伝嗣院遺跡　12－東原Ａ遺跡　13－東原Ｂ遺跡　14－長田口遺跡　15－中畑遺跡　16－新田遺跡　17－原田遺跡　18－伊奈ケ湖遺跡　19－上杉林遺跡　20－椿城跡　21－下河原遺跡　22－上の東遺跡　23－河原遺跡　24－富士塚古墳　25－御崎北古墳群　26－下宮地遺跡　27－江原遺跡　28－上の東古墳　29－物見塚古墳　30－大畑遺跡、狐塚１・２遺跡　31－坂上遺跡　32－後田遺跡　33－昼喰場遺跡　34－川上道上遺跡　35－鋳物師屋古墳　36－御崎前古墳　37－古屋敷遺跡　38－丸池古墳、刃塚古墳　39－上の平遺跡　40－上村古墳　41－鮎沢遺跡　42－住村２号墳　43－御前山遺跡　44－住村１号墳　45－条里遺跡　46－上の原遺跡　47－清水遺跡　48－土居平遺跡



第2図　遺跡地形図〔1／2500〕



1 --- 9　住居址
| --- 17　溝遺構
1 --- 14　土壙
1　集石

第３図　遺構配置図〔１／400〕

第Ⅱ章　遺跡の概観

上の山遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町上野字上の山に所在する。櫛形町は甲府盆地西縁に位置し、西半部は櫛形山麓及びその前面に発達した市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺に形成された扇状地形となっている。市之瀬台地は甲府盆地形成に与った地殻変動による丘陵状地形であり、台地前面は100m程の比高差を持つ断層崖によって盆地と画され、前端には円頂丘が並んでいる。台地上面は幾条かの河川によって小支丘にわけられている。上野山丘陵は市之瀬台地の中央南寄りにあり、北を市之瀬川、南を堰野川に挟まれ、東一西に延びる丘陵である。丘陵縁辺は急斜面となり、先端部は小円頂丘が発達し上野山と呼ばれるが、更に東側は南北２つの小尾根に分かれ盆地床へ下降している。上の山遺跡はこの丘陵中部北側縁辺に占地し、東へ向い僅かに降る緩傾斜面上にあり遺跡東端には南一北に小谷が刻まれている。

「山梨県遺跡地名表」によると櫛形町には29ヶ所の遺跡が記載されている。上野山丘陵上では、本遺跡に南隣し下河原遺跡[①]が、西隣して伝椿城址が存在し、また小谷を隔てて東側の円頂丘上には上の東古墳が占地する。古墳北側には上の東遺跡が存在し、更に東丘陵先端には物見塚古墳[②]が盆地を睥睨している。市之瀬川を挟み、北側の六科山丘陵先端には、六科丘遺跡[③]、六科丘古墳が存在する。この他台地上では、曽根遺跡、伝嗣院遺跡、長田口遺跡、原田遺跡、甲西町昼喰場遺跡等、縄文時代を中心とする遺跡が知られている。東方平地部では、本町に於ては十五所遺跡、鋳物師屋古墳等が知られるのみであるが、甲西町に入ると江原遺跡、久保遺跡住吉遺跡[④]、御崎古墳群等、弥生時代から平安時代に至る遺跡が知られている。　（清水　博）

第Ⅲ章　調査の概要

今回の調査は農道整備事業に伴うもので、発掘区は巾４ｍ、延長約 250m に亘る。丘陵北縁に沿い約 190m 東－西に延び、西端で直角に折れ更に50ｍ程南へ続いている。

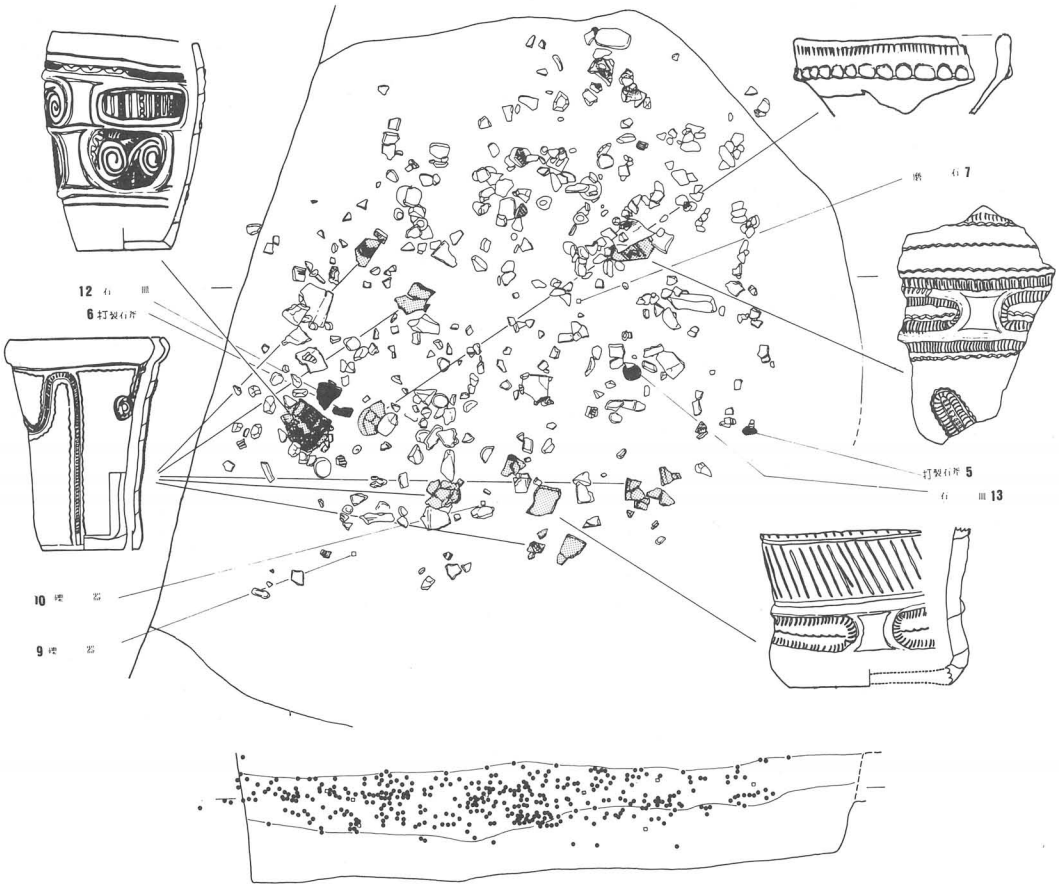
５月上旬に50cm巾のトレンチを11ヶ所設け試掘を行った。基本土層は４層に分けられた。第Ⅰ層は耕作土で20～40cm、第Ⅱ層は明茶褐色土で粘性、しまり共に弱く20cm前後推積するが検出しえない部分もあった。第Ⅲ層がローム層で40～ 100cm程推積し、第Ⅳ層が黄白色軽石層となる。Ⅱ層上面で５ヶ所の落ち込みを確認し、縄文式土器を中心とする遺物を多数検出した。

実質的な調査は５月下旬に開始した。調査方法はグリッド法を採り、調査区全域に４ｍ方眼のグリッドを磁北に従い設定した。南北方向に南からＡ～Ｑ、東西方向に西から１～58と呼称した。試掘の結果に従って、耕作土を重機によって排除し、以下は遺構検出を行いつつ人力で掘り下げた。調査は発掘区東端から西へ向って行った。全体的に遺構上面の削平が進み遺存状態は良好とはいい難いが、多くの遺構を検出した。検出した遺構は住居址９軒・土拡15基・集石遺構１・溝状遺構17本で、時代的には縄文時代から、中世にまで及んでいる。調査は多くの成果を残し、８月４日に終了した。　（清水　博）

第Ⅳ章　発見された遺構と遺物

第1節　縄文時代の遺構

a）住　居　址



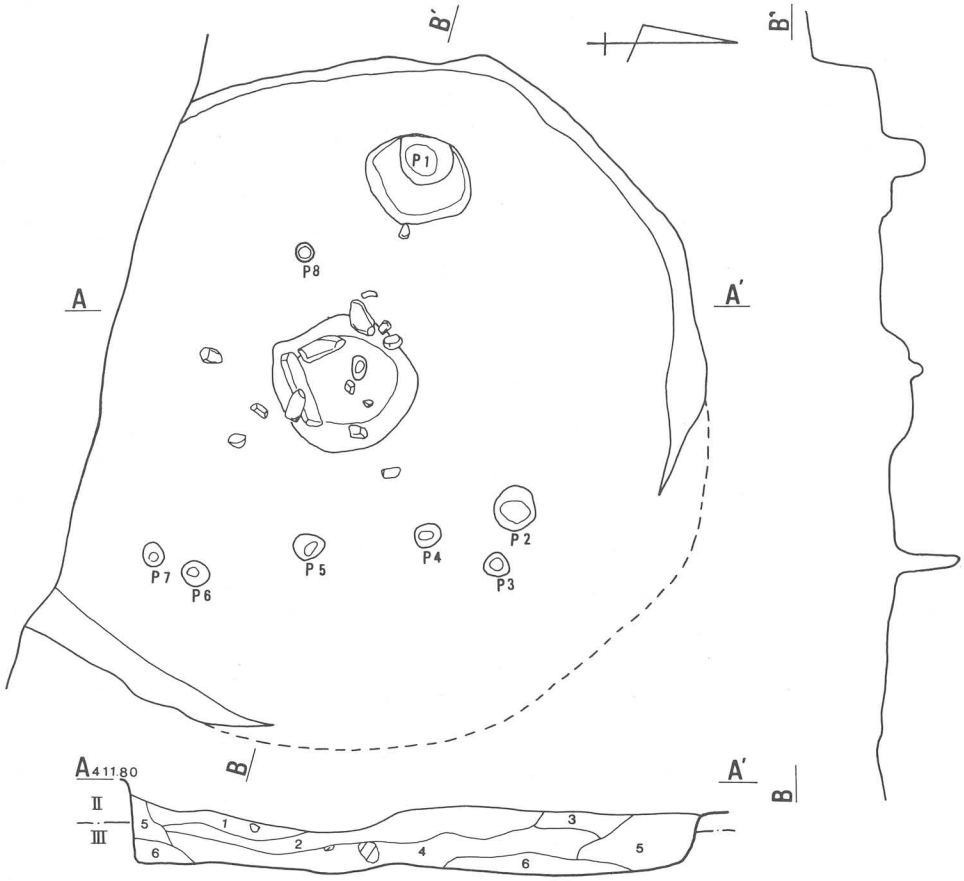
第４図　７号住居址遺物出土状態図

７号住居址　　（第４～８図、図版２・３）

発掘区中央やや西寄り、16－Ｎ・０，17－Ｎ区に位置する。西10m に８号住居址が存在する。住居址南端が発掘区外となり、北端を削平されている。

平面形は不整円形を呈し、規模は径3.7～４ｍを測る。

掘り込みはローム層中まで達しており、壁高は30cmを測る。覆土は６層に分けられ、自然推積を示す。覆土上層には多量の土器、石器類及び礫が認められたが断面観察の結果に従えば、床面よりかなり浮いた状態でレンズ状に推積している。検出された土器も原状を復元しうる④



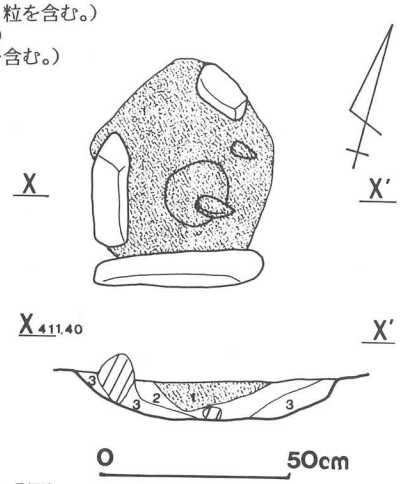
7号住居址
第1層：黒茶褐色土層
第2層：暗黄茶褐色土層
第3層：茶褐色土層
第4層：暗茶褐色土層（黒色土粒、ローム粒を含む。）
第5層：暗茶褐色土層（ローム粒を含む。）
第6層：暗茶褐色土層（ロームブロックを含む。）

第5図　7号住居址及び炉址　〔1/40、1/20〕

をはじめ大きな破片を含んでおり、自然の流入とするよりも住居址埋没過程における廃棄等、人為的集積であろう。

床面は堅緻だが、なだらかな起伏を有する。ピットは8ヶ所検出された。深さはそれぞれ15cm、60cm、25cm、12cm、36cm、8cm、26cm、24cmを測る。P1は西壁寄りに設けられ50×60cmの楕円形平面を呈し、底部は一段深く掘り込まれる。他のピットは径20～10cmの小型のもので、柱穴の特定はなしえなかった。

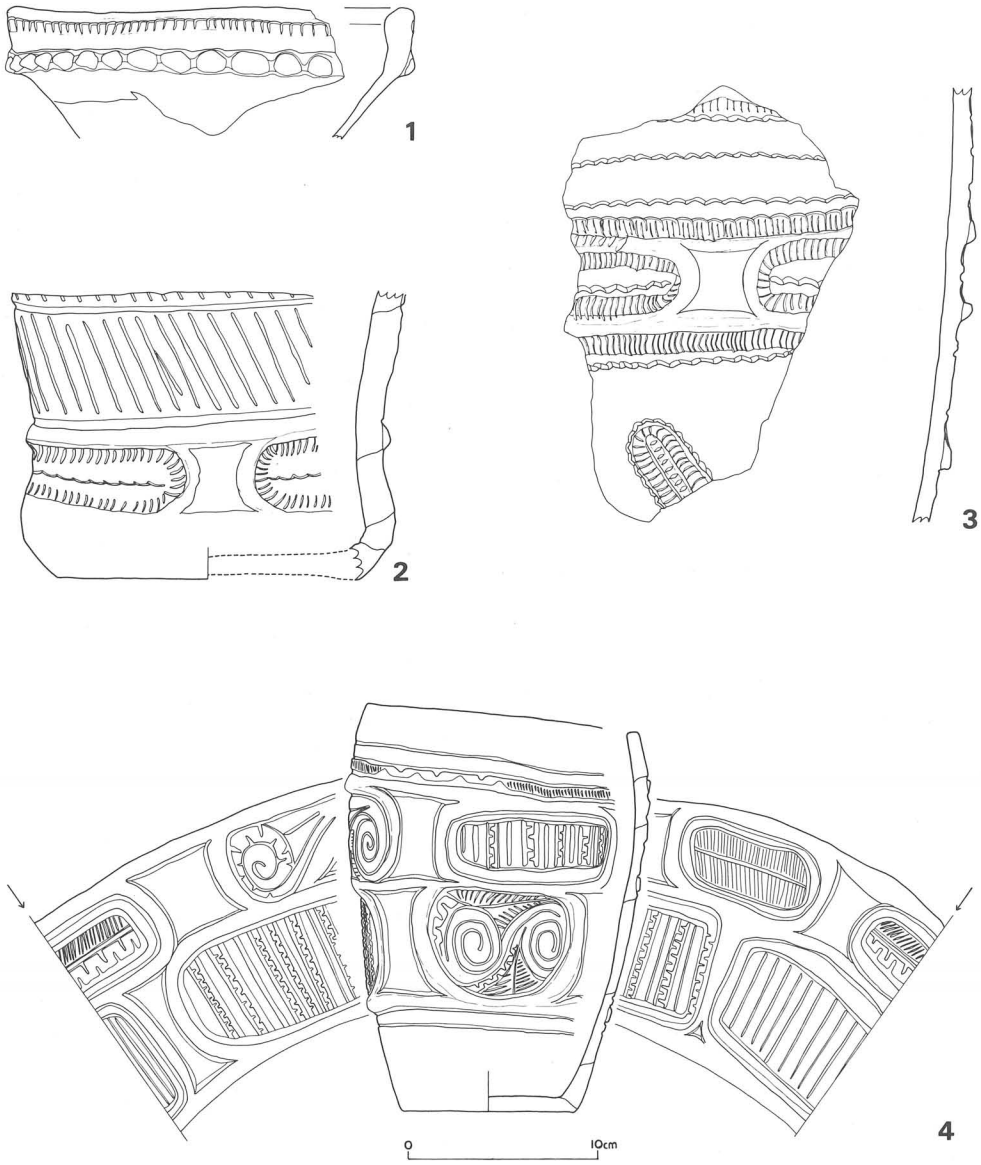
炉は住居址ほぼ中央に位置する。50×65cmの隅丸方形



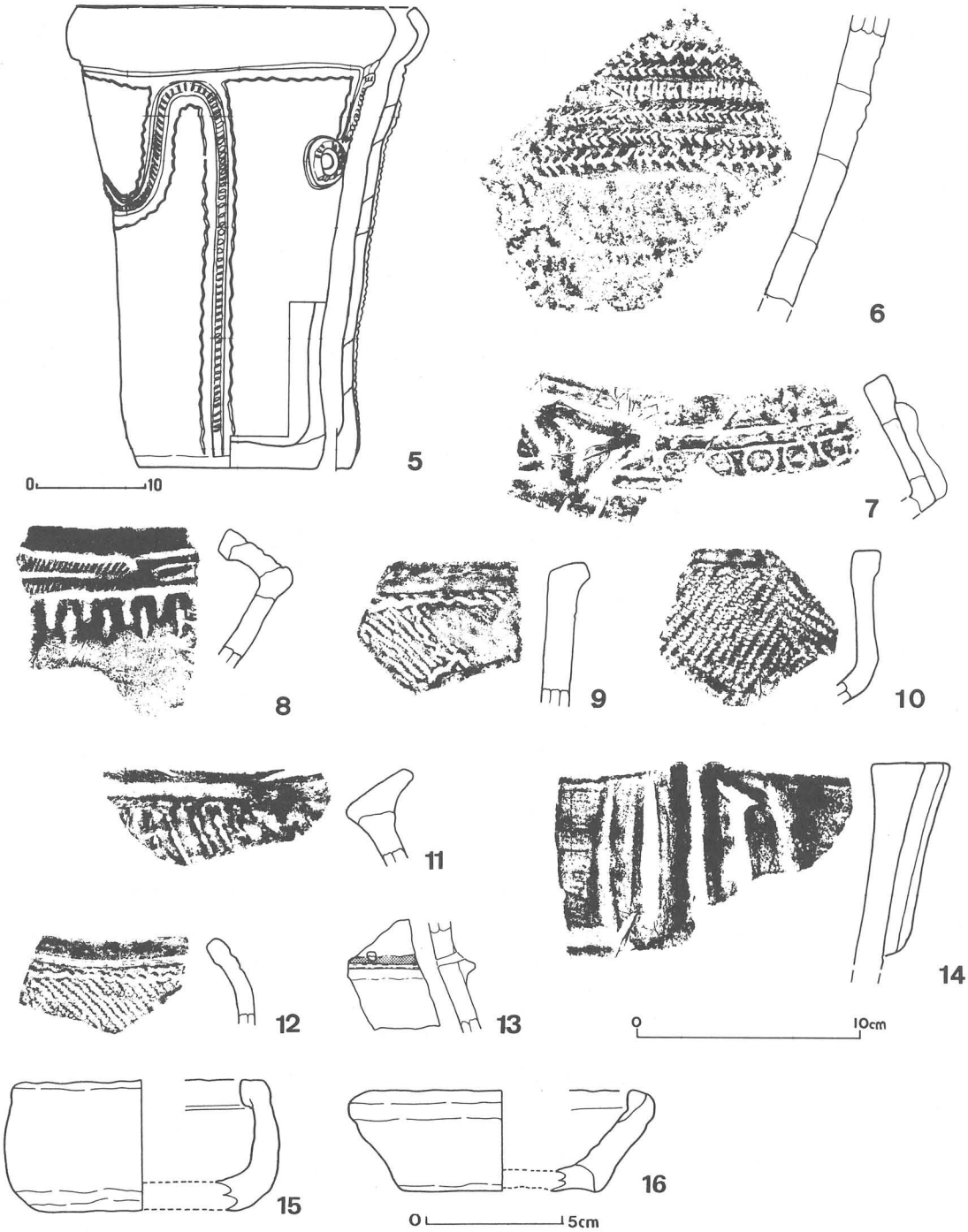
7号炉址
第1層：赤褐色土層（粘性普通しまりはやや強い。焼土粒、炭火物を含む。）
第2層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりは普通。焼土粒、ローム粒を少量を含む。）
第3層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ローム粒を多量にを含む。）

を呈する石囲炉であり、長角礫を西、南の二辺に直角に配している。他に炉内外から13個の小角礫が検出されており、炉石として使用された可能性も認められるが、炉周囲からは明確な抜き取り痕等は認められなかった。炉の掘り方は径160cmの不整円形を呈し、床面から10cm程掘り込んだ浅い皿状断面を呈する。

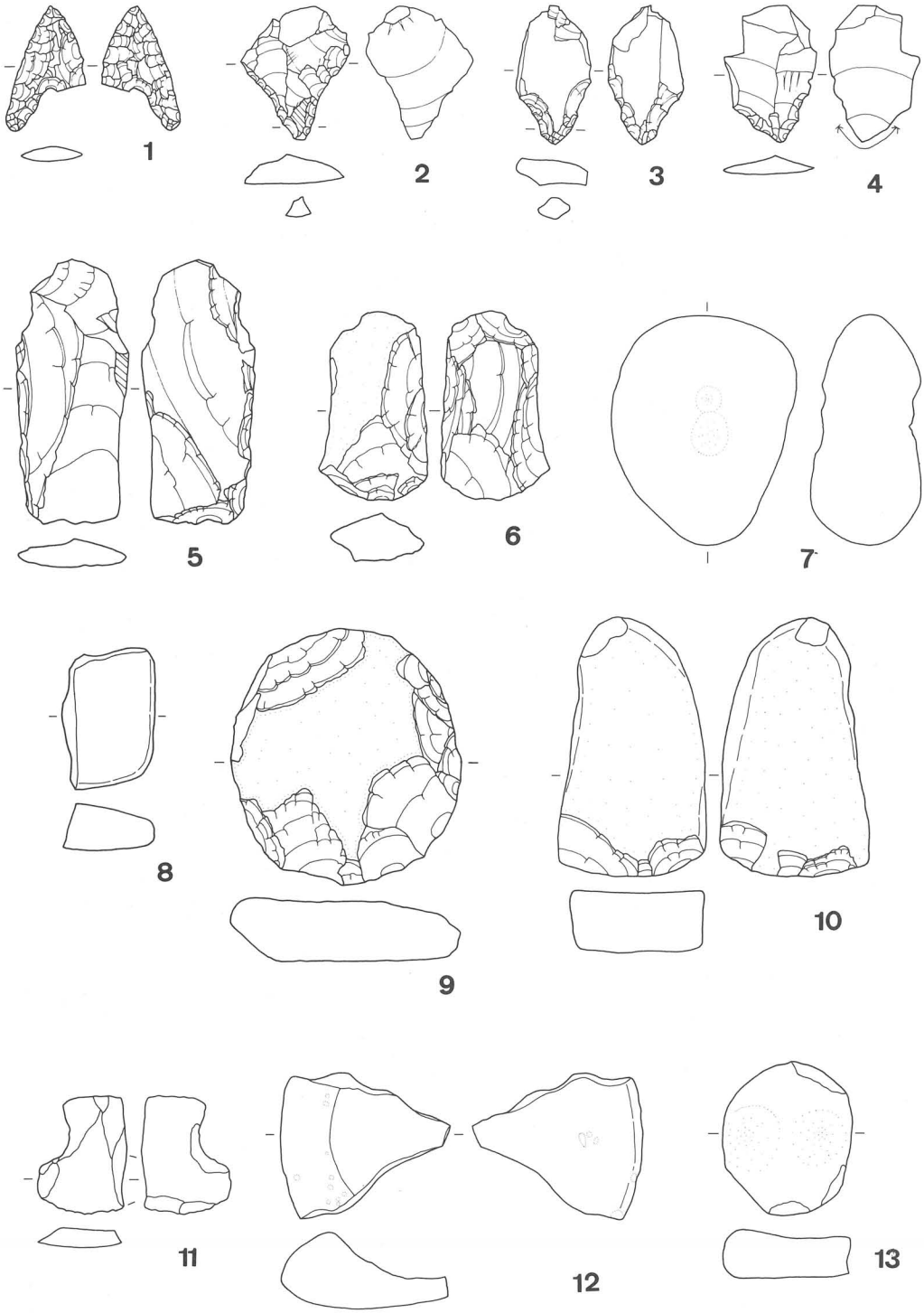
出土遺物は豊富であるが床面からは土器片若干が炉周囲から出土したのみである。



第６図　７号住居址出土土器　(1)　〔1/4〕



第７図　７号住居址出土土器　〔1/4、1/3、1/6 〕



第８図　７号住居址出土石器　〔2/3、1/3、1/6 〕

土器　1は口径推定21cm、器高約10cmをはかる浅鉢形土器であり、口縁上部に半截竹管による刺突文、口縁下部に指頭状圧痕の加えられた隆帯をめぐらしている。2，3は横帯区画文、楕円区画文が施されるもの。4は口径14cm、器高22cmをはかる、やや小形の深鉢形土器であり楕円を基本とする区画文を2帯重層させている。内面を中心にていねいな器面調整が行なわれているものの、二次焼成によると考えられる器面の荒れが著しい。5はいわゆる抽象文が施される深鉢形土器。器高41cmをはかり、胴下半部を中心として二次焼成を受けている。13は有孔鍔付土器の一部であり、外面鍔部の上面に赤色塗彩の痕跡をとどめている。15，16はそれぞれ器高5cm、同 3.5cmをはかるミニチュア土器であり、ともに、外面を中心に研磨が加えられている。

時期、縄文時代、中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群、第3類土器）の中でも古い段階の所産と考えられる。

石器　1、石鏃。石質：黒曜石。2～4、ドリル。石質：3点とも黒曜石。3、両面に節理面がある。4、縦長不整形剝片が素材。先端部だけ調整されている。矢印の範囲はバルブ。5・6、打製石斧。短冊形。石質：ともに頁岩。5には自然面あり。7、磨石＋凹石。石質：砂岩。表裏ともに浅い凹（約3㎜）が2つある。8、磨製石製品。石質：砂岩。全体によく磨かれている。板状の磨石かもしれないが、破片なので詳細は不明。9・10、礫器。石質：ともに砂岩。9は裏面にも周辺部全体に表面と同様の調整が加えられている。自然面あり。10は自然の角礫を素材とし、幅広の方に刃がある。自然面あり。11、粗整石匙。石質：ホルンフェルス。正面図右側は破損。器面の風化著しく剝離状態の詳細な観察不可能。12・13、石皿。石質：12は安山岩。13は砂岩。12には浅い凹（約3㎜）が表裏にある。13は、2ヶ所浅く窪んでいる。図示したもの以外に、以下の石器が出土している。打製石斧2点（短冊形、石質：頁岩1砂岩1）、礫器1点（石質：凝灰岩）、磨製石斧1点（定角、石質：凝灰岩）、石鏃2点（石質：黒曜石）、石核2点（石質：黒曜石）、使用痕ある剝片1点（石質：黒曜石）、剝片類74点（石質：黒曜石64、ホルンフェルス4、石英1、水晶1）。

8号住居址　（第9～13図、図版2・3）

発掘区中央西寄りの12・13－0・P区に位置する。東10mに7号住居址が西10mに3号～10号土拡が存在する。上部が全く削平され壁は存在しない。そのため落ち込みを確認しえず当初は土器溜りとして認識していたが、精査時に床面、及び炉址を確認し住居址として認定したものである。

耕作による削平以前に、12号土坑、2号土坑の両者に切られており、床面の一部を確認したのみである。

削平が激しく、形状、規模等は明らかにしえなかったが炉の位置から推定すると径6～7m程の住居址と思われる。

第９図　８号住居址遺物出土状態図

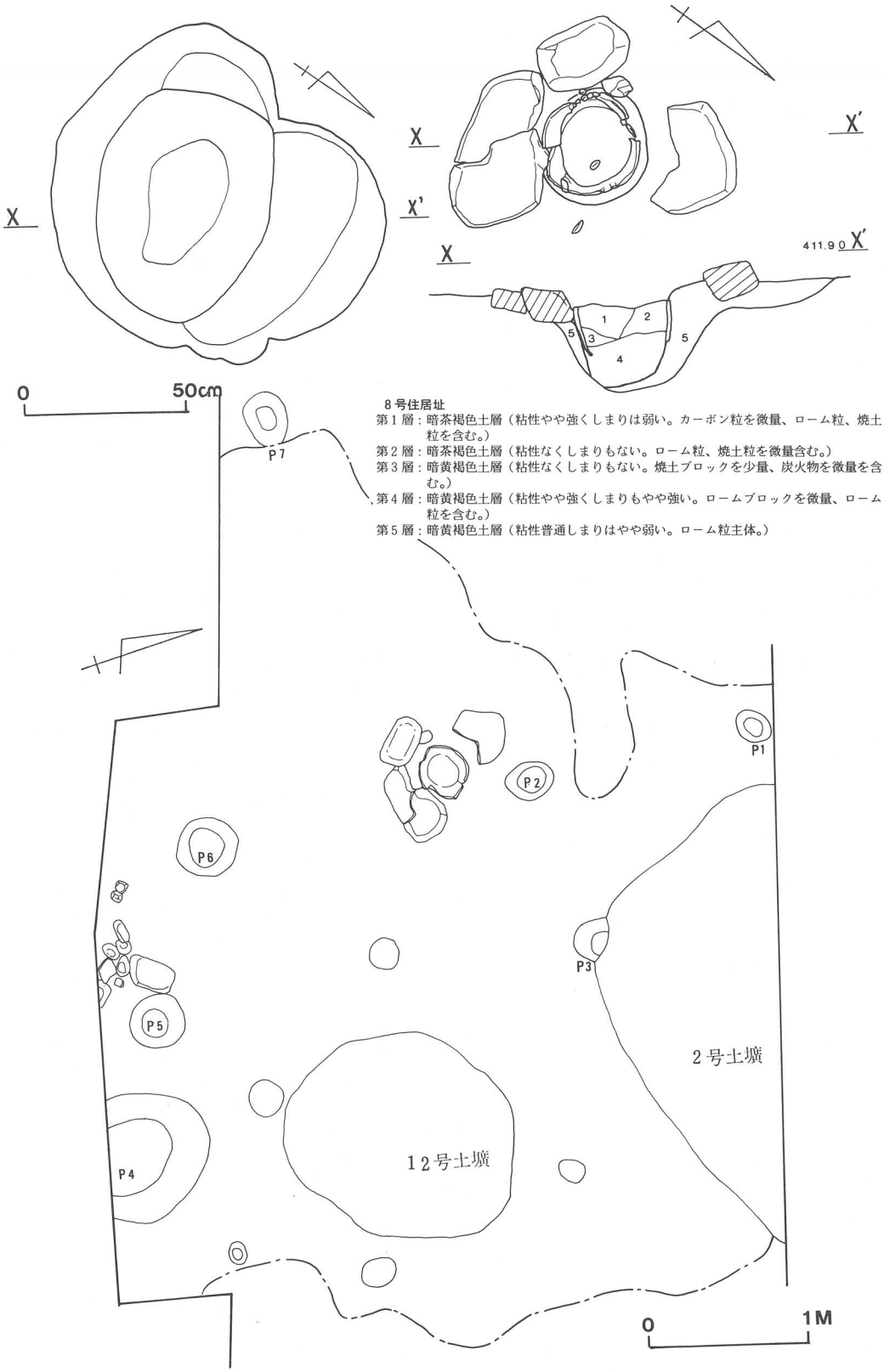
掘り込みはローム層上面で止まっている。本遺跡においては、縄文時代に属する他住居址（７・９号住居址）がローム層中まで掘り込んでいるのに比し、差異を持つものである。

床面は軟弱で、比較的平坦である。

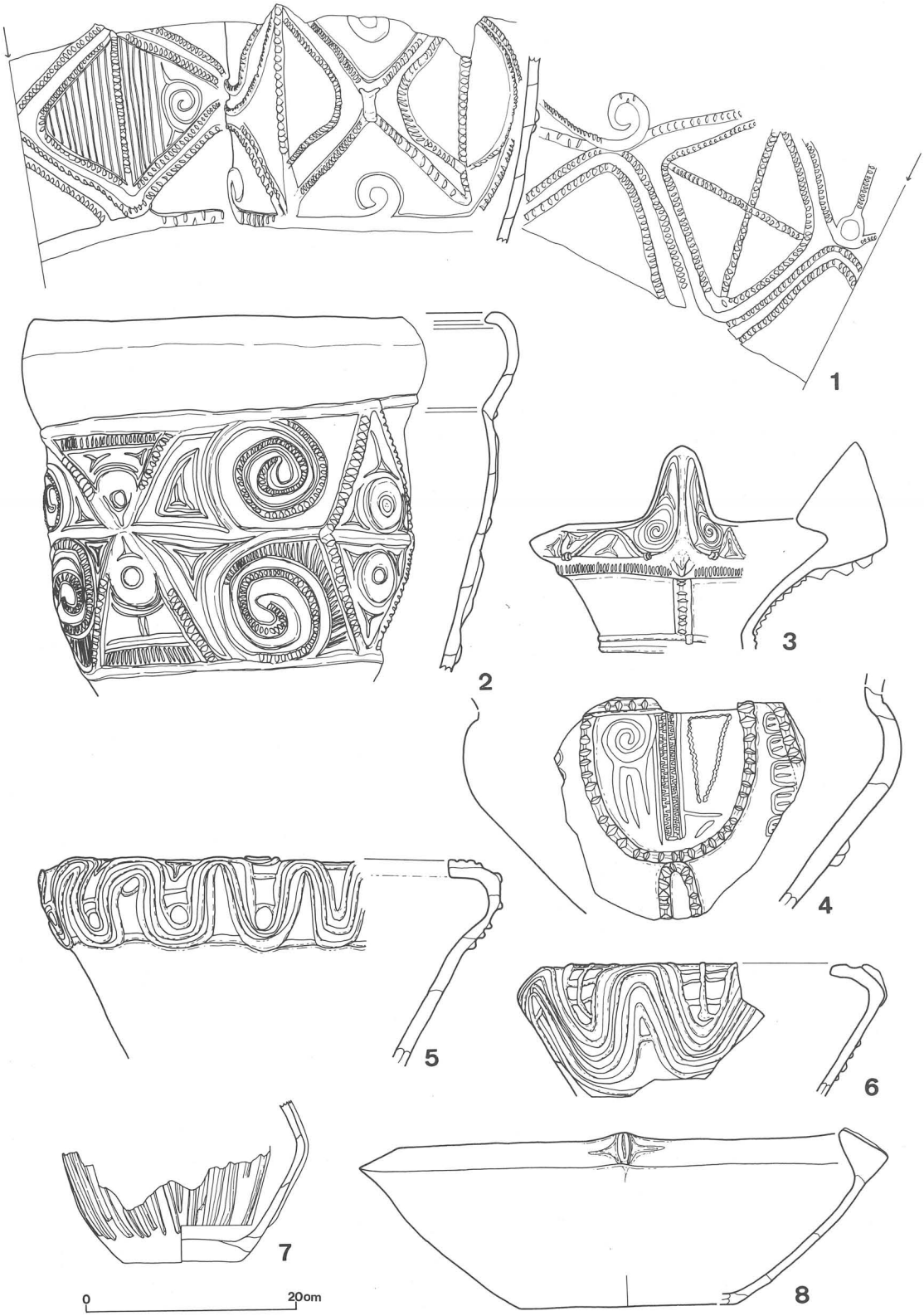
ピットは７ヶ所検出された。深さはそれぞれ11cm、８cm、28cm、34cm、11cm、19cm、55cmを測る。Ｐ４は径80cm程で平面不整円形を呈する大型のものであるが、他は径20～30cmである。

炉は石囲埋甕炉で、70×50cmの規模を測る。４個の偏平な角礫をコの字形に配し、中央に土器を埋設する。コの字状に開口した他の一辺に、炉石の抜き取り痕と考えられる浅い凹みがみとめられたことから、本来は四辺を囲まれた石囲埋甕炉として機能していたものと思われる。埋設土器は口径30cm、現在高22cmを測り、深鉢形土器の胴部である。覆土は４層に分けられ焼土ブロックが多量認められる。掘り方は不整形を呈し 100× 100cmを測る。中央部は楕円形を呈して一段深く掘り込まれ、掘り込み部は緩らかに立ち上がり、北・西部はテラス状をなしている。土器は掘り方底面よりやや浮いた状態で検出され、第５層（黄褐色土）によって埋設されている。

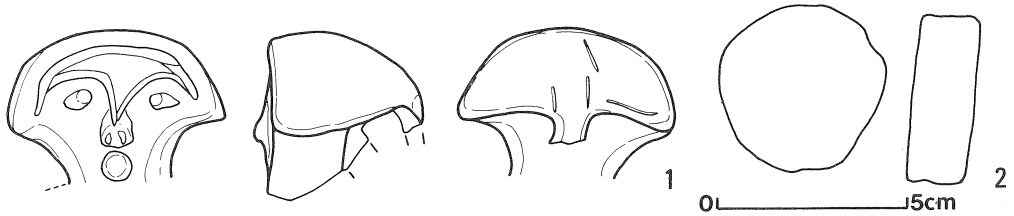
出土遺物は比較的少ないが、炉南側に集中している。



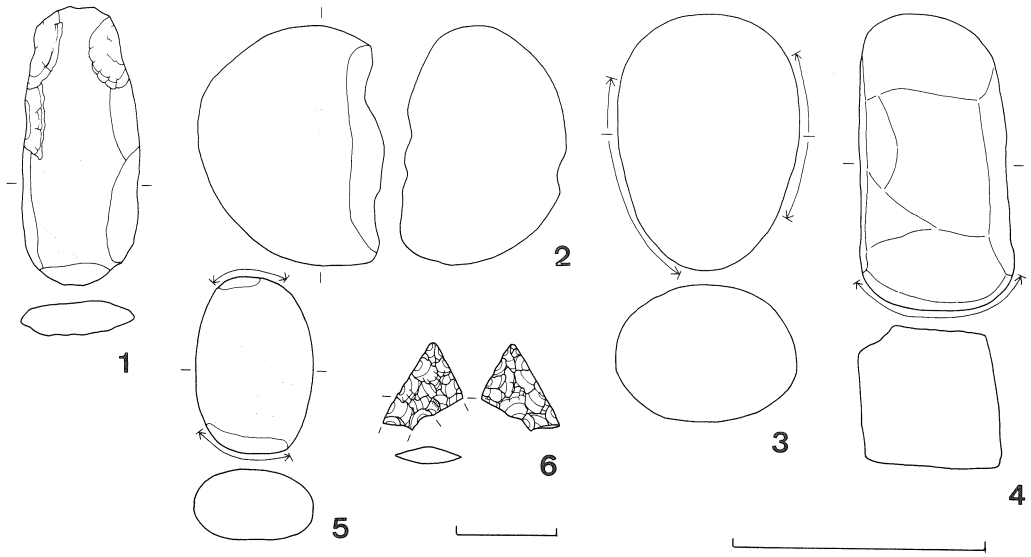
第10図　8号住居址及び炉址〔1／40，1／20〕



第11図　8号住居址出土土器　〔1/3〕



第12図　　8号住居址出土土製品〔1/2〕



第13図　8号住居址出土石器〔1/3，1/2〕

土器　1は炉体土器であり、口縁部及び底部を欠損する。刻み目のある細い隆帯によって、「タスキ掛け」状の文様を構成している。2は口径35cmを測る大形の深鉢形土器であり、現在高34cmを測る。内湾する口縁部を無文帯とし、胴部には肉彫り風の偏平な隆起帯などにより、渦巻状、三角形状の文様が描かれている。3は口嘴状の大形突起のつく口縁部破片。5・6は大きく外反して開き、上部で強く内湾する口縁部破片である。口縁上部に粘土紐貼り付けによる「重弧」状の文様が施される。7は5の胴下半部である可能性が高い。8は「玉胞き三叉文」風の文様が施される浅鉢形土器。口径推定43cmを測る。

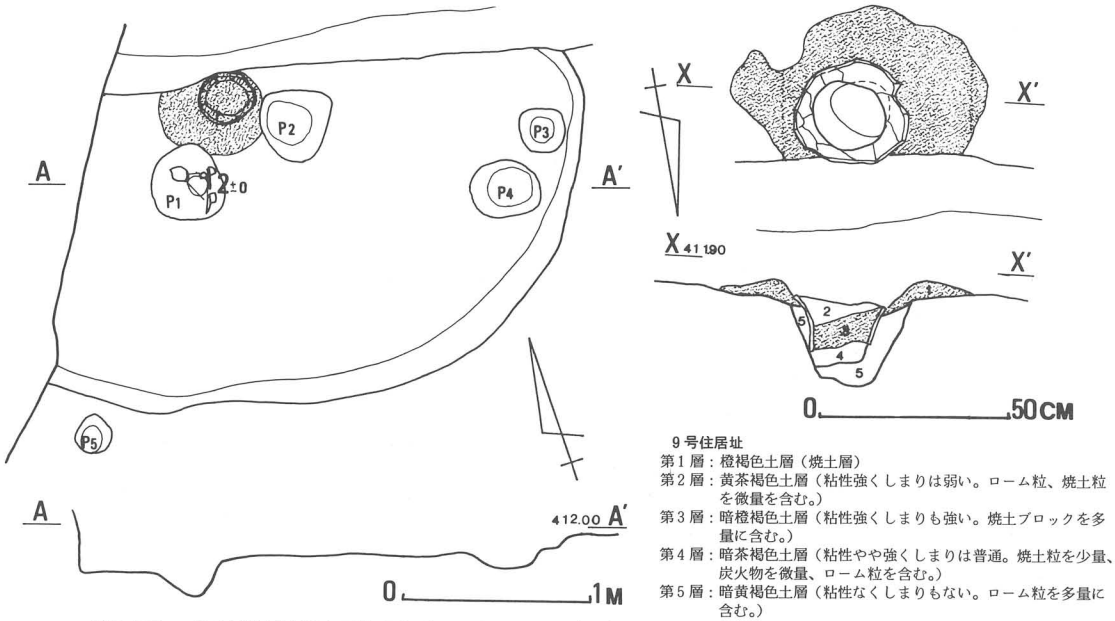
土製品　1は土偶頭部、床面より出土している。覆土中より土製円板2点が出土している。2は径 4.3cm程を測り、周囲は打割調整されている。

時期　縄文時代中期中葉、井戸尻式期（第Ⅲ群第4類土器）の中でも新しい時期の所産であろう。

石器　1、打製石斧。短冊形。石質：ホルンフェルス。器面全体の風化が著しいので、剝離状態の詳細な観察は不可能。2、凹石。石質：凝灰岩。裏面の凹は、礫自体の自然の凹。現存

部には、敲石、磨石との併用なし。３、磨石＋敲石。石質：安山岩。全体によく磨耗している。実測図の点線内、及び、矢印の範囲には敲打痕がある。裏面（表面の点線の真裏）にも敲打痕がある。４、敲石。石質：凝灰岩。矢印の範囲に敲打痕がある。自然の角礫を利用している。５、磨石＋敲石。石質：砂岩。全体によく磨耗している。矢印の範囲に敲打痕がある。６、石鏃。石質：黒曜石。脚部欠損。図示したもの以外に、打製石斧１点（短冊形・石質：頁石）、石鏃２点（石質：黒曜石）、磨石＋敲石２点（石質：安山岩１、ホルンフェルス１）、が出土している。

９号住居址　（第14～15図、図版２・３）



９号住居址
第１層：橙褐色土層（焼土層）
第２層：黄茶褐色土層（粘性強くしまりは弱い。ローム粒、焼土粒を微量を含む。）
第３層：暗橙褐色土層（粘性強くしまりも強い。焼土ブロックを多量に含む。）
第４層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりは普通。焼土粒を少量、炭火物を微量、ローム粒を含む。）
第５層：暗黄褐色土層（粘性なくしまりもない。ローム粒を多量に含む。）

第14図　９号住居址及び炉址〔１／40，１／20〕

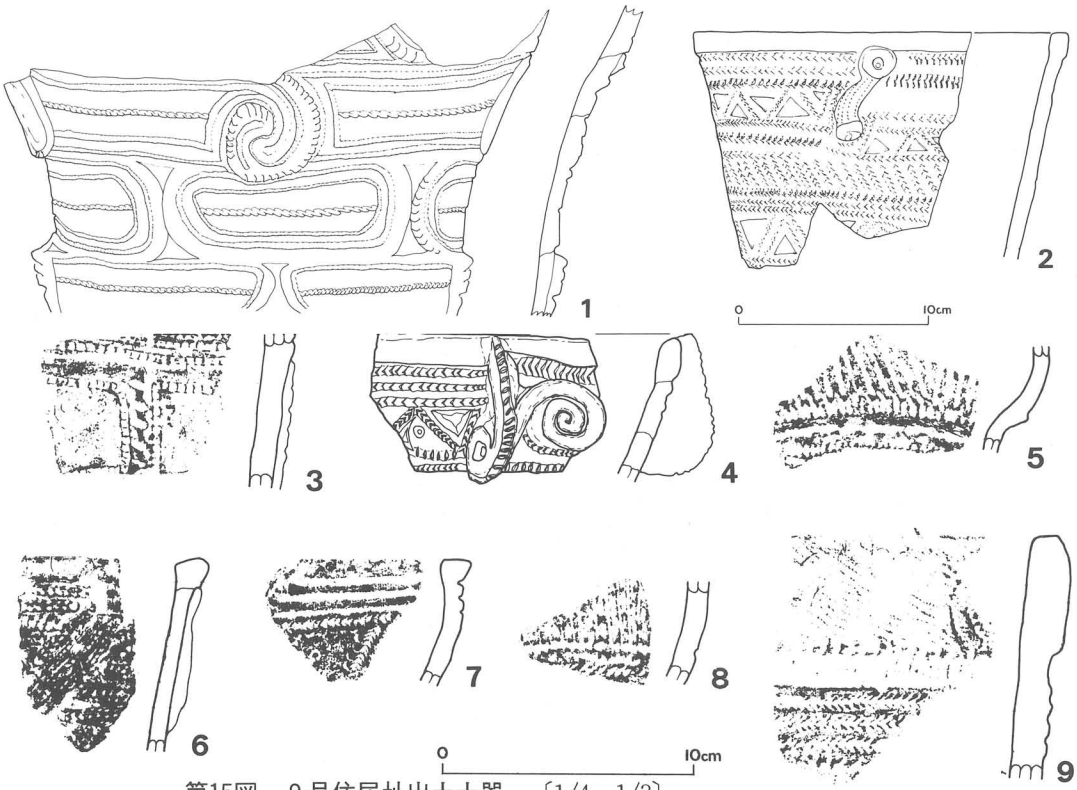
遺構　発掘区西半部の４・５－Ｋ区に位置する。南に16号土坑が、北に13号土坑(埋甕)が隣接する。西半部が発掘区域外となり、北半を16号溝によって切られるため住居址全体の約1/4強しか発掘しえなかった。形状は円形～楕円形平面を呈し、規模は３～４ｍ程を測るものと思われる。掘り込みはローム層中まで達するが上部の削平が激しく、壁高は現長で５～10cmを有するにすぎない。

床面は軟弱でなだらかな凹凸を有する。

ピットは５ヶ所検出された。深さはそれぞれ、20cm、15cm、13cm、７cm、20cmを測る。柱穴の特定はしえなかったが、P1 、P2 は炉脇、P3、P4 は東壁際、P5 は南壁外に設けられる。

炉は住居址ほぼ中央に位置し、北端部を16号溝に切られる。径30cm程の埋甕炉で周囲には焼土が盛り上がって遺存している。埋設土器は口径30cm、現存高18cmを測り胴部下半を欠損する。

炉内覆土は３層に分けられる。炉掘り方は径35cmの円形を呈し、20cm程を測り、断面は深鉢状を呈している。土器は掘り方中位に据えられた状態で検出され、第５層（暗黄褐色土）によって埋設されたものであろう。出土遺物は少なく、図示しえたものも僅かである。１は炉内埋設土器、２は炉脇Ｐ１覆土内、３は南東部覆土から出土している。



第15図　９号住居址出土土器　〔1/4，1/3〕

土器　１は炉体土器であり、口縁部及び底部を欠損する。重層する楕円区画文を基本とし、三角押文を多用している。２は口径推定20cmを測るやや小形の深鉢形土器であり、三角押文、三角形状の抉り文などにより模帯する文様が施される。３は角押文を特徴とする胴部破片。９は三角押文とキャタピラ文が併用される口縁部破片である。

時期　縄文時代中期前半、新道式期（第Ⅲ群第２類）の所産である。

ｂ）土　坑

３・４号土坑　（第16図　図版４）

発掘区中央西寄り、11－Ｐ区に位置する。平面確認時においては長大な楕円形土坑と考えたが、調査の進展につれ、二基の土坑であることが判明した。

二基のうち西側に位置するのが４号土坑で３号土坑を切って構築されている。

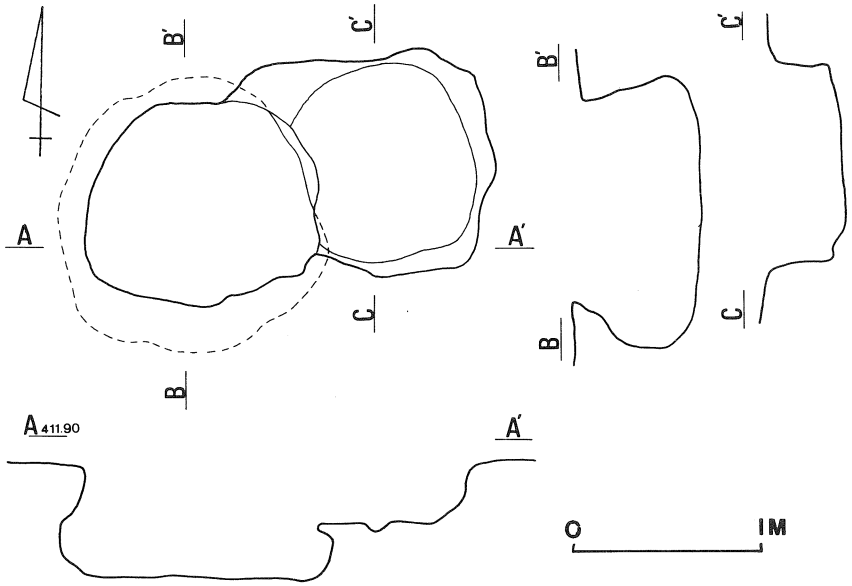
３号土坑　平面形はほぼ楕円形を呈したものと考えられ、規模は径１ｍ程となろう。深さは35cmを測り、坑底は平担で、断面形は鍋底状を呈する。

遺物は覆土中より縄文時代中期に属する小破片が出土している。

４号土坑　平面形はほぼ円形を呈し、規模は確認面で径120cm、底部で140cmを測る。深さは55～60cmを測り、底面は中央が僅かに低い凹レンズ状を呈する。断面は所請袋状を呈する土坑である。

遺物は覆土中より縄文時代中期に属する小破片が出土している。

両者共、ローム面で確認されたが本来の掘り込み面は現状よりかなり高かったものであろう。



第16図　３号・４号土坑〔1/40〕

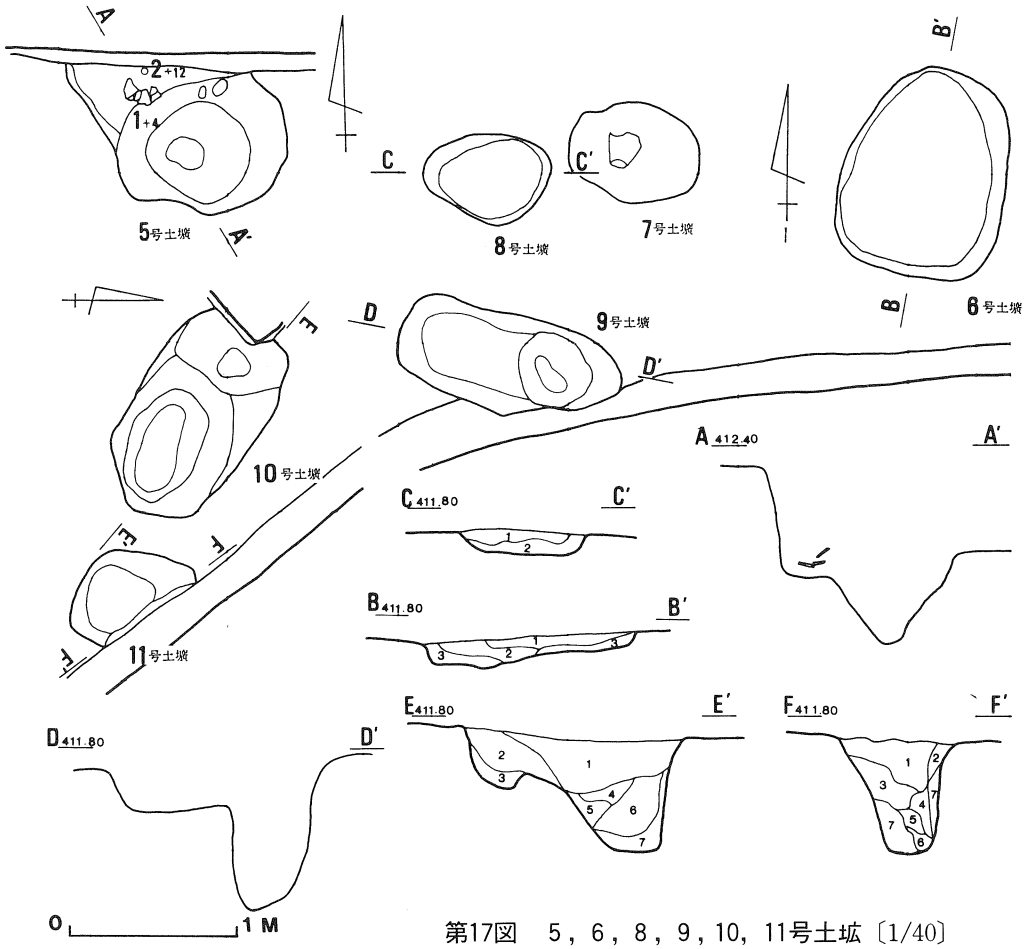
５号土坑　（第17図）

発掘区西部の、10－Ｐ区に位置する。北半部が発掘区域外となり、南半部しか確認しえない。その為全体の形状、規模は明らかにしえないが、現状では110×160cmの規模で、ほぼ半円形を呈する。深さは17cmを有するが南端は円形状に１段深く掘り込まれている。土坑底面からの深さは43cmを測る。

縄文時代中期に属する土器５－１が底部より３cm程浮いて、また打斧５－２が、覆土中より出土している。

６号土坑　（第17図）

発掘区西部、10－Ｐ区に位置する。ローム層上面で確認したもので、楕円形平面を呈し、120



第17図　5，6，8，9，10，11号土壙〔1/40〕

6号土壙
第1層：黄茶褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、暗茶褐色土粒を少量、炭火物を微量を含む。）
第2層：暗褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。暗茶褐色土粒を多量に、ローム粒を少量、炭火物、赤色スコリアを微量含む。）
第3層：黄褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、暗茶褐色土粒を少量を含む。）

8号土壙
第1層：暗褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。炭火物、赤色スコリアを微量、ローム粒を含む。）
第2層：黄褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。茶褐色土を微量を含む。）

10号土壙
第1層：暗茶褐色土層（黒茶褐色土層弱くしまりは強い。焼土粒、炭火物、赤色スコリア、ローム粒を微量を含む。）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性弱くしまりは強い。炭火物を微量、ローム粒を含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。炭火物を微量、ローム粒、ロームブロックを含む。）
第4層：黄茶褐色土層（粘性なくしまりはやや強い。炭火物を少量、ロームブロックを含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒を微量含む。）
第6層：茶褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒、ロームブロックを含む。）
第7層：暗黄茶褐色土層（粘性強くしまりは普通。ローム粒を少量を含む。）

11号土壙
第1層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりは普通。炭火物を微量、ローム粒を含む。）
第2層：黄茶褐色土層（粘性強くしまりは普通。ローム粒を多量に、茶褐色土粒を含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりも強い。ロームブロック、炭火物焼土粒を少量、ローム粒を含む。）
第4層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒、ロームブロックを多量にを含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性普通しまりはない。炭火物、焼土粒を微量、ローム粒を含む。）
第6層：暗黄茶褐色土層（黒茶褐色土層普通しまりはなし。炭火物、焼土粒を微量、ローム粒を含む。）
第7層：黄褐色土層（粘性弱くしまりはない。ロームブロックを多量に、茶褐色土粒を含む。）

× 100cmの規模を測る。深さは18cmを有し覆土は3層に分けられる。底面は比較的平担で断面タライ状を呈する。

遺物は検出されなかった。

8号土壙　（第17図）

発掘区西部、9－P区に位置する。ローム層上面で確認され平面形は楕円形を呈し、規模は75×50cmを測る。深さは8cm程の浅いもので、断面タライ状を呈し、覆土は2層に分かれる。

遺物は出土していない。

9号土壙　（第17図）

発掘区西部、9－P区に位置する。ローム層上面で確認されたが、南東隅の一部が発掘区域外となる。平面形は長円形を呈し、規模は 130×60cmを測る。深さは20cmを有し、坑底は平担

であるが東端は円形に一段深く掘り込まれ拡底からは60cmの深さを測る。遺物は出土していない。

10号土坑　（第17図）

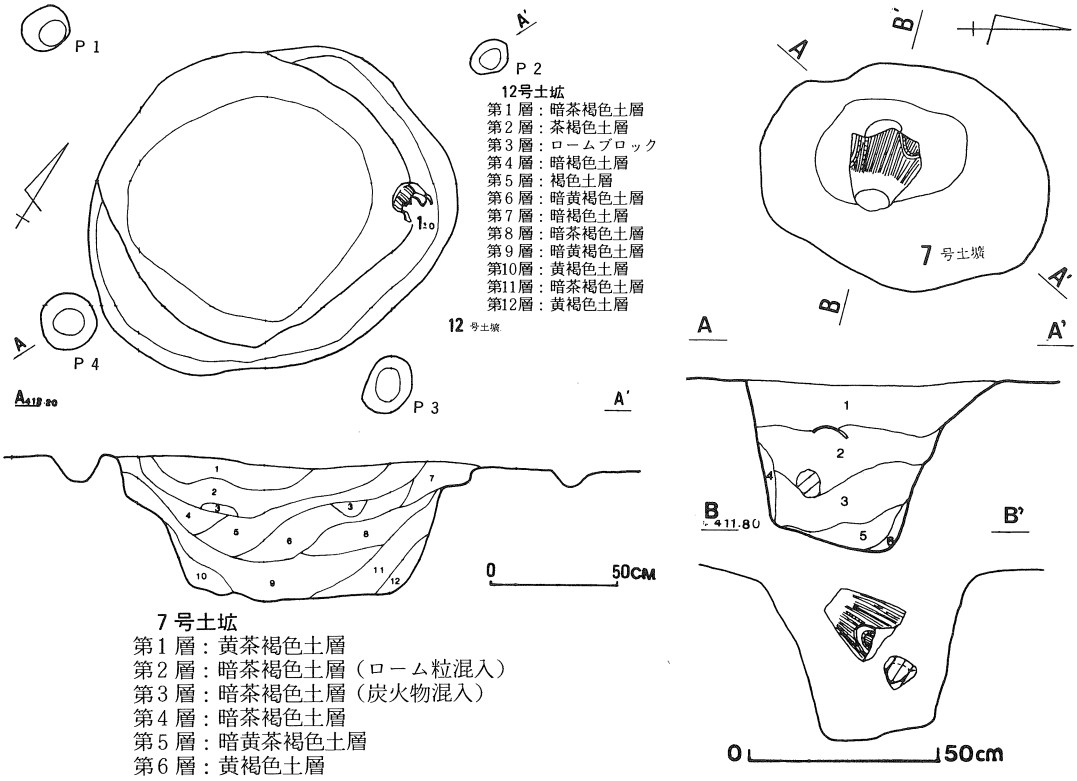
発掘区西部、８－０区に位置する。ローム層上面で確認され、平面形は長円形を呈し、規模は 130×75cmを測る。深さは60cmを有し覆土は７層に分けられる。南半部が一段深く掘り込まれるが、北半も円形に掘りこまれ２連ピット状を呈している。遺物は出土していない。

11号土坑　（第17図）

発掘区西部、８－０区に位置する。東端の一部が発掘区域外となる。ローム層上面で確認され、平面形は楕円形を呈し、規模は65×55cmを測る。深さは70cmを有し、円筒状断面を示す。覆土は７層に分けられる。遺物は出土していない。

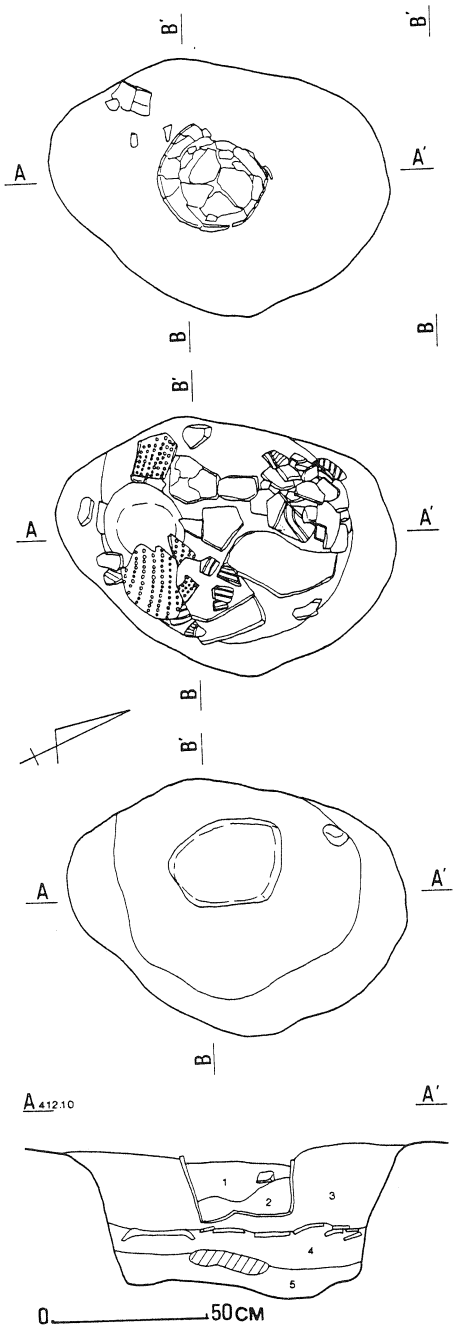
７号土坑　（第18図、図版４）

発掘区西半、９－０区に位置する。ローム層上面で確認され、平面形は楕円形で、規模は80×60cmを測る。深さは50cmを有し、覆土は６層に分けられ断面形は円筒状を呈する。覆土中位より縄文時代中期（曽利期）に属する土器が出土している。土器は深鉢形土器の胴部下半で、逆位でやや斜立した状態で認められ10×８cm程の角礫を覆う状態で検出された。



７号土坑
第１層：黄茶褐色土層
第２層：暗茶褐色土層（ローム粒混入）
第３層：暗茶褐色土層（炭火物混入）
第４層：暗茶褐色土層
第５層：暗黄茶褐色土層
第６層：黄褐色土層

第18図　７号土坑及び12号土坑　〔1/20，1/30〕



第19図　13土坑〔1／20〕

13号土坑
第1層：暗茶褐色土層（粘性、しまりなし、小礫、ローム粒混入）
第2層：暗茶褐色土層（粘性、しまりなし、炭火物、焼土微量混入）
第3層：土層観察不備
第4層：黄褐色土層（粘性、しまりなし、ローム主体層）
第5層：黒色土（粘性、しまりなし）

12号土坑

（等18図、図版4）

発掘区西部、13—0区に位置する。8号住居址中央部を切る。

平面形は不整円形を呈し、規模は75×70cmを測る。深さは55cmを有し覆土は12層に分けられ、全体にローム粒子の混入が顕著である。坑底は中央が僅かに深い凹レンズ状を呈し、壁は垂直に立つが掘り込み面近くで段部を有し、テラス面をつくる。周囲にはほぼ十文字に径15～20cmのピットが4ヶ所穿たれる。深さはそれぞれP_1～58cm、P_2～14cm、P_3～19cm、P_4～18cmを測る。

縄文時代中期(曽利期)に属する深鉢型土器の完型品が1点テラス面上から斜位の状態で検出された。

13号土坑　（第19図、図版4）

発掘区西端、5—L区に位置する。

中央に埋甕が埋設された土坑であり確認面はローム面であるが上部は削平を受け、西端部にも攪乱を受けている。

平面形は楕円形を呈し、規模は、110×90cmを測る。深さは50cm程を有し断面形はタライ状を呈するが底面は凹凸を有する。

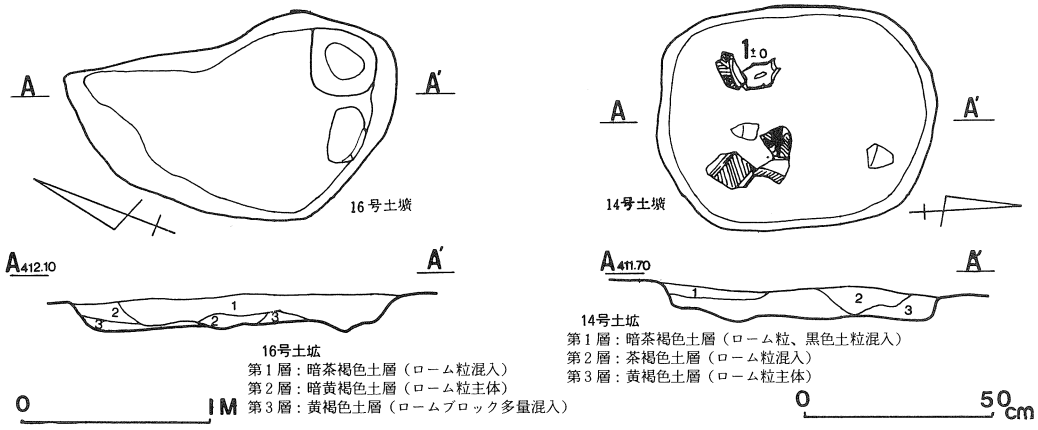
土坑底部には厚さ5～10cmにわたって黒色土が埋め戻される。土坑中央部の黒色土上面には38×28cmで厚さ5cm程の偏平な礫が敷かれる。角礫上部は再度、黄褐色土に

よって５cm程埋め戻され、その上面には土器片が土坑一面に敷きつめられる。土器は全て同一個体の深鉢型土器の破片であり、当該土器を破砕した後黄褐色土上面に敷きつめたものと考えられる。しかる後、土坑中央に別個体の深鉢型土器が埋設されている。埋設された土器は、敷きつめられた土器面より更に５cm程浮き正位の状態で検出された。土器は上半部を欠損し胴部径36cm、底径26cmで現存高は30cm程を測るものであり、付近に散乱する土器片等から考えても、更に高さを有していたものであろう。埋甕内覆土は２層に分かれ、炭化物が混入するが特に下層において顕著であり、上層には小礫が認められた。

土坑内埋土（第３層）については調査の不手際により土層観察をなしえなかったが、埋甕調査時の所見によれば、ローム主体の土層であった。

尚、本址については、本来いわゆる屋外単独埋甕であり土坑とは異なる性格の遺構として扱うべきであろうが、前述した様な土坑の有り様から考えて、ここでは土坑としてとりあげたものである。

遺物は埋設土器と敷きつめられた土器との２個体が認められ、共に深鉢型土器胴部下半である。



第20図　14号土坑及び16号土坑〔1/20・1/40〕

14号土坑（第20図）

発掘区の西端、３―Ｈ・Ｉ区に位置する。

確認面はローム面であるが上部をかなり削平されていると思われ現状では楕円形平面を呈し、規模は75×60cmを測る。深さは５～８cmしか遺存せず底面の凹凸は激しく、壁の立ち上がりは甘い。覆土は３層に分けられ、ローム粒の混入が著しい。

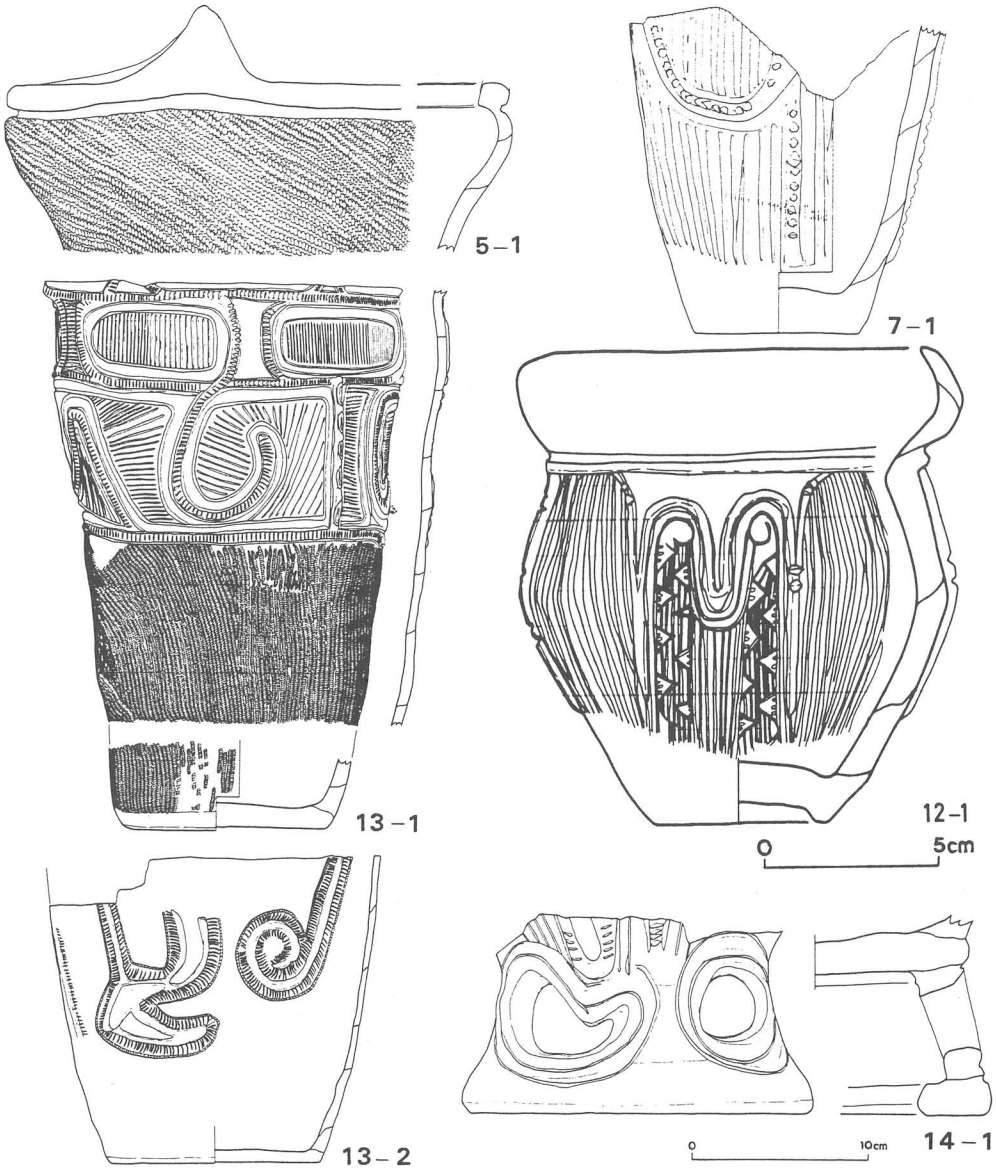
１は台付土器の脚部であり、周辺確認面に散乱していたものと接合する。土坑内での出土状態は、底面に密着しほぼ正立して認められ、上部の削平等の条件を考えてもほぼ原状を示しているものであろう。他の破片も全て底部に密着して検出された。

16号土坑　（第20図、図版４）

発掘区の西端、４－Ｊ・Ｋ区に位置する。

ローム面で確認されたもので不整楕円形を呈し、規模は 165×100cm を測る。深さは15cm程を有し断面形は盤状を呈する。覆土は３層に分けられるが、ローム粒の混入が顕著である。

底面南隅には径30cm程の小ピットが掘り込まれ土坑底面からは11cmの深さを有する。土拡中央部では底面から３～５cm程浮いて、大小の礫・土器片若干が出土している。



第21図土坑出土土器　〔1/2, 1/4〕

土坑出土の遺物　（第21～22図、図版７）

土器　５－１は、突起のつく口縁部破片である。口縁上部に一条の沈線がめぐり、以下胴部にはＲＬ単節縄文を密に施文している。

時期　縄文時代中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群第３類土器）に帰属されよう。

７－１は深鉢形土器の胴下半部であり、ヘラ状工具による粗い条線文と２本１組の懸垂文が施されている。

時期　縄文時代中期後半、曽利Ⅰ式期（第Ⅳ群第１類土器）の所産であろう。

12－１は、口径10.5cm、器高13.4cmを測る完形の小形土器である。内湾する口縁部を無文帯として残し、胴部には縦位の条線を地文として、細かい粘土紐による懸垂文を垂下させている。５cm程にすぼまる底部は、上げ底状をなしている。

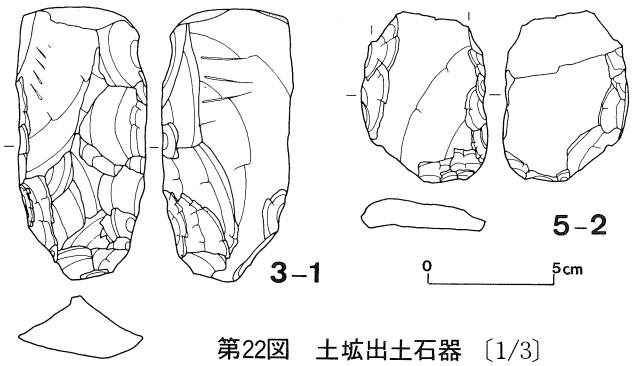
時期　縄文時代中期後半、曽利Ⅰ～Ⅱ式期（第Ⅳ群第１類土器）の所産であろう。

13－１は現存高50cmを測る大形の深鉢形土器である。胴上半部に刻み目のある隆帯による横帯区画文、下半部にＲＬ単節縄文をそれぞれ施している。13－２は象抽文が描かれる深鉢形土器であり、キャタピラ文と三角押文が用いられている。現存高34cmを測る。

時期　縄文時代中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群第３類土器）の所産であろう。

14－１は台付土器の脚部であり、円形及びひょうたん形の透しを各一対計４箇所設けている。内面にはタール状をなす炭化物が厚く付着し、黒色を呈する。

時期　縄文時代中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群第３類土器）に帰属しよう。



第22図　土坑出土石器〔1/3〕

石器３－１は打製石斧、短冊型。石質：ホルンフェルス。基部は自然面。素材は、横長剝片。４号土坑から出土している。図示したものの他に、打製石斧の小破片１点（安山岩）、剝片１点（黒曜石）が出土している。

５－２は打製石斧、短冊型（欠損)。石質：頁岩。５号土坑から出土。

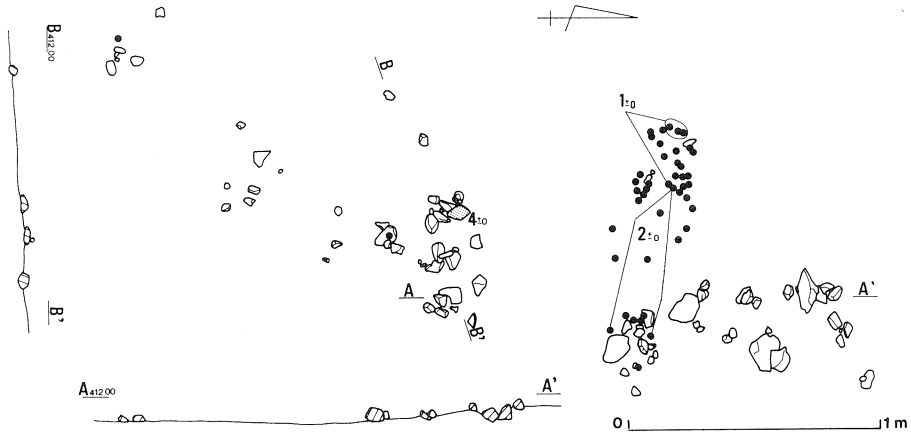
他に、１号土坑から剝片類が２点（黒曜石）、７号土坑から剝片（黒曜石）１点が出土した。

C）　集石遺構

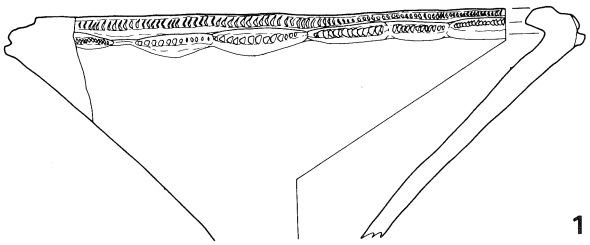
１号集石遺構　（第23～25図）

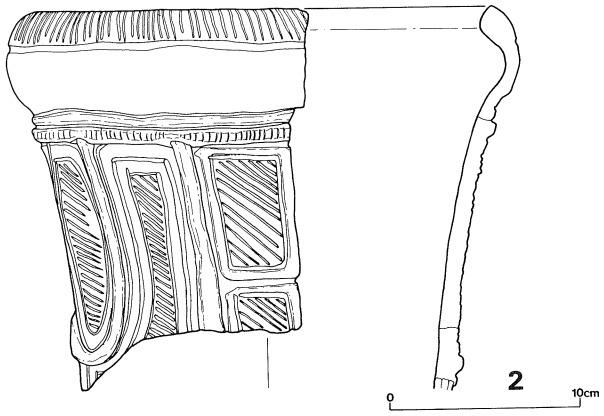
発掘区南端、３－１区に位置する。

ローム層上面で確認されたが、耕作等による削平の激しいところであり、遺存状態は悪い。

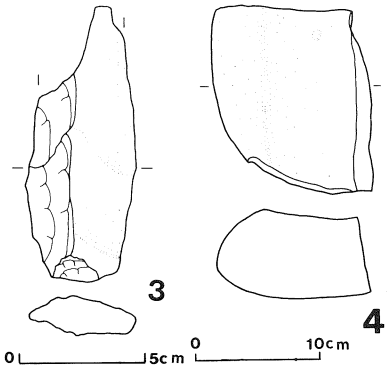


第23図　1号集石遺構　〔1/30〕





第24図　1号集石遺構出土土器　〔1/4〕



第25図　1号集石遺構出土石器〔1/3〕

大小88個の角礫及び43点の土器片が2～3のグループに分かれて認められた。北側の一群は礫の大きさが比較的大きく、かつまとまりが散満である。南側の一群は小型の礫が集中して認められた。また両者に挾まれた状態で土器片が集中して認められた。

土器　1は三角押文を特徴とする浅鉢型土器であり、口径推定26cmをはかる。2は口径推定24cmをはかる深鉢型土器である。内湾する口縁上部に縦位の短沈線文をめぐらし胴部には縦位構成の区画文を施している。

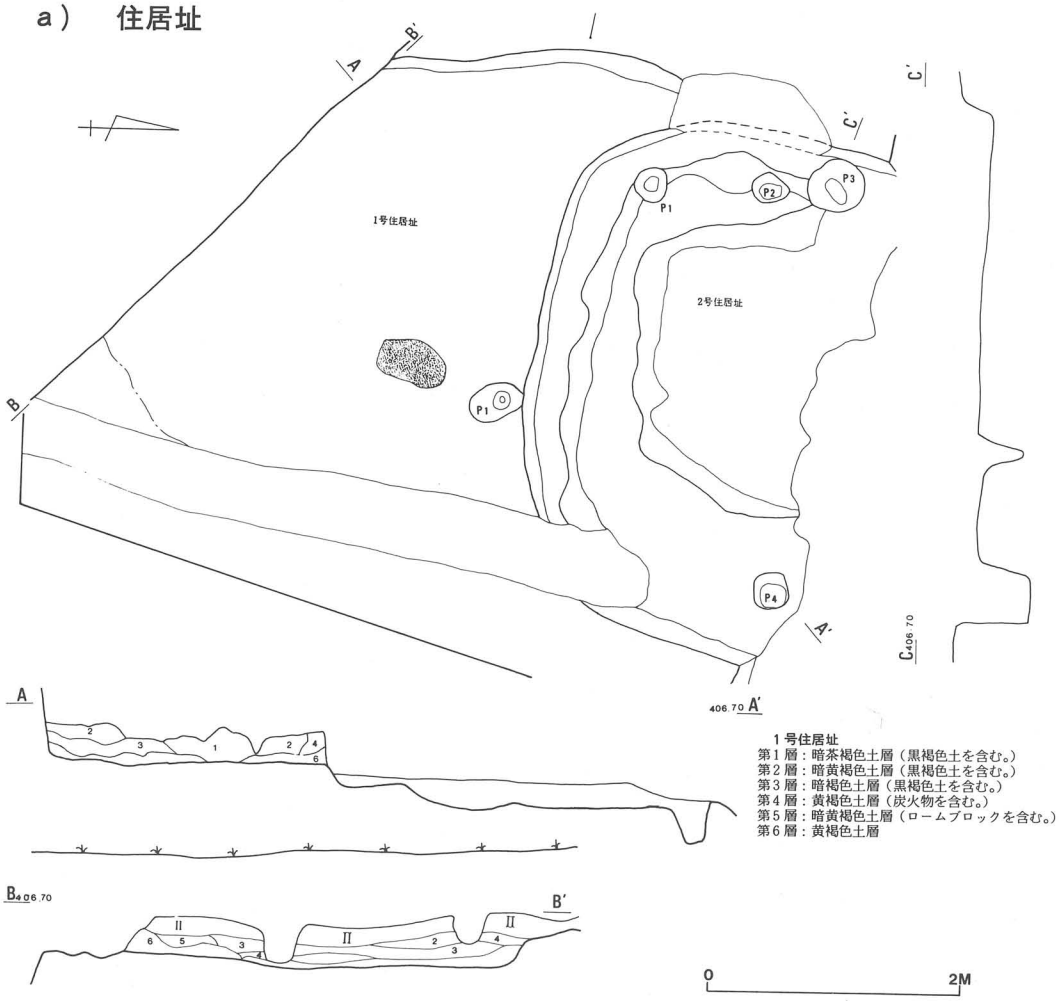
時期　縄文時代中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群第3類土器）の所産である可能性が強い。

石器　3、打製石斧、短冊型。石質：ホルンフェルス。器面の風化が著しい。4、石皿。石質:安山岩。表面に凹（深さ約5㎜）を1つ有す。他に、剝片（黒曜石）が1点出土している。

（百瀬忠幸）

第２節　古墳時代以降の遺構

a）　住居址



第26図　１号住居址及び２号住居址掘り方〔１／60〕

１号住居址（第26図）

発掘区最東端、57―Ｂ・Ｃ、58―Ｃ区に位置する。北半部を２号住居址に切られ、また南端部は発掘区域外となり、更に上部をかなり削平されている。北西部分及び東側は攪乱を受けている。西約８ｍに３号住居址が存在する。

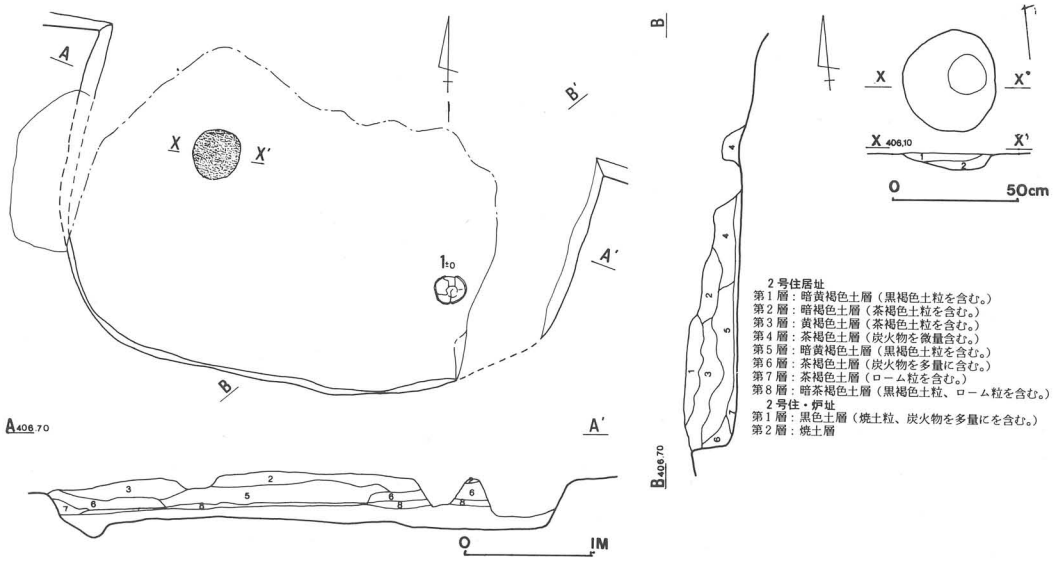
遺存状態は悪く前述した状況であり、平面形、規模、主軸方位等は明確にしえない。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は西壁で24cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

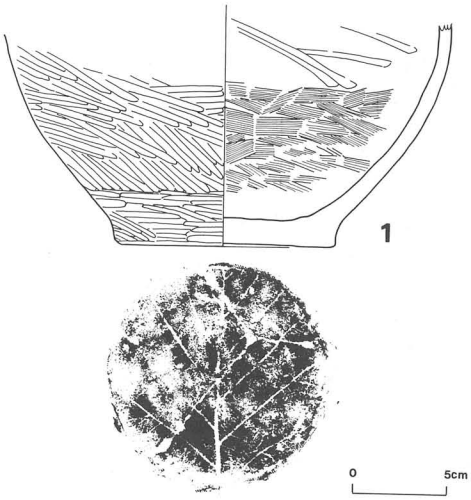
覆土は６層に分けられ自然堆積を示す。

床面の状態は非常に軟弱である。

ピットは１ヶ所検出され深さは約37cmを測る。貯蔵穴、周溝等は検出しえなかった。
住居址東寄り床面に焼土溜りが検出され炉址の痕跡と考えられる。規模は1.05×0.6mを測る。
掘り方は床下全域に及び底面は凹凸がみられ、床面からの深さは平均28cmである。
遺物は少なく、かつ細片化している為図示しえたものはない。



第27図　２号住居址及び炉址〔１／60　１／30〕



第28図　２号住居址出土土器〔１／４〕

２号住居址（第26～28図、第１表）

発掘区最東端部、57・58―Ｃ区に位置する。南側部分において１号住居址を切り、北側を１号溝によって切られる。東約８ｍに３号住居址が存在する。

遺存状態はあまり良くなく住居址南半部約１／２が遺存するのみである。平面形態は隅丸長方形を呈すると思われ規模は現状で2.1×4.1mを測るが、長軸は4.5m程にはなろう。

主軸方位はＮ―15°―Ｅにとる。

掘り込みはローム層に達し、壁高は南壁で約35cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は８層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は全体的に堅緻でほぼ平坦である。

ピットは掘り方底面から４ヶ所検出された。P_1が主柱穴と考えられる。深さはP_1―27cm、P_2―23cm、P_3―34cm、P_4―70cmを測る。貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

炉址は住居址西半部に構築され40×37cmのほぼ正円形を呈し、深さは８cmを測る。炉石はなく覆土は２層に分けられる。また炉を取り巻くように東西95cm、南北55cmの範囲で炭化物を含む焼土が存在する。

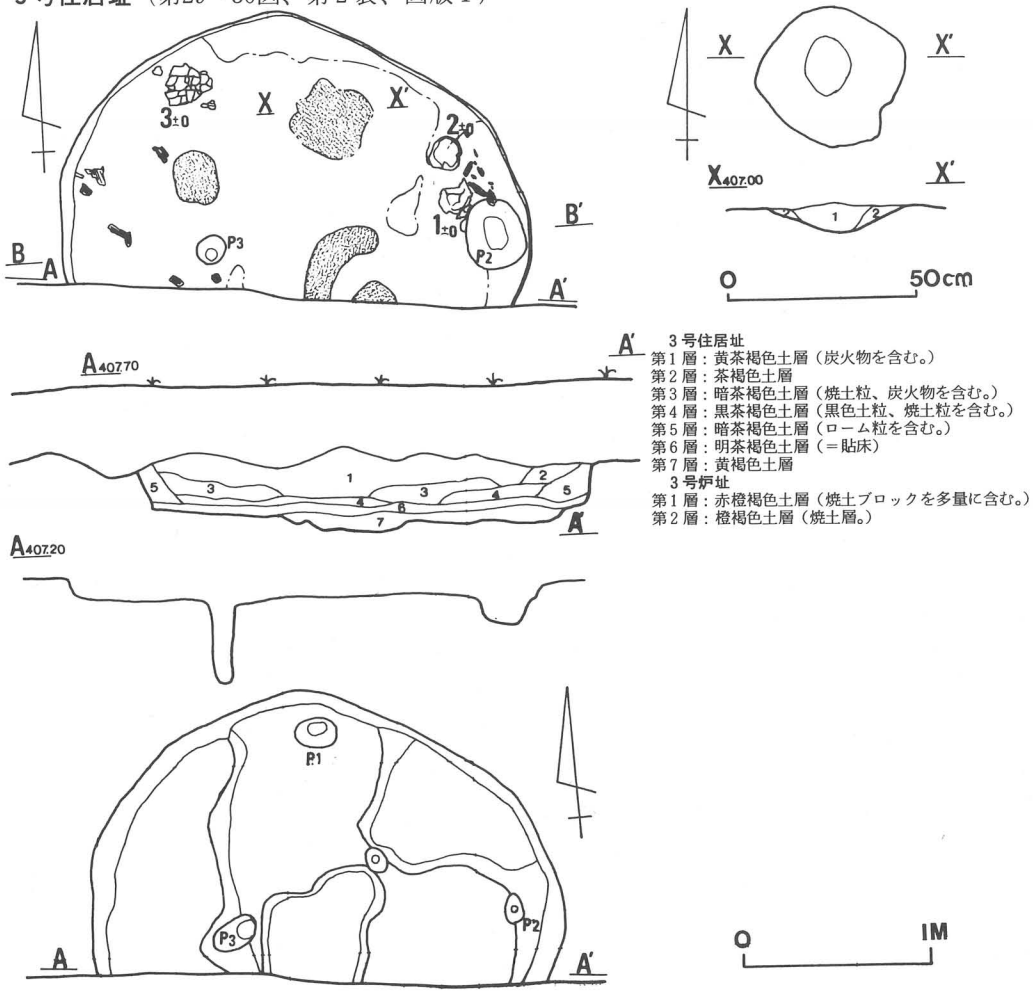
掘り方は床下全面に及び中央が深く周辺が浅く掘り込まれ壁際でわずかに段部を形成する。床面からの深さは３～24cmである。

出土遺物は少なく図示しえたものも１点である。壺１は東南部床面より出土している。

第１表　２号住居址出土土器観察表

1	壺	法量　底部径 11.59 cm　現存率　胴部下半～底部　完存　せいけい　外面―胴部下半斜め方向のヘラミガキ　底部付近横方向のヘラミガキ　底部簡単なナデ　底面木葉痕　内面―胴部下半ナデ　横及び斜め方向のハケ　底面簡単なナデ　胎土　密　焼成　良　色調　暗赤褐色

３号住居址（第29～30図、第２表、図版１）



第29図　３号住居址、掘古層及び炉址〔１／20、１／40〕

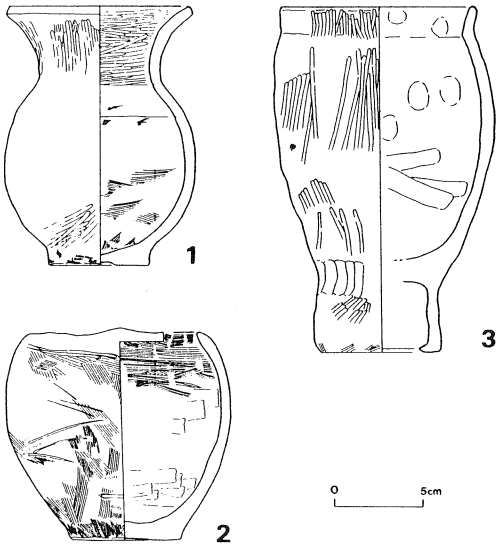
発掘区東半部54・55—C・D区に位置している。東約8mに1・2号住居址が重複して存在する。南半部が発掘区域外となり、住居址の約1/2を発掘しえたのみである。

遺存状態は不良で平面形態は円形あるいは楕円形を呈し規模は現状で1.5×2.5mを測るが、復元径は2.5×3m程となろう。主軸方位をN－27°—Eにとる。

掘り込みはローム層にまで達し、壁高は東壁で22cm、北壁で6cmを測り緩やかに立ち上がる。覆土は5層に分けられ自然堆積を示す。

床面は軟弱である。また床面には北東壁寄り及び南壁付近を中心として炭化材、焼土が検出されており焼失住居と推測される。

ピットは3ヶ所が検出されP1、P2が主柱穴である。P1—21cm、P2—10cm、P3—43cmを測る。



第30図　3号住居址出土土器〔1／4〕

貯蔵穴は検出されない。

周溝は北西部分から南東部分にかせて断続的に巡っており巾5～10cm、深さは最深。で5cmを測る。

炉址は住居址北東部に構築され40×37cmのほぼ円形を呈し、深さ9cmである。覆土は2層に分けられる。

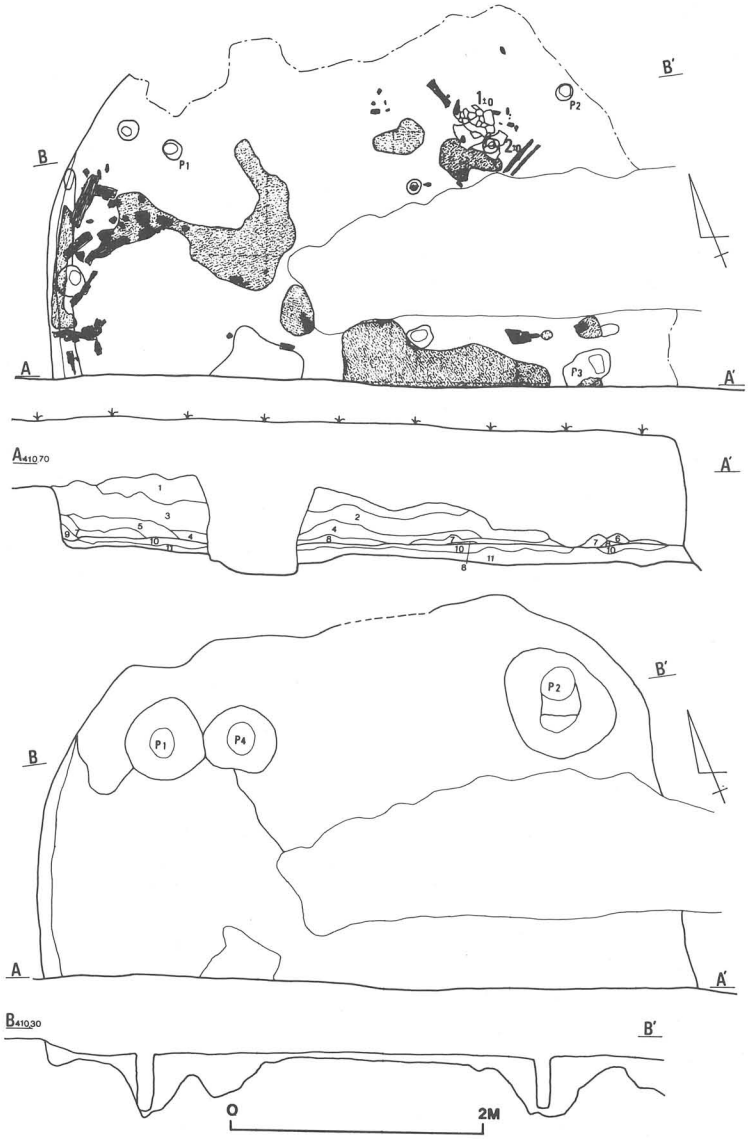
掘り方は床面全体に及び中央が浅く周囲が深く掘り込まれるが壁際は一旦浅く掘り込まれ段部をなす。底面は凹凸がみられるが全体的には平坦である。床面からの深さは5～45cmを測る。

出土遺物は少なく図示しえたものも僅かである。小型壺1と無頸壺2は北東壁寄り、台付甕3は北西壁際より出土している。

第2表　3号住居址出土土器観察表　(1)

1	小型壺	法量　口縁部径10.32cm　頸部径6.71cm　胴部径10.53cm　底部径5.71cm　器高14.52cm　現存率　ほぼ完存　せいけい　外面—口唇部ナデ　口縁部～頸部　縦方向のヘラミガキ　胴部下半斜め方向のヘラミガキ　底部斜め方向のハケ　底面簡単なナデ　内面—口縁部～頸部横方向のヘラミガキ　胴部上半～中頃横方向のハケ　胴部下半～底面横及び縦方向のハケ　全体的にマメツが激しい。胎土　密　焼成　良であるがやや軟質　色調　赤褐色
2	無頸小型壺	法量　口縁部径9.44cm　胴部径12.48cm　底部径5.19cm　器高11.73cm　現在率3/4　せいけい　外面—口唇部簡単なナデ　口縁部ナデ　胴部上半斜め方向のハケ及び所々に横方向のヘラミガキ　胴部中頃縦及び斜め方向のハケ及び所々に横方向のヘヤミガキ　胴部下半縦及び斜め方向のハケ及び所々に横方向のヘラミガキ　底部付近縦方向を主とするハケ　底面　木葉痕　内面—口縁部横方向のハケ　胴部下半横方向を主とした細いハケ　胴部中頃横方向のヘラケズリの後ナデ　胴部下半横方向のヘラケズリ　底面簡単なナデ　胎土　密　焼成　良　色調　暗赤褐色

3	台付甕	法量　口縁部径 10.9 cm　胴部径 12.2 cm　脚部底径 6.7 cm　脚接合部径 7.4 cm　器高 19.4 cm　現存率　ほぼ完形　せいけい　外面―口唇部、指頭押えのちナデ。口縁部縦方向のミガキ。胴部上半、縦方向のミガキ。胴部下半斜位のミガキ。脚部、ハケのちミガキ。脚接合部、指押え　内面―上半、指押えのちナデ。下半、ヘラ押え。胎土　密。焼成　良。良調　暗茶褐色。



第31図　4号住居址及び掘り方〔1／60〕

第1層：黒褐色土層（粘性なくしまりもない。ローム粒、茶褐色土粒を含む。）
第2層：明茶褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。黒褐色土粒、ローム粒を含み、ロームブロックを少量含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもやや強い。黒褐色土粒、ローム粒を微量含む。）
第4層：黒茶褐色土層（粘性普通しまりはやや強い。ローム粒、黒褐色土粒、炭火物、ロームブロックを少量含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもない。ローム粒、茶褐色土粒を含み、炭火物、焼土ブロックを多量に含む。）
第6層：黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ロームブロック層。）
第7層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもないロームブロック、焼土ブロック、焼土粒、炭火物ブロックを多量含む。）
第8層：暗赤褐色土層（粘性なくしまりもない。焼土粒、炭火物ブロックを多量に含み、ローム粒を少量含む。）
第9層：暗黄褐色土層（粘性なくしまりもない。ローム粒を多量、焼土粒、炭火物を含む。
第10層：黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒、黒褐色土ブロックを含む。）貼床
第11層：黄褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を含む。

4号住居址

（第31～32図、第3表）

発掘区中央部やや東寄り34・35―H・I区に位置する。6号溝により北壁を、攪乱によって中央部を切られている。西約5 mに5・6号住居址が重複して存在する。南半部が発掘区域外となり住居址の約1/2を検出したにすぎない。

遺存状態は不良で平面形態は隅丸長方形を呈すると思われ規模は現状で3×5.10 mを測るが、長軸は5.5～6 m程になるものと考えられる。主軸方位をN―23°―Eにとる。

覆土は9層に分けられ自然堆積の様相を示す。

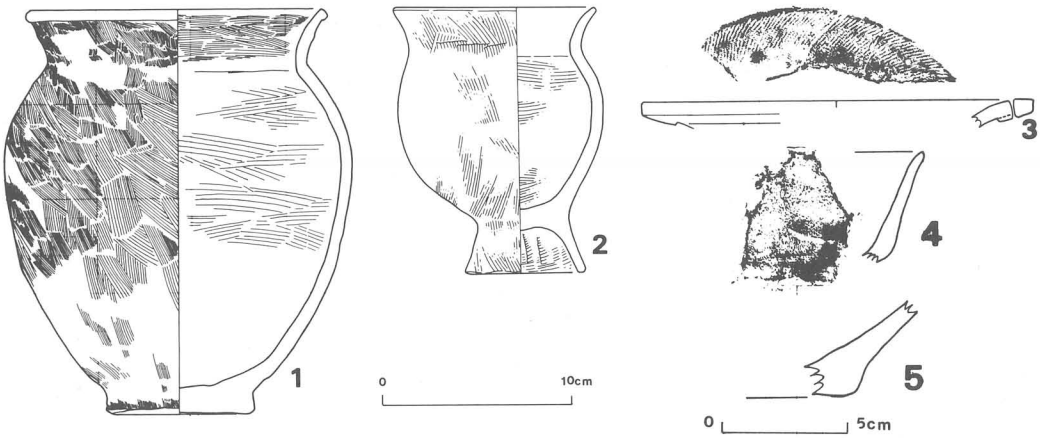
床面は堅緻で平坦である。壁際を中心として、ほぼ全域に炭化材、焼土を検出し、焼失住居であることを示している。

ピットは多数検出された。P_1、P_2 が主柱穴で深さはそれぞれ40cm、45cmであ

る。他は住居址内の各所に散在しており比較的大きなP_3は深さ約35cmを測る。P_4は掘り方面で検出され深さ30cmを測る。炉址、周溝共に検出されていない。

掘り方は床下全面に及びなだらかな凹凸を有するが、ほぼフラットな状態である。床面からの深さは23～25cmである。

出土遺物は少なく図示しえたものも僅かである。全体的に住居址東寄りから集中して出土しており、床面からは甕1と小型台付甕2がほぼ完形で出土している。

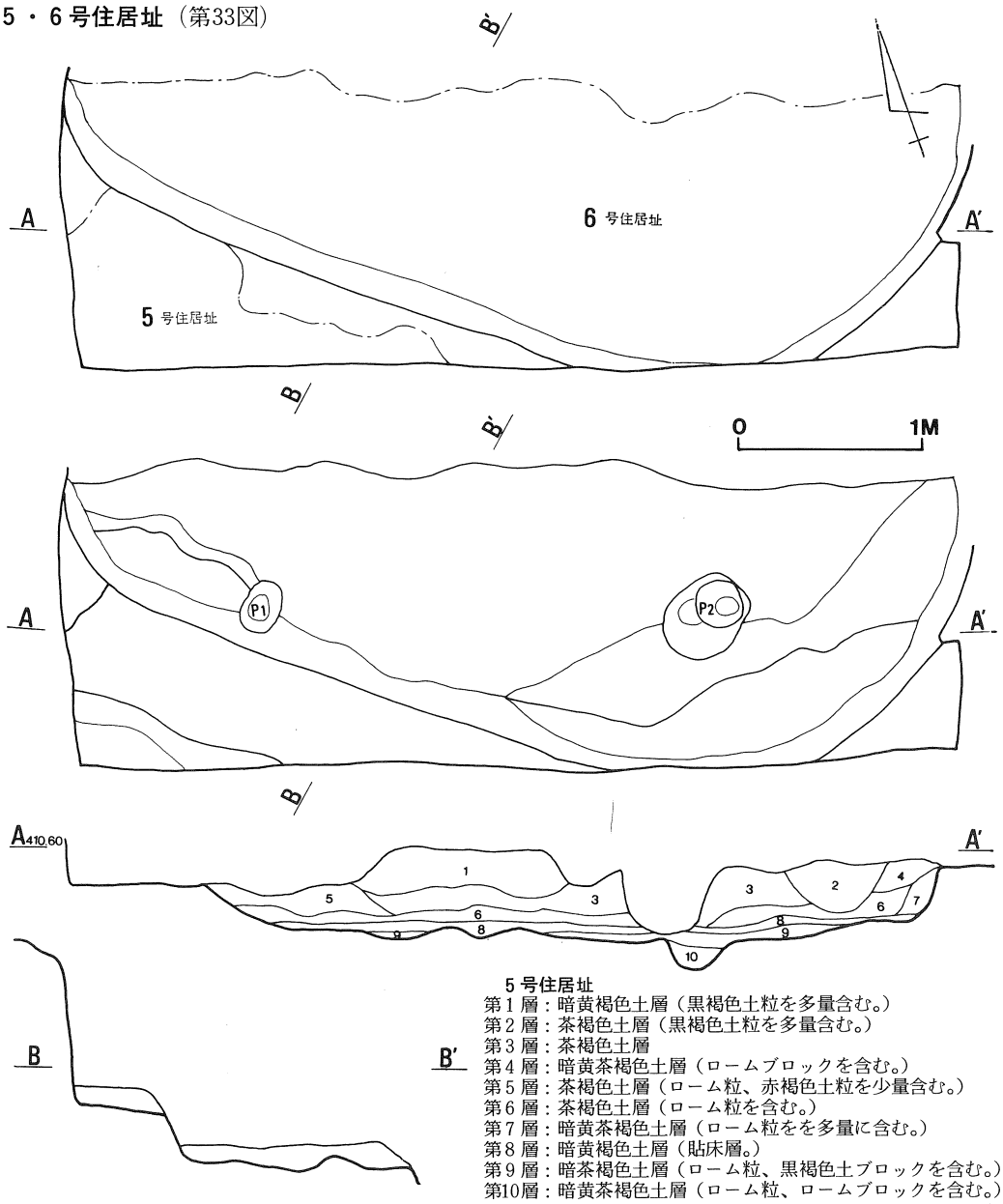


第32図　4号住居址出土土器〔1／3、1／4〕

第3表　4号住居址出土土器観察表

1	甕	法量　口縁部径(15.80)cm　頸部径(13.58)cm　胴部径(18.22)cm　底部径 7.74 cm　器高 21.32 cm　現存率　底部は完存　他は1/2　せいけい　外面―口唇部ナデ　口縁部～頸部縦及び斜め方向のハケ　胴部上半斜め方向のハケ　胴部中頃斜め及び縦方向のハケ　胴部下半斜め及び縦方向のハケ　底部付近縦方向のハケ　底面簡単なハケ　内面―口縁部～頸部横及び斜め方向のハケ　胴部横及び斜め方向の太いハケ　底面簡単なナデ　胎土　密。焼成　良。色調　暗赤褐色。
2	台付甕	法量　頸部径 9.43 cm　胴部径 10.84 cm 脚接合部径 4.65 cm　脚部底径 6.24 cm　器高 13.08 cm 現存率　口縁部をわずかに残す。脚部は完存。せいけい　外面―口縁部～頸部　縦方向を主とするハケ　胴部（ヘラケズリ）、マメツしている。脚接合部指頭圧痕、縦方向のハケ　脚部縦方向を主とするハケ　内面―口縁部～頸部ナデ　胴部上半横及び斜め方向のハケ　胴部中頃～下半横方向のハケ後ナデ　脚部上半ナデ　脚部下半横方向のハケ　胎土　密。焼成　良。色調　暗茶褐色。
3	壺	法量　口縁部径 20.6 cm　現存率　口縁部片 1/5 せいけい　外面、ハケのち折り返しナデ。内面細縄文。胎土　白砂を含み密。焼成　良。色調　暗赤褐色。
4	壺	現存率　口縁片　せいけい　外面、ハケのちナデ。段部、横ハケ。内面、粗いハケ。胎土　白粒砂を含み密。焼成　良。色調　茶褐色。
5	壺	現存率　底部片　せいけい　外面、ミガキのちナデ。内面、ハケ。胎土　白粒砂を含み密　焼成　良。色調　赤褐色。

5・6号住居址（第33図）



第33図　5・6号住居址及び掘り方〔1／40〕

発掘区中央部31・32—Ⅰ・J区に位置する。東5 mに4号住居址が存在する。6号住居址はほとんどが6号溝によって切られており、南端部を検出しえたのみである。また5号住居址は6号住居址南東隅確認の為に発掘区を拡張した際に検出されたもので、北半部を6号住居址に切られ、南半部は発掘区域外となる為、そのごく僅かを確認しえたにすぎない。

遺存状態は、両住居共に悪い。5号住居址は床面の一部を確認しえたのみであるが、床面は堅緻な貼床である。掘り込みはローム面に達していた。

ピット、周溝、炉址は一切検出されていない。

掘り方は中央方向が深く、その周辺が浅く掘り込まれると考えられる。

6号住居址は南壁沿い一部を残すのみである。平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられ規模は現状で4.8×1.6mを測る。主軸方位は南壁からの推定であるがN－29°－EあるいはN－61°－Wにとるものと思われる。

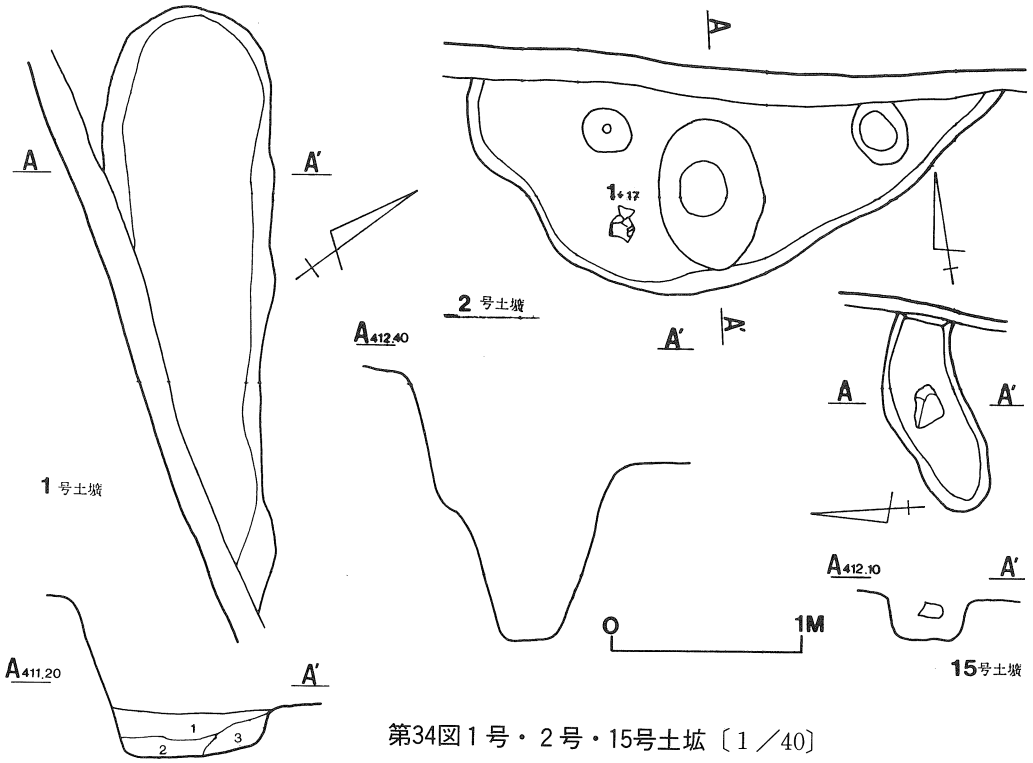
掘り込みはローム層にまで達し壁高は南壁で30cm、東壁が10cmを測り緩やかに立ち上がる。

覆土は8層に分けられ自然堆積を示す。床面は軟弱な貼床である。

ピットは2ヶ所で検出されている。P_2は南東コーナーにあり主柱穴と思われ深さ36cmを測る。貯蔵穴は認められない。また周溝、炉址についても検出されない。

掘り方は周辺が浅く中央が一段深く掘り込まれる。底面は凹凸を有し、床面からの深さは10cm前後で埋土は2層に分けられる。出土遺物は両住居址共に皆無である。

b　土坑　（第34～35図、第4表）



第34図1号・2号・15号土坑〔1／40〕

第1層：暗茶褐色土層（黒褐色土粒を微量含む。）
第2層：黒茶褐色土層（ローム粒を微量、黒褐色土粒を含む。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒を少量、カーボン粒、赤褐色土粒を微量、黒褐色土粒を含む。）

1号土坑（第34図）

発掘区中央、24—L区に位置する。南半部が発掘区域外となり北半部を確認したのみである。

形状は長円形を呈すると考えられ、規模は現長3×0.9㎝を測る。掘り込みはローム層中まで達し、深さは25㎝で鍋底状断面を示す。覆土は3層に分けられ黒褐色土粒が多量混入する。

遺物は台付甕脚部が1点覆土下部より出土しているが小片の為、図示しえなかった。

構築時期は不明であるが、出土遺物・覆土に混入する黒褐色土が古墳時代初頭の住居址覆土に混入するものと同一であること等から古墳時代初頭の所産としておきたい。

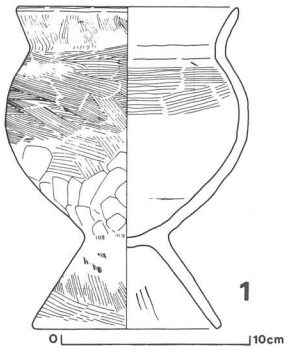
2号土坑（第34～35図　第4表）

発掘区中央西寄りの、18—P区に位置する。8号住居址を切って構築される。

北半部は発掘区域外となり、南半部を確認したのみである。形状は楕円形あるいは隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は現状で2.8×1.0ｍを測る。深さは40㎝程で断面は鍋底状を呈する。

底部には3ヶ所ピットが設けられ中央のものは80×50㎝の楕円形平面を呈し深さは土坑底面より66㎝を測る。

西壁寄り、覆土中位からほぼ完形の台付甕1が出土している。横位であるが、口縁部を僅かに下に向けた状態で検出された。



第35図2号土坑出土土器〔1/4〕

15号土坑（第34図）

発掘区南端、5—K区に位置する。本址は16号溝確認中にその上面から検出されたものでⅡ層中から16号溝覆土内に構築されている。

東端が発掘区域外となっているが、ほぼ長楕円形を呈し、規模は、110×40㎝を測る。深さは30㎝程を測り、比較的平坦な底面を持つ。土坑上面から周辺にかけて大小の礫が認められたが、全て覆土上層からの出土である。

時代を判定する資料は得られなかったが、溝状遺構埋没後の所産であり、本遺跡にあっても比較的新しい時期のものであろう。

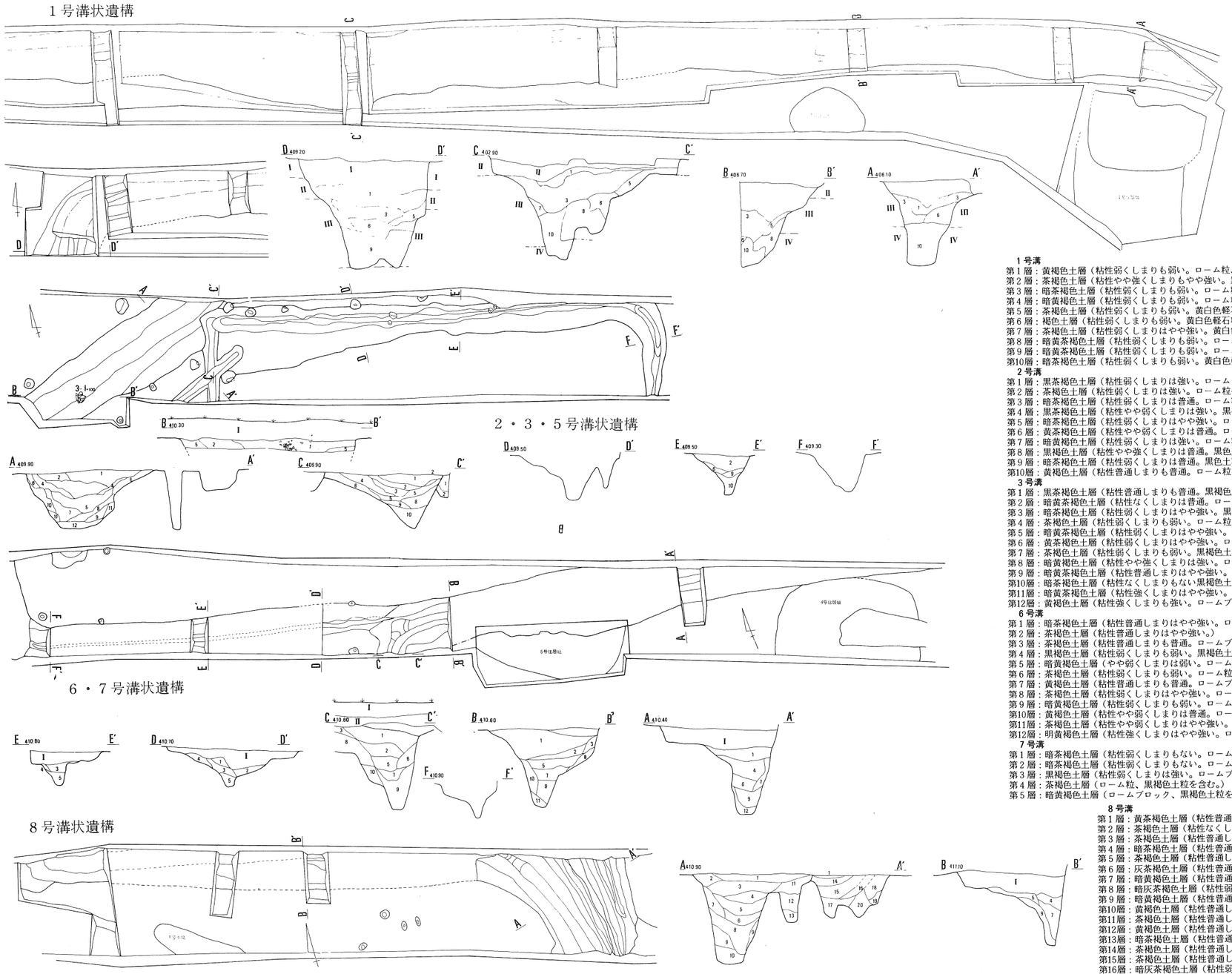
第4表、2号土坑出土土器観察表

1	台付甕	法量　口縁部径 11.66 ㎝　頸部径 10.24 ㎝　最大径 12.68 ㎝　脚接合部径 4.39㎝　脚部底径 9.90 ㎝　器高 16.98 ㎝　現存率　ほぼ完形　せいけい　外面—口唇部横方向のハケ、ナデ　口縁部～頸部縦及び斜め方向のハケ　胴部上半横及び斜め方向のハケ　胴部下半指頭圧痕　脚接合部ナデわずかに縦方向のハケ　脚上部わずかに斜方向のハケ　脚下部斜方向のハケ　内面—口縁部～頸部ナデ　胴部上半横方向のハケ　胴部下半横方向のナデ　脚部ナデ　胎土　密。焼成　良。色調　暗茶褐色。

c　溝状遺構（第36～38図、図版3）

1号溝　58—D区から西走、46—E区で南へ曲る。巾は確認面2.5ｍ、底面0.6～1ｍ、深さ1.3～1.5ｍ。断面形は漏斗状。覆土は10層、最下層（第9・10層）は人為的堆積か。

2号溝　39—G区から東走、43—F区で南へ曲る。西端で3号溝を切る。巾1.5ｍ、深さ1ｍ



1号溝
第1層：黄褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒、黄白色軽石粒を少量、黒色土粒を微量含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。黒褐色土粒を少量、ローム粒を含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒、黄白色軽石粒を少量を含む。）
第4層：暗黄褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量に含む。）
第5層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黄白色軽石粒を多量に、ローム粒、ロームブロックを含む。）
第6層：褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黄白色軽石粒を多量に、ローム粒を含む。）
第7層：茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。黄白色軽石粒を多量に、黒色土粒、ローム粒を含む。）
第8層：暗黄茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を少量、黄白色軽石粒、黄白色軽石ブロックを含む。）
第9層：暗黄茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ロームブロックを多量に、黄白色軽石ブロックを少量を含む。）
第10層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黄白色軽石ブロックを多量に含む。）

2号溝
第1層：黒茶褐色土層（粘性弱くしまりは強い。ロームブロック、黒色土粒、黒色土ブロックを多量に含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性弱くしまりは強い。ローム粒を多量に、赤褐色土粒、ロームブロックを少量、黒色土粒を含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりは普通。ローム粒、黒褐色土層を少量、赤褐色土粒を微量を含む。）
第4層：黒茶褐色土層（粘性やや弱くしまりは強い。黒褐色土粒を多量に、ロームブロックを含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒、黒色土粒を少量を含む。）
第6層：黄茶褐色土層（粘性やや弱くしまりは普通。ローム粒を多量に、黒色土粒を少量、ロームブロックを微量含む。）
第7層：暗黄褐色土層（粘性弱くしまりは強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を微量含む。）
第8層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりは普通。黒色土粒を多量に、ローム粒を微量含む。）
第9層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりは普通。黒色土粒を少量、ロームブロックを微量、ローム粒子を含む。）
第10層：黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ローム粒を多量に含む。）

3号溝
第1層：黒茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を含む。）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性なくしまりは普通。ローム粒、ロームブロックを少量、炭火物を微量、黒褐色土粒、黒褐色土粒を含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒、炭火物を少量、赤褐色土粒を微量を含む。）
第4層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒、赤褐色土粒を微量、黒褐色土粒を含む。）
第5層：暗黄茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。黒褐色土粒を多量に、赤褐色土粒を少量、ローム粒を含む。）
第6層：黄茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を含む。）
第7層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒、ロームブロック、赤褐色土粒を微量を含む。）
第8層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりは強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を微量を含む。）
第9層：暗黄茶褐色土層（粘性普通しまりはやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量、ロームブロックを含む。）
第10層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもない黒褐色土粒を多量に、ローム粒を含む。）
第11層：暗黄茶褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、茶褐色土粒を少量、黒褐色土粒を微量を含む。）
第12層：黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ロームブロックを多量に、黒褐色土粒を含む。）

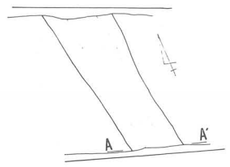
6号溝
第1層：暗茶褐色土層（粘性普通しまりはやや強い。ロームブロックを少量、ローム粒を含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性普通しまりはやや強い。）
第3層：茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。ロームブロックを含む。）
第4層：黒褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒を多量に、ロームブロックを少量を含む。）
第5層：暗黄褐色土層（やや弱くしまりは弱い。ロームブロックを多量にを含む。）
第6層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量にを含む。）
第7層：黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ロームブロック、黒褐色土粒を含む。）
第8層：茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒を多量に含む。）
第9層：暗黄褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ロームブロックを多量にを含む。）
第10層：黄褐色土層（粘性やや弱くしまりは普通。ロームブロックを少量を含む。）
第11層：茶褐色土層（粘性やや弱くしまりはやや強い。ロームブロック、暗茶褐色土粒を含む。）
第12層：明黄褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ロームブロック、暗茶褐色土粒を含む。）

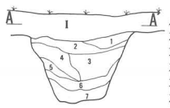
7号溝
第1層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりもない。ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第2層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりもない。ローム粒を多量にを含む。）
第3層：黒褐色土層（粘性弱くしまりは強い。ロームブロックを少量含む。）
第4層：茶褐色土層（ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第5層：暗黄褐色土層（ロームブロック、黒褐色土粒を含む。）

8号溝
第1層：黄茶褐色土層（粘性普通しまりは強い。ローム粒を含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性なくしまりもない。小礫、砂粒、ローム粒を含む。）
第3層：茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。小礫、砂粒、ロームブロックを含む。）
第4層：暗茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。小礫、砂粒、ロームブロックを含む。）
第5層：茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。砂粒、小礫を少量、ロームブロックを含む。）
第6層：灰茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。砂粒を含む。）
第7層：暗黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。暗茶褐色土粒、ロームブロックを含む。）
第8層：暗灰茶褐色土層（粘性弱くしまりは普通。ロームブロックを含む。）
第9層：暗黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ローム粒、ロームブロックを多量含む。）
第10層：黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ロームブロックを含む。）
第11層：茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。砂粒、ローム粒を含む。）
第12層：黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ローム粒、ロームブロック、茶褐色土粒を含む。）
第13層：暗茶褐色土層（粘性普通しまりは弱い。ロームブロックを少量含む。）
第14層：茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。砂粒を多量に、ロームブロックを少量を含む。）
第15層：茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。ロームブロック、砂粒を含む。）
第16層：暗灰茶褐色土層（粘性弱くしまりは普通。ローム粒を含む。）
第17層：暗黄褐色土層（粘性弱くしまりは普通。ローム粒を多量に含む。）
第18層：暗灰茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。ローム粒を含む。）
第19層：暗黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ローム粒、茶褐色土粒を含む。）
第20層：黄褐色土層（粘性普通しまりも普通。ロームブロック、ローム粒、茶褐色土粒を含む。）

第36図　溝状遺構(1)〔1／160〕

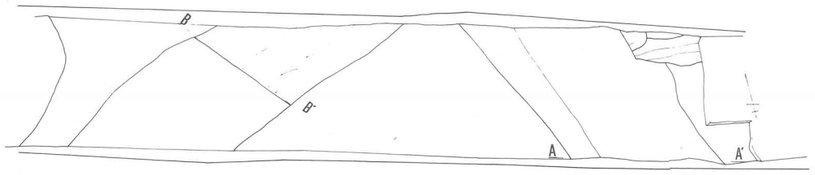
4号溝状遺構

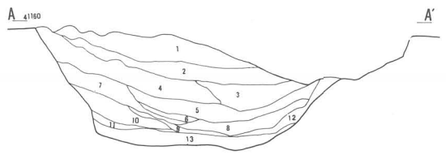




4号溝
第1層：暗黄褐色土層
第2層：黄茶褐色土層
第3層：暗黄茶褐色土層
第4層：暗黄褐色土層
第5層：黄色土層
第6層：暗茶褐色土層
第7層：明黄褐色土層

9・10号溝状遺構



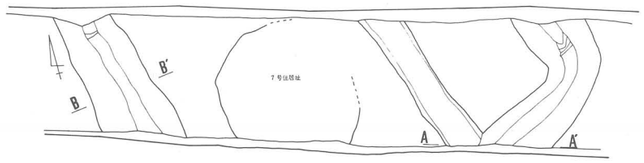


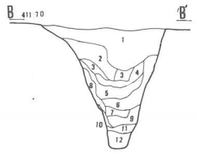
9号溝
第1層：明茶褐色土層（粘性普通しまりも普通。黒褐色土粒、ローム粒、ロームブロックを多量に含む。）
第2層：黒褐色土層（粘性なくしまりはやや強い。ローム粒、赤色スコリアを少量含む。）
第3層：黒褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒、赤色スコリア、明黄褐色土ブロックを多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第4層：茶褐色土層（粘性なくしまりもない。黒褐色土粒、ローム粒を多量含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第6層：黒褐色土層（粘性なくしまりもない、黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第7層：暗茶褐色土層（粘性普通しまりは弱い。黒褐色土粒、ローム粒を多量に、ロームブロックを少量含む。）
第8層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもない。ロームブロックを少量、黒褐色土粒、ローム粒を含む。）
第9層：暗黄褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒、ロームブロックを少量含む。）
第10層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第11層：暗黄茶褐色土層（粘性やや強くしまりはない。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第12層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもない。ロームブロックを少量、黒褐色土粒、ローム粒を含む。）
第13層：明黄褐色土層（粘性弱くしまりは強い。ロームブロックを多量含む。）

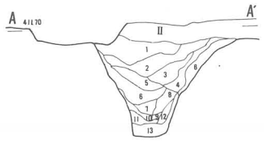
10号溝
第1層：茶褐色土層（粘性なくしまりは強い。ローム粒を多量に、赤色スコリアを含む。）
第2層：黒褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒、赤色スコリアを少量、黒褐色土粒を微量含む。）
第3層：茶褐色土層（粘性なくしまりはやや強い。ローム粒を多量に、赤色スコリア、赤褐色土粒を微量含む。）
第4層：黒褐色土層（粘性なくしまりは強い。ローム粒、赤色スコリアを微量含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりは普通。黒褐色土粒を少量、ロームブロック、赤色スコリアを微量、ローム粒を含む。）
第6層：暗黄褐色土層（粘性なくしまりはやや強い。黒褐色土粒、ローム粒を多量に含む。）
第7層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒、赤色スコリアを含む。）
第8層：黒黄褐色土層（粘性やや強くしまりは強い。ローム粒を多量に、赤色スコリアを微量含む。）
第9層：茶褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。ローム粒を多量に、ロームブロックを微量、黒褐色土粒を含む。）
第10層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第11層：暗黄褐色土層（粘性弱くしまりもやや弱い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量、ロームブロックを微量含む。）
第12層：黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を微量を含む。）
第13層：暗黄褐色土層（粘性なくしまりはやや強い。黒褐色土粒、ローム粒、ロームブロックを含む。）
第14層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりはない。黒褐色土粒を多量に、ロームブロックを少量含む。）
第15層：明黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ロームブロックを多量に含む。）
第16層：黄褐色土層（粘性強くしまりもやや強い。ローム粒、ロームブロックを多量に、黒褐色土粒を微量含む。）

11号溝
第1層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりは普通。赤色スコリアを微量、ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第2層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりは強い。ローム粒、赤色スコリアを微量含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ローム粒、黒褐色土粒を多量に含む。）
第4層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を含む。）
第5層：暗黄茶褐色土層（粘性なくしまりもない。黒褐色土粒を少量、ローム粒を含む。）
第6層：黒褐色土層（粘性やや弱くしまりは弱い。黒褐色土粒を多量に、ロームブロックを少量、ローム粒を含む。）
第7層：黄褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第8層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ロームブロックを微量、黒褐色土粒、ローム粒を含む。）
第9層：黒黄褐色土層（粘性やや強くしまりはない。黒褐色土粒、ローム粒を含む。）
第10層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒、ローム粒を含む。）
第11層：暗黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量を含む。）
第12層：黄褐色土層（粘性強くしまりもやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を微量含む。）
第13層：黄褐色土層（粘性なくしまりはやや強い。ローム粒を多量に含む。）

11・12号溝状遺構

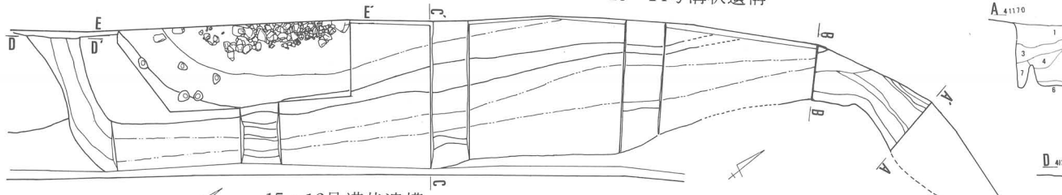


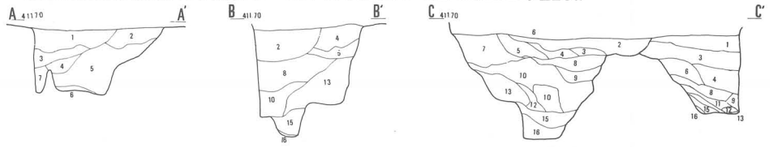


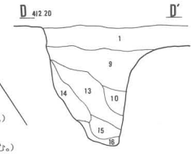


12号溝
第1層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒、黒褐色土粒を多量に含む。）
第2層：黒褐色土層（粘性普通しまりも普通。ローム粒を少量含む。）
第3層：黒黄褐色土層（粘性やや強くしまりはない。ローム粒、黒褐色土粒を多量に含む。）
第4層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ローム粒を含む。）
第5層：暗黄褐色土層（粘性やや弱くしまりもやや弱い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第6層：暗茶褐色土層（粘性やや弱くしまりもやや弱い。ロームブロックを微量、ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第7層：暗茶褐色土層（粘性なくしまりもない。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を含む。）
第8層：黄褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を微量に含む。）
第9層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第10層：暗黄褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第11層：暗茶褐色土層（粘性やや弱くしまりもやや弱い。黒褐色土粒、ロームブロックを含む。）
第12層：黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ロームブロックを多量に、ローム粒、黒褐色土粒を少量含む。）

13・14号溝状遺構



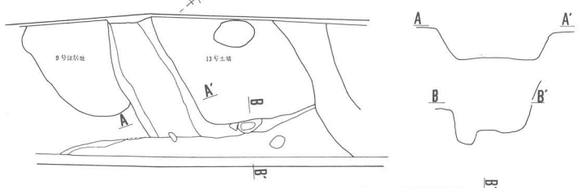




13号溝
第1層：黄褐色土層
第2層：褐色土層
第3層：暗黄褐色土層
第4層：淡黄茶褐色土層
第5層：黄褐色土層
第6層：暗黄褐色土層
第7層：明黄褐色土層

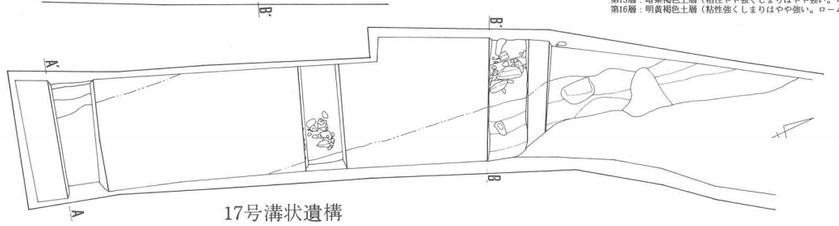
14号B溝
第1層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第2層：黄茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量に含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりは強い。黒褐色土粒を多量に、赤色スコリアを少量含む。）
第4層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりは強い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒、赤色スコリアを含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。小礫、ローム粒を含む。）
第6層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりも強い。黒褐色土粒、ローム粒、赤色スコリアを少量含む。）
第7層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ロームブロック、黒褐色土粒を含む。）
第8層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりは強い。ローム粒、赤色スコリアを少量、黒褐色土粒を含む。）
第9層：黒褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒、黄白色土粒を微量含む。）
第10層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりは強い。ローム粒 黒褐色土粒を多量に含む。）
第11層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を含む。）
第12層：暗黄茶褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ロームブロックを多量に、ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第13層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第14層：黒褐色土層（粘性強くしまりは強い。黒褐色土粒、ロームブロックを多量に、ローム粒を含む。）
第15層：暗黄褐色土層（粘性弱くしまりはやや弱い。黒褐色土粒を少量、ローム粒を含む。）
第16層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒、ロームブロックを少量含む。）

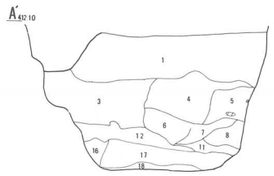
15・16号溝状遺構

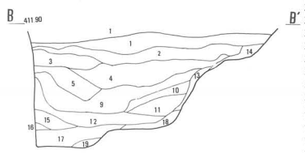


14号A溝
第1層：暗褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒を多量に含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黄白色軽石粒を少量、黒褐色土層、ローム粒を含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第4層：茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ロームブロックを多量に、ローム粒、黒褐色土粒を少量含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりはやや弱い。ロームブロックを少量、黒褐色土粒を含む。）
第6層：黒褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を微量含む。）
第7層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ロームブロックを多量に、ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第8層：暗茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）
第9層：黄茶褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量に、ロームブロック、黒褐色土粒を含む。）
第10層：暗茶褐色土層（粘性やや弱くしまりもやや弱い。ロームブロックを多量に、黒褐色土粒を含む。）
第11層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。小礫、黒褐色土粒を少量、ローム粒、ロームブロックを含む。）
第12層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を含む。）
第13層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりはやや弱い。ロームブロックを多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第14層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。ローム粒、ロームブロックを多量に、黒褐色土粒を微量含む。）
第15層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりはやや強い。ロームブロック、小礫を微量、ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第16層：明黄褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ロームブロックを多量に含む。）

17号溝状遺構







17号溝
第1層：黒褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性やや強くしまりはやや弱い。ローム粒、黒褐色土層を含む。）
第3層：明茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。黒褐色土粒を少量、ローム粒を含む。）
第4層：暗褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第5層：暗褐色土層（粘性弱くしまりは強い。炭火物を少量、ローム粒、黒褐色土を含む。）
第6層：茶褐色土層（粘性弱くしまりはやや強い。黒褐色土粒を少量、ローム粒、小礫を含む。）
第7層：茶褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ローム粒を少量、黒褐色土粒を含む。）
第8層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりも強い。黒褐色土粒、ローム粒を含む。）
第9層：暗褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ロームブロック、灰褐色土粒を少量。）
第10層：暗黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒、ロームブロックを多量に含む。）
第11層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ロームブロック、黒褐色土粒を含む。）
第12層：黒褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。黒褐色土粒を多量に、ローム粒を含む。）
第13層：黒褐色土層（粘性弱くしまりも弱い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を少量含む。）
第14層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。ローム粒を多量に含む。）
第15層：暗黄褐色土層（粘性やや強くしまりは弱い。ローム粒、黒褐色土粒を多量に含む。）
第16層：暗茶褐色土層（粘性強くしまりはやや強い。ローム粒、黒褐色土粒を含む。）
第17層：黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。ローム粒を多量に、黒褐色土粒を含む。）
第18層：明黄褐色土層（粘性やや強くしまりもやや強い。ロームブロックを多量に、ローム粒を少量含む。）
第19層：黒黄褐色土層（粘性強くしまりも強い。黒色土粒を多量に、ローム粒を少量含む。）

第37図　溝状遺構(2)〔1／160〕

断面形は漏斗状。覆土は10層、ロームの混入が顕著。

3号溝　38・39—G区。巾 2.1 m、深さ 1 m。溝両側に小ピットを持つ。覆土は12層、黒褐色土が主体。第1層下部から大型壺3—1が出土。破砕した後遺棄した可能性が強い。

4号溝　37—G・H区。巾、深さ共90cm。断面形逆台形状。覆土7層、黒褐色土が主体。

5号溝　39—E区。北端で2号溝と接する。巾、深さ共40cm。

6号溝　35—I区から西走、31—J区で南に曲る。巾1.3～1.8 m、深さ 1 3 m。断面形は深鉢状。覆土は12層、ローム粒の混入が顕著。

7号溝　28—K区～31—J区。巾は100 cm、深さ50cm、中央が漏斗状に一段深く掘りこまれる。覆土は5層、ローム粒の混入が顕著。西端で8号溝、東端で6号溝に接する。

8号溝　27—K区で西へ折れ、西走した後23—M区で再び北に折れる。2～3本の溝が平行して走り一括して8号溝とする。西側の溝は巾150 cm、深さ160 cm、断面深鉢状、覆土は12層ロームの混入が顕著。中央の溝は巾80cm、深さ80cm、断面深鉢状、西側の溝と同一のものか。東側のものは巾150 cm、深さ80cm、底部は二条に分かれ断面W形。7号溝と接する。東側の溝は西側の溝に切られる。

9・10号溝　22—M区～18—N区。巾は共に3.2～3.5m、深さ1.5m。断面逆台形、9号溝は東側が、10号溝は西側がひらき気味に立つ。覆土は16～20層、黒褐色土が縞状に堆積。

11・12号溝　11号溝は18—N区。12号溝は15—O区。共に巾1.3～1.5 m、深さ1.5～1.2 m。断面形は深鉢状、11号溝は西側が12号溝は東側が急角度に立つ。覆土は12～13層、黒褐色土と暗黄褐色土が互層をなす。

13号溝　9・10—P区。東端は北へ曲がる。巾1 m、深さ60cm。

14号溝　8—P区から南走。5—L区で西へ曲がる。2本の溝が平行して走り、東側を14A溝、西側を14B溝とした。14A溝は巾2.2m、深さ1.3m。断面形は逆台形で底部に段部を有する。覆土は16層、ローム粒の混入が顕著。14B溝は巾2m、深さ1.0～1.2m。断面形は逆台形、溝底面は平坦。覆土は16層、最下層上面に大小の礫が集積。

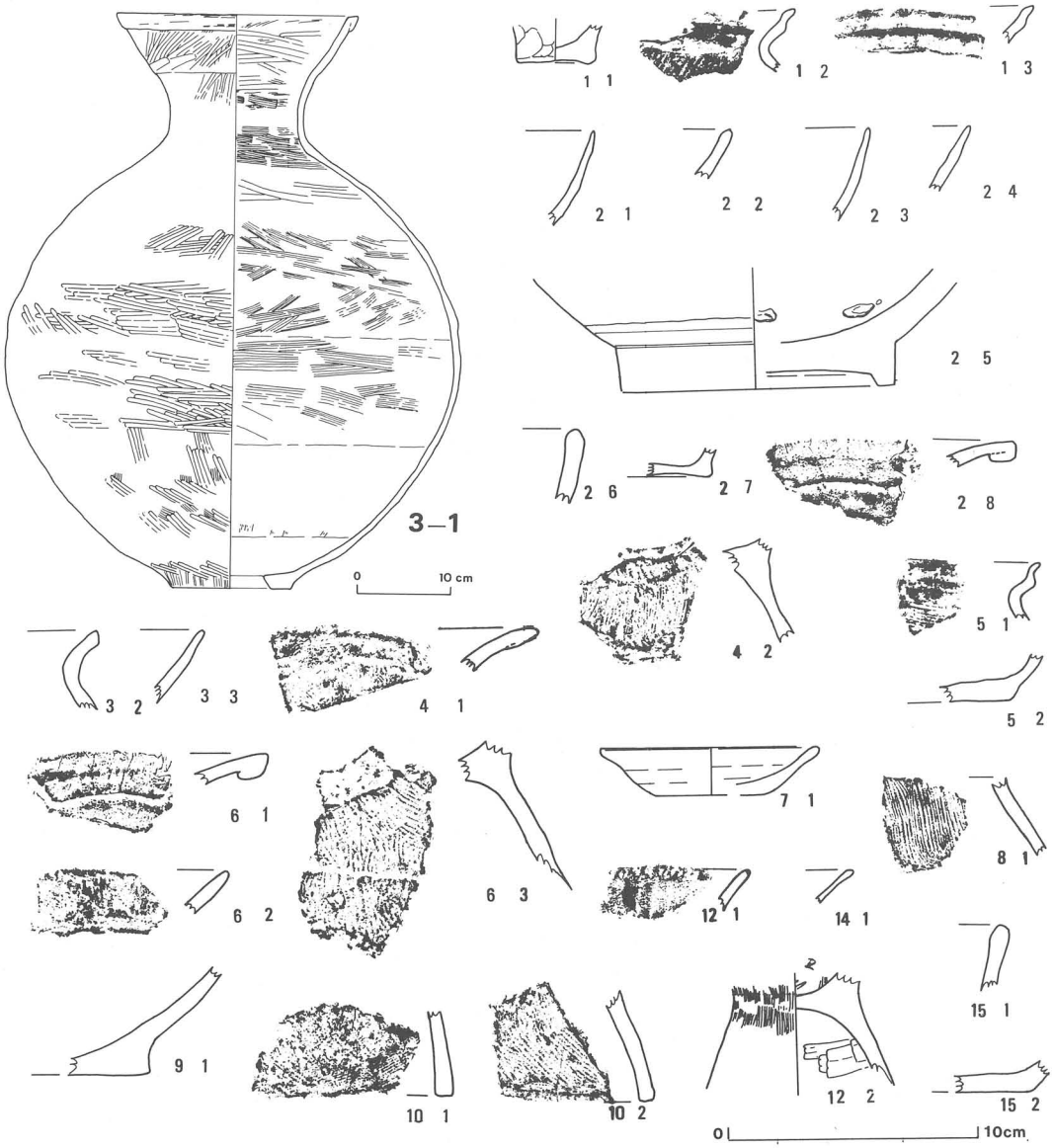
15・16号溝　5—K、6—L区で切り合って存在する。15号溝は巾1.5 m、深さ23cm。16号溝は巾1.5m、深さ43cm。断面形は共に皿状。

17号溝　3—I・J区～1—F区まで南—北に走る。確認面巾不明、底部巾は2.5 m、深さ1.3 m。断面形は逆台形、底面は平坦で一部段部を有する。覆土は19層、中位に大小の礫が流入。

出土遺物（第38図、図版5）

1号溝　1はミニチュア土器底部、底径3.2 cm、外面に指頭圧痕。胎土密。焼成良好、色調茶褐色。2、3はS字状口縁甕口縁片、胎土密、焼成良好、色調茶褐色、外面斜のハケ、口縁部は内外面共に強いナデ。

2号溝　1～3は天目茶腕片。1～2はやや焼成が甘い。1は黒色釉、2は鉄釉、3は黄



第38図　溝状遺構出土土器〔1／4　1／3〕

緑色釉。1～2は瀬戸系。3が美濃系のもの。4は灰白色釉が施される志野系の茶碗片。5は瀬瀬戸美濃系の近世陶器、片口鉢底部。底径は11cm、高台は 1.9cmでケズリ出し。焼成堅緻、黄緑色釉、6～7は土師質土器共に盤一部。7は内外面共に黒色。8は壺口縁、内外面共ナデ　胎土密。色調暗茶褐色。

3号溝　　1は壺、口径25.6cm、頸部径14.2cm、胴部径48.2cm、底部径12.8cm、高さ63cm、胴部は球状に張る。頸部は内湾気味に立ち、僅かに段部を有する。口縁は折り返される。底部は焼成後穿孔、外面はハケのちミガキ、口縁はナデ、内面はハケ、頸部は粗いミガキ。色調赤褐色。

焼成は甘い。２は小型壺口縁片。内外面共にミガキ。色調赤褐色。焼成良好。３は高坏片。内外面共にミガキ、口唇部はナデ。色調赤褐色。焼成良好。

４号溝　１壺口縁片。外面ハケのちナデ、内面ミガキ、胎土、焼成良好。色調暗赤褐色。

５号溝　１Ｓ字状口縁甕口縁。外面斜方向のち横方向のハケ、口唇部内外面強いヨコナデ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。２壺底部。外面ミガキ。色調赤褐色。

６号溝　１壺。外面ハケのちナデ、内面ハケのちミガキ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。２小型壺。内外面ミガキのちナデ。胎土、焼成良好。色調茶褐色。３台付甕脚部。内、外面ハケ。胎土、焼成良好。色調茶褐色。

７号溝　１カワラケ1/４個体。巻き上げ後ロクロ成形、内外面共にナデ、底部は時計方向の回転糸切り。胎土、焼成良好。色調明茶褐色。

８号溝　１甕肩部。外面粗いハケ。内面細いハケ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。

９号溝　１壺底部。外面ミガキ、底部はハケのちナデ、内面ハケ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。

10号溝　１、２共に台付甕脚部。共に内面ハケ。胎土、焼成良好。色調茶褐色。

12号溝　１甕口縁。内外面ハケのちナデ。口唇部刻目。色調黒褐色。２台付甕脚部。胎土、焼成良好。色調茶褐色。

14号溝　灯明皿。内外面ナデ、両面にスス付着。胎土、焼成良好。色調明茶褐色。

15号溝　１甕口縁。内面ナデ。色調茶褐色。２壺底部。色調暗茶褐色。

（吉岡　弘樹）

第３節　遺構外の出土遺物

ａ　土器

第Ⅰ群土器（第39図１～７）

縄文時代早期の土器である。２類に分類される。

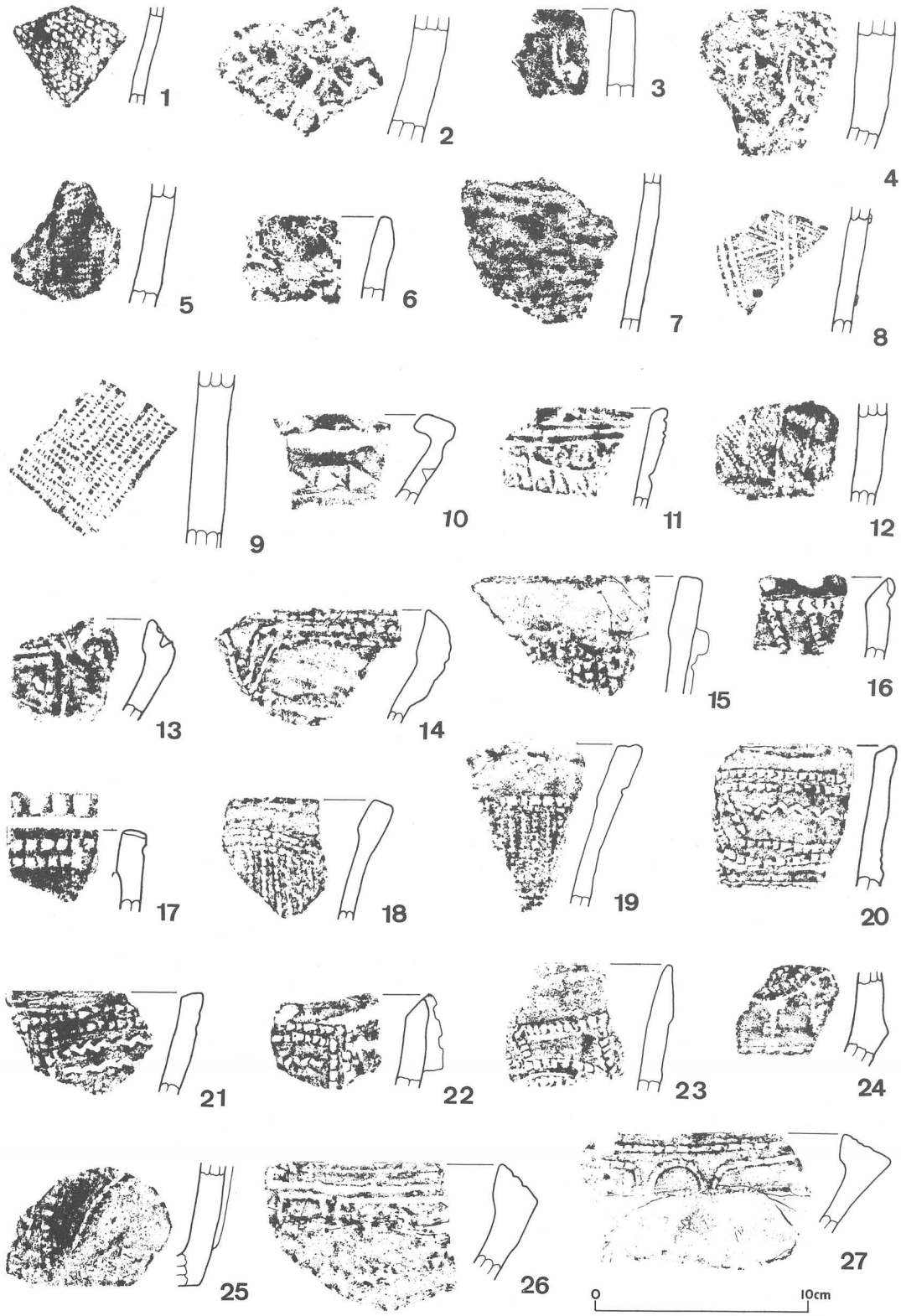
第１類土器（１～５）：縄文時代早期前半、押型文系土器である。出土総数は６片と少ない。１は格子目押型文が施された胴部破片。茶褐色を呈し、器厚５㎜と薄手のつくりである。

２は粗大な楕円押型文が施されるもの。器厚15㎜と厚手であり、胎土に砂粒と微量の植物繊維含んでいる。３・４は長さ４㎝程の原体を２つ折りにして「U」字状の側面圧痕を施したもの。原体は無節Ｒの縄である。胎土に粗い砂粒・石英、さらに植物繊維をやや多く含んでいる。器厚は12～16㎜と厚手。５はＲＬ単節縄文が施された胴部破片である。

１・５にやや不明な点を残すが、２～４は押型文系土器の中でもその終末期に位置づけられている高山寺式系土器に近い段階のものであろう。

第２類土器（６・７）：縄文時代早期後半の土器である。小破片を含めて11片が出土している。

６は平縁の口縁破片。無文土器である。くすんだ褐色を呈し、胎土に植物繊維を多く含んでい



第39図　遺構外出土土器(1)〔1／3〕

る。7は同様の胴部破片であるが、内・外面に横方向を中心とする擦痕をとどめている。

ともに。早期後半、貝殻条痕文系土器の中でも、茅山上層式を含めた新しい段階のものと考えられる。

第Ⅱ群土器（第39図8～12）

縄文時代前期末葉～中期初頭の土器。出土総数は8片と少ない。

8は半截竹管による綾杉状の条痕を地文として、結節状の押引文・ボタン状の貼付文が施される。胎土に石英を含み、堅緻なつくりである。9は細い粘土紐を密に貼り付け、さらにヘラ状工具による鋭い刻み目を加えている。器厚16mmと厚手、内面研磨される。10は三角形印刻文を口縁下部にめぐらすもの。11・12は縄文を地文とするもの。原体はともにＲＬ単節縄文。11は平縁の口縁部破片であり、三角形状の抉り文や截痕文が施されている。

8は諸磯Ｃ式、9は前期終末期の土器、10～12は五領ヶ台式に相当する。

第Ⅲ群土器（第39図13～第40図48）

縄文時代中期前半～中葉の土器である。4類に細別した。

第1類土器（13～27）：主に、楕円形区画により文様帯が構成され、角押文によって特徴づけられるもの。

13・14は細い施文具によって角押文が施されるものの、区画文構成をとらないものである。15～25はほぼ区画文が構成される深鉢形土器であり、13・14に比べ、やや太めの施文具により角押文を描出している。15・18・19・23は口縁上部に幅広の無文帯を残すものであり、19は口唇面にも1列の角押文を加えている。26・27は浅鉢形土器の口縁部破片。一部に「コ」の字状、「アーチ」状の文様が施されている。

第2類土器（28～34）：主に、重帯する三角形区画により文様が構成され、いわゆる三角押文が施されるもの。

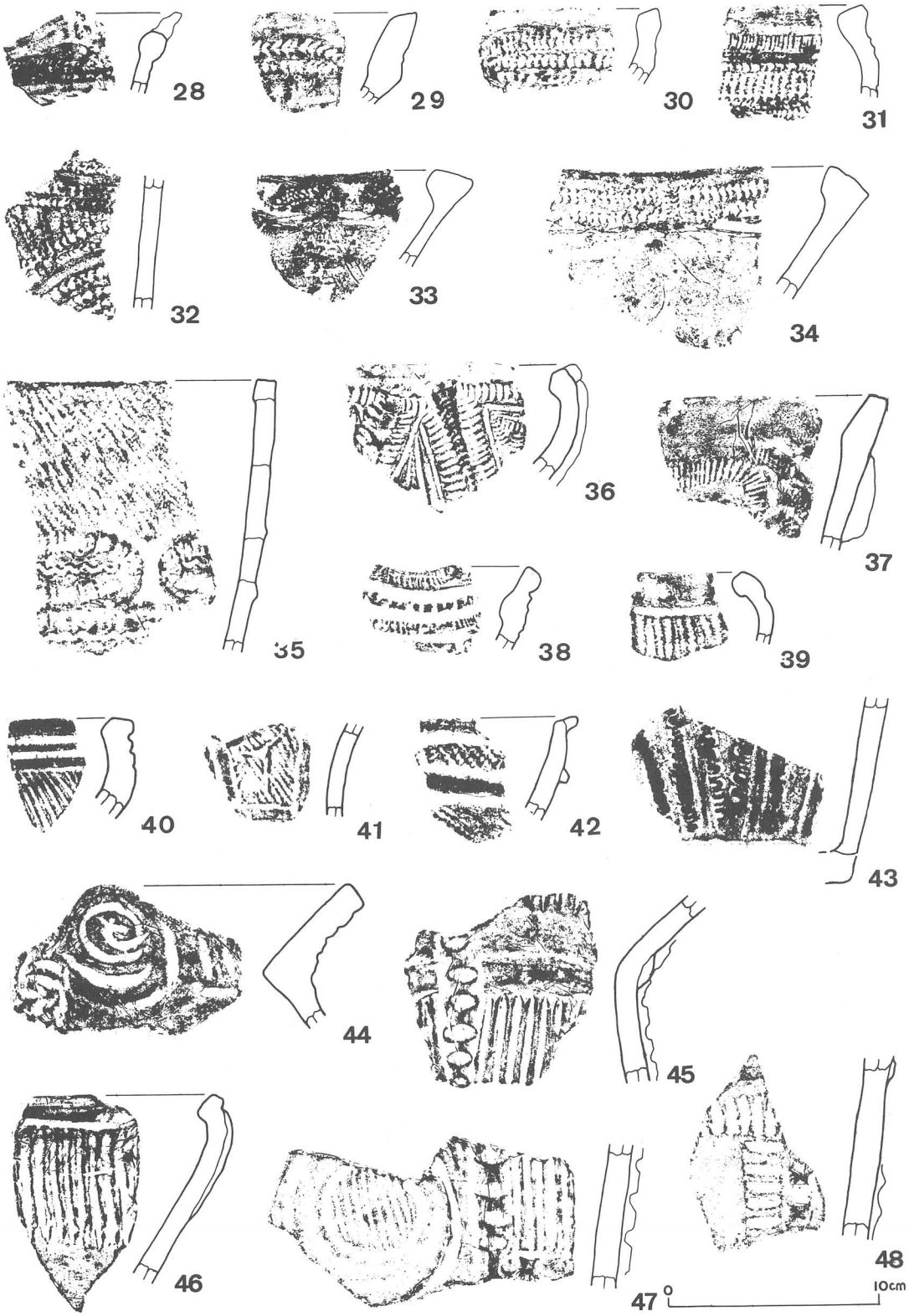
28～32は深鉢形土器。31は上部が内湾する平縁の口縁部破片であり、三角押文とともにキャタピラ文が併用されている。33・34は浅鉢形土器。33は三角押文による「アーチ」状の文様を口縁上部にめぐらし、一部に三角形の抉り文を施している。

第3類土器（35～43）：種々の区画文や抽象文が施されるもので、爪形文やキャタピラ文が多用される。

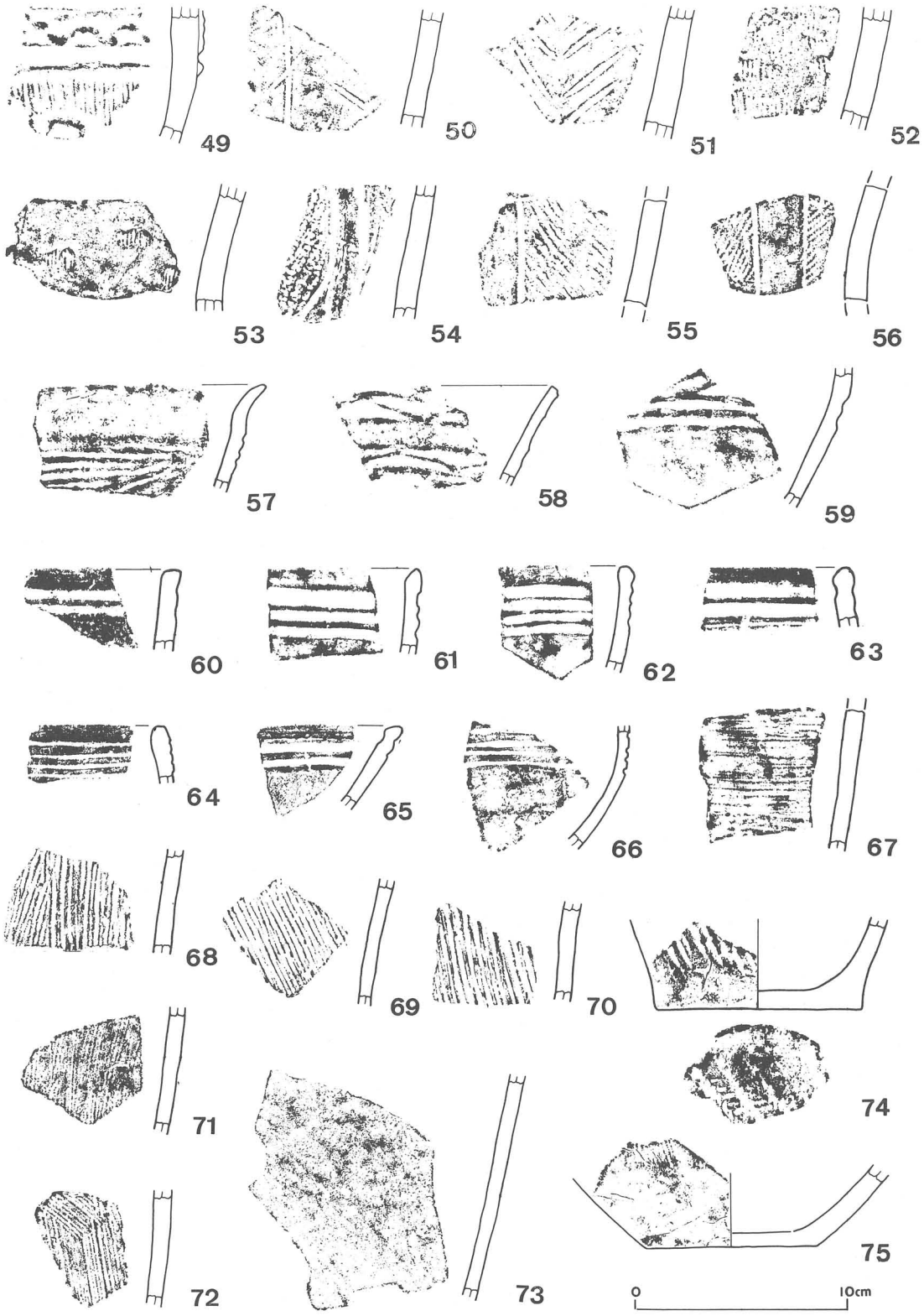
35は平縁の口縁部破片、上部に幅広の縄文帯をめぐらし、以下横帯する楕円区画文を施している。39は口縁上部に一条の沈線がめぐり、胴部に縄文を密に施している。40は区画文が施されるもの。

第4類土器（44～48）：刻み目のある太い隆帯や扁平な貼り付け文により、大柄な文様が構成されるものである。

44は山形状の大きな突起のつく口縁部破片。46は内湾しながら大きく開く平縁の口縁部破片で



第40図　遺構外出土土器(2)〔1／3〕



第41図　遺構外出土土器(3)〔1／3〕

あり、上部に縦位の沈線文をめぐらしている。

第１類土器は狢沢式、第２類土器は新道式、第３類土器・第４類土器はそれぞれ藤内式・井戸尻式に相当しよう。

第Ⅳ群土器（第41図49～56）

縄文時代中期後半の土器である。２類に細別した。

第１類土器（49～53）：曽利系土器を一括した。

49は頸部付近の破片であり、直線状・波状の貼り付け文が施されている。50・51は短沈線により、「八」の字状文が施されるもの。52・53は櫛歯状工具による刺突文のみにより文様が構成されている。

第２類土器（54～56）：加曽利Ｅ系土器を一括した。

54は隆起線区画内に縄文を充填するもの。55・56はいわゆる磨消縄文が施されるものである。縄文原体は54・56がＲＬ単節縄文、55がＬＲ単節縄文である。

第１類土器49は曽利Ⅱ式、同50～53は曽利Ⅳ～Ⅴ式に、第２類土器54～56は加曽利ＥⅢ～Ⅳ式に比定される。

第Ⅴ群土器（第41図57～75）

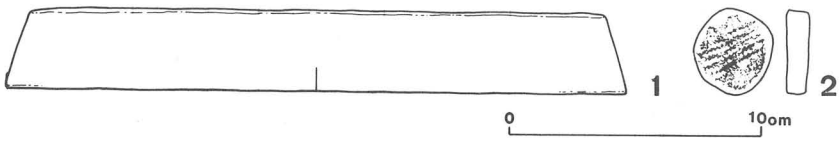
縄文時代晩期末葉の土器である。

57～59は浮線網状文が施されるもの。57・58は胎土に砂粒・石英・白色不透明粒子を多く含み、器壁は粗い。59は内・外面ともに研磨されている。60～66は口縁上部に数条の沈線をめぐらすものであり、63・65は内面に１条の凹線がめぐっている。内・外面ともに研磨される。66の沈線文部には赤色塗彩の痕跡をとどめている。60～64は深鉢形土器、65・66は鉢形土器であろう。67～72・74・75は条痕文が施されるものである。67～70・74は粗い条痕文、71・72・75は繊細な条痕文がそれぞれ施される。74・75は底部破片であり、74の底面には「網代痕」をとどめている。73は無文の胴部破片である。外面斜位、内面横～斜位の研磨が加えられており、焼成も堅緻である。

57～59は氷式に比定される。他も同様の時期の所産であろう。

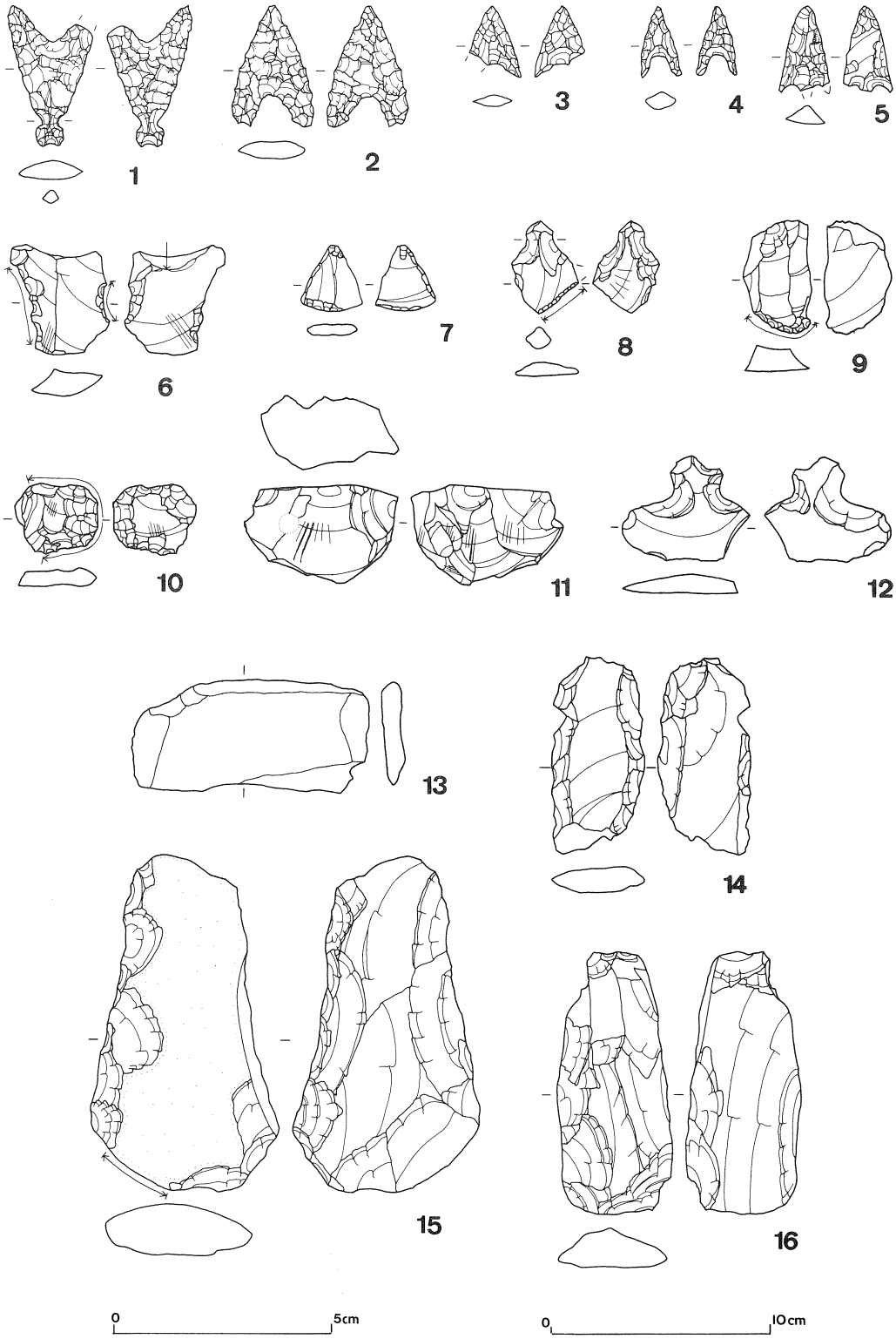
土製品（第42図１・２）

１は径24cm、厚さ３cmをはかる円盤状の器台である。４分の３を欠損する。２は3.1×3.4cmと小型の土製円板である。

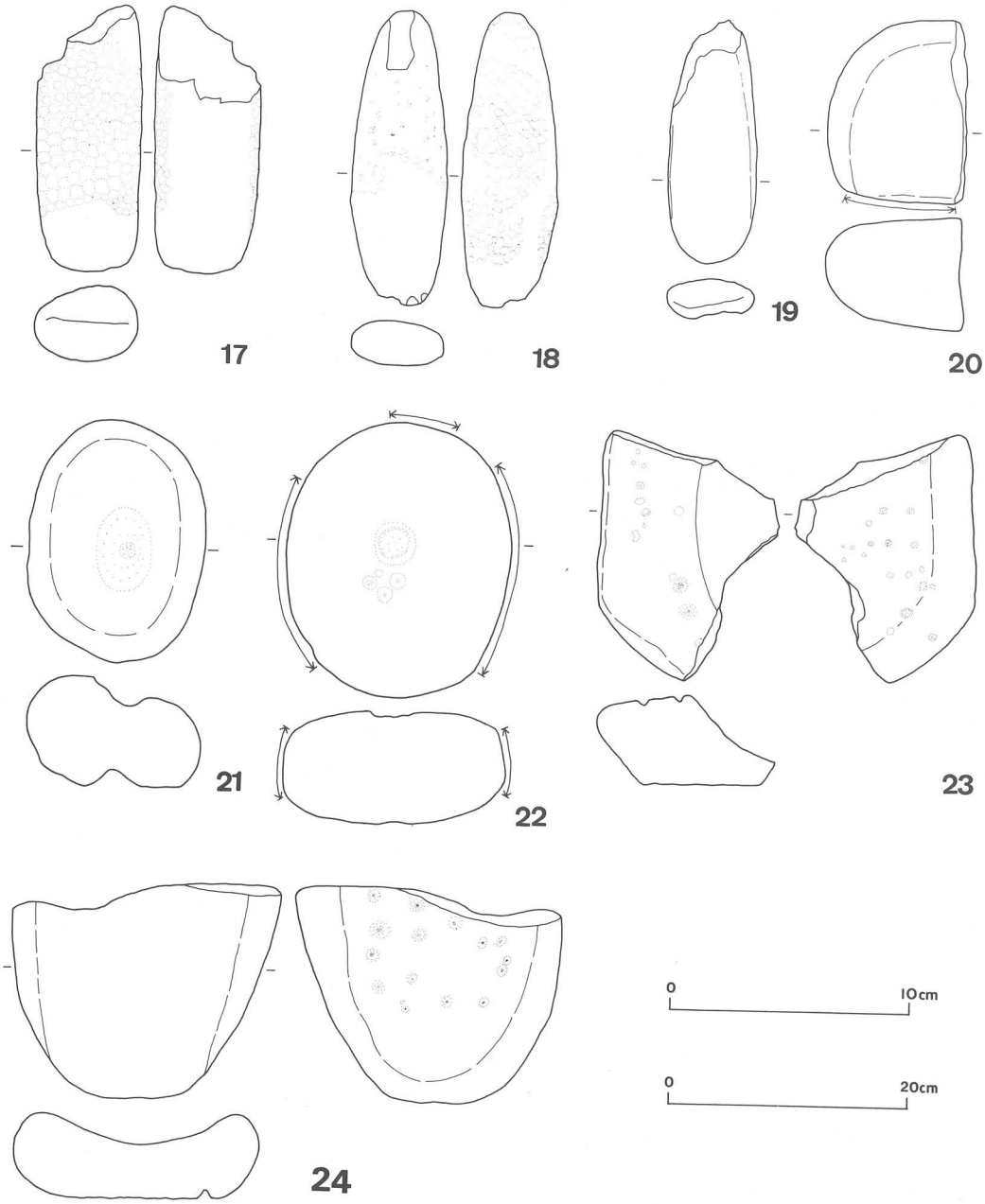


第42図　遺構外出土土製品〔１／３〕

（百瀬　忠幸）



第43図　遺構外石器(1)〔1／3、2／3〕



第44図　遺構外出土石器(2)〔1／3、1／6〕

b　石器（第43～44図、図版8）

ここで扱う石器類は、遺構外出土のものと、遺構出土のものであっても、明らかに、その遺構とは時間的に同一でない資料である。

1～5　石鏃。石質：1はチャート、2～5は黒曜石。1．17号溝出土。雁股状の石鏃 。

２．12号溝出土。３．３号住居址出土。４．２号住居址出土。５．15号溝出土。有茎鏃。茎部欠損。６～10．スクレイパー。石質：全て黒曜石。６．14号溝出土。サイドスクレイパー。実測図裏面の矢印部分は打点。７．13号溝出土。全周に、使用による細かい剝離がある。８．表採。矢印範囲には、使用による細かい剝離がある。９．表採。10．15号溝出土。矢印範囲が調整部分。11．石核。14号溝出土。石質：黒曜石。打点は４ヶ所確認できる。打面は節理面。12．粗製石匙。石質：ホルンフェルス。13号溝出土。器面の風化著しく、剝離状態の観察不可能。13．横刃形石器。石質：ホルンフェルス。13号溝出土。器面の風化著しく、剝離状態の観察不可能。14～16．打製石斧。14．短冊形。13号溝出土。石質：ホルンフェルス。素材は横長剝片。15．撥形。12号溝出土。石質：片状砂岩。矢印範囲は、刃部が摩耗している。16．短冊形。１号住居跡掘り方出土。石質：頁岩。17～19、磨製石斧。17．乳棒状磨製石斧。表採。石質：超塩基性岩。器面には成形痕（敲打痕）が多く残っている。18．不整形の磨製石斧。13号溝出土。石質：超塩基性岩。成形痕（敲打痕）が多く残っている。刃部はほとんど破損している。19．不整形の磨製石斧。表採。石質：凝灰岩。20．磨石。12号溝出土。石質：安山岩。全体によく磨耗している。特に矢印範囲は著しく磨り減っている。21．磨石＋凹岩。表採。石質：凝灰岩。凹部分の周囲約１cmが磨耗している。22．磨石＋敲石。16号溝出土。石質：安山岩。点線部分は少しくぼんでいる。これは、整った円錐形ではなく、粗雑で浅い（約２mm)。裏面にも同様のものがある。矢印範囲には敲打痕がある。23．24．石皿。両方とも14号溝から出土し、石質は安山岩で円錐状の凹を有する。以上、図示した資料の他に、次のものが出土している。打製石斧19点（短冊形16・撥形４・分銅形２：頁岩５・粘板岩２・ホルンフェルス３・安山岩１・砂岩４・片麻岩１・泥岩１・凝灰岩１)。粗製石匙１点（ホルンフェルス)。石鏃２点（黒曜石)。石核２点（黒曜石)。磨製石斧４点（乳棒状３：砂岩１・緑泥片岩１・超塩基性岩１、定角式１：砂岩)。石皿２（凹・有１、凹・無１：安山岩)。磨石＋敲石３点（安山岩３)。磨石２点（安山岩１・砂岩１)。凹石２点(安山岩１、凝灰岩１)。加工痕ある剝片２点（黒曜石２)。使用痕ある剝片１点（黒曜石)。剝片類180点(黒曜石169・チャート３・水晶３・ホルンフェルス３・安山岩１・頁岩１）以上述べてきた石器に対して、石器石材の同定をしていただいた紫田徹氏の産地推定によれば、15の打製石斧の石材となった片状砂岩は、小仏層群が産地で、また、様々な石器の材料となったホルンフェルスの産地は大菩薩峠付近であるということである。

（大森　隆志）

第Ⅴ章　成果と課題

第１節　縄文時代の遺構と遺物

(1)　土器の分布と遺構のうごき（第45図１～３）

縄文時代早期　：　第Ⅰ群土器の時期である。本期に伴う遺構の存在は一切不明である。出土し

た遺物もきわめて微量にとどまるものであったが、前半に比定される第１類土器（押型文系土器）は、発掘区中央部Ｇ～Ｉ—34～39グリッドにかけて、後半に比定される第２類土器（貝殻条痕文系土器）は、発掘区西部Ｋ～Ｏ—５～８グリッドおよびＮ・Ｏ—13～16グリッドにかけてそれぞれ分布していた。

縄文時代前期後葉～中期初頭　：　第Ⅱ群土器の時期に相当する。前代同様遺構の存在は確認されていない。遺物は発掘区全体に散漫な分布を示していた。

縄文時代中期前半～中葉　：　第Ⅲ群土器の時期。４期に細分される。

狢沢式期（第１類土器）—遺構は検出されていない。遺物はＫ～Ｐ—５～９グリッドおよびＭ～Ｏ—15～22グリッドにかけて、対峙した分布をみせていた。比較的まとまった量の遺物が検出されていることから、上述のグリッドを中心とする調査区域外に、何らかの遺構が営まれていた可能性は少なくないであろう。

新道式期（第２類土器）—第９号住居址が検出されているのみである。遺物は住居址を中心として、Ｉ～Ｎ—２～７グリッドに多く遺存していた。

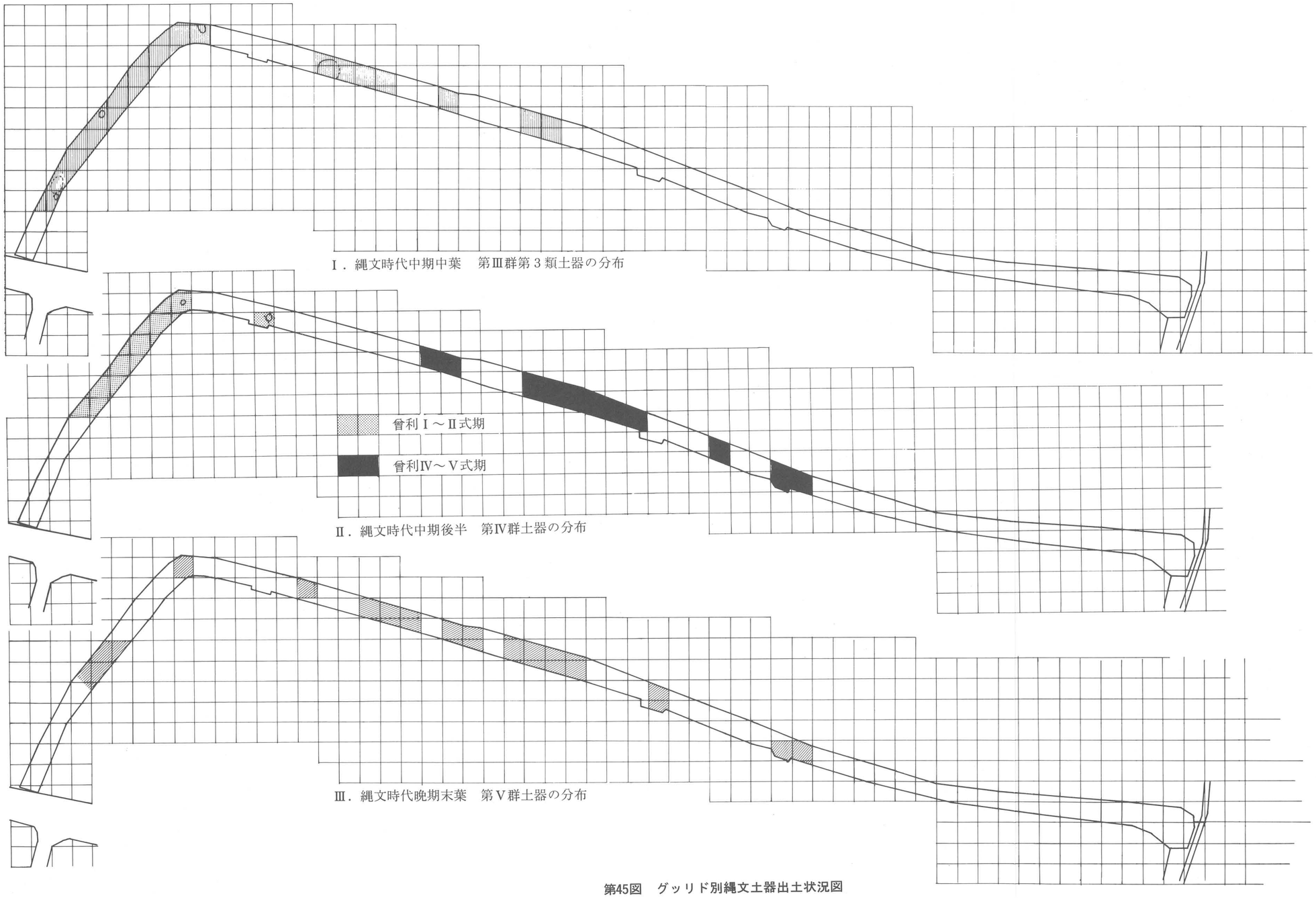
新道式期（第２類土器）—第９号住居址が検出されているのみである。遺物は住居址を中心として、Ｉ～Ｎ—２～７グリッドに多く遺存していた。

藤内式期（第３類土器）　（第45図・１）—第７号住居址、５号・13号・14号土拡、１号集石遺構が本期に帰属される。前代において居住域とされていた発掘区西端部に、墓拡的・祭祀的様相を帯びた土拡群や集石遺構が営まれるようになり、それに応じて、住居址群は発掘区中央部よりに移行する。遺物は第７号住居址覆土中および、土拡群が検出されたＦ～Ｏ—２～８グリッドに広く分布していた。

井戸尻式期（第４類土器）—第８号住居址が検出されている。第７号住居址とは８ｍ程離れるのみである。遺物は住居址床面上に一括出土したものを除き、他は、Ｍ～Ｐ—６～９グリッドを中心としてまばらに分布していたにすぎない。

縄文時代中期後半（第45図・２）　：　第Ⅳ群土器の時期に相当する。７号土拡および12号土拡が検出されている。後者にやや不明な点を残すものの、ともに墓拡的色彩をもつものであった。12号土拡は前代の第８号住居址床面を切り込んで造られており、中期前半～中葉、藤内式期にみられたものと同様な機能空間の占地変化の一端を示している。遺物は時間的・空間的に大きく２群に分けることが可能であり、曽利Ⅰ～Ⅱ式に代表される古段階はＰ—８・９グリッドを中心として、曽利Ⅳ～Ⅴに代表される新段階はＩ～Ｌ—26～31グリッドにかけて、それぞれ空間を異にした分布が認められた。

縄文時代晩期末葉（第45図・３）　：　第Ⅴ群土器の時期である。遺構は検出されなかったものの、Ｋ～Ｎ—19～27グリッドにかけて、比較的まとまった量の遺物が出土している。該期における遺跡の多くが立地上低湿地化傾向を示すなかで、台地上に占地する本遺跡のあり方はやや特異といえ、今後は、生業形態の相異ないし複合、あるいは季節的な移動といった多方面からの検討が必要であると思われる。



第45図　グッリド別縄文土器出土状況図

(2) 住居形態および集落形態の変化（第46図）

今回の調査で検出された縄文時代の住居址３軒はすべて中期に属するものであり、先にも詳述したように、中期前半、新道式期１軒、中期中葉、藤内式期１軒、同、井戸尻式期１軒という内訳けであった。ここでは、住居址の個別的な説明は先の記述に譲り、これら３軒、３時期にわたる住居址相互の形態的相異、また、さらに進んで集落形態の変化といった問題について若干の整理を行いたい。

新道式期に属する第９号住居址は、発掘区西端部Ｋ―４・５グリッドを中心に存在する。溝址による攪乱等により全体の形状は明らかにしえないが、おおむね円形～楕円形を呈するものと思われる。柱穴とも考えられるピット５ヶ所が認められるものの、規則的な配置をとっているとはいいがたい。ローム面を若干掘り込んで床面としており、住居址のほぼ中央部に埋甕炉を設けている。炉体土器は口縁部および胴下部を欠損するものの、現在高16cm、最大径26cmをはかる。炉の周囲および炉内には焼土の堆積が顕著にみとめられ、炉体土器も上端部を中心に二次焼成を被っていた。

藤内式期の所産と考えられる第７号住居址は覆土中の遺物がいわゆる“吹上パターン”に近似したあり方を呈していたことによって注目された。ローム層を深く掘り込んで構築されているものの、第９号住居址同様、柱穴の配置は不明瞭である。平面形は不整円形を呈し、ほぼ中央部に石囲炉が作られている。検出時は「Ｌ」字状をとどめるのみであったが、本来は一辺50～60cm程をはかる方形の石囲炉であったと思われる。炉の深さは縁石の上端より15cm程度をはかるのみで比較的浅いつくりである。

井戸尻式期末に帰属する第８号住居址は、上述の第７号住居址とは対象的に、略完形および大形破片が床面上に一括遺存しており、一般に“井戸尻パターン”と称されてきた遺物の出土状態を呈していたことが注意された。ローム層を全く掘り込まず、ローム層上面を床面としている。土坑に切られていることもあって全体の形状に不明な点を残すが、径６～７ m程の規模が推定される。柱穴と考えられるピットもいくつか検出されているが、定形的な配列とはなりえていない。

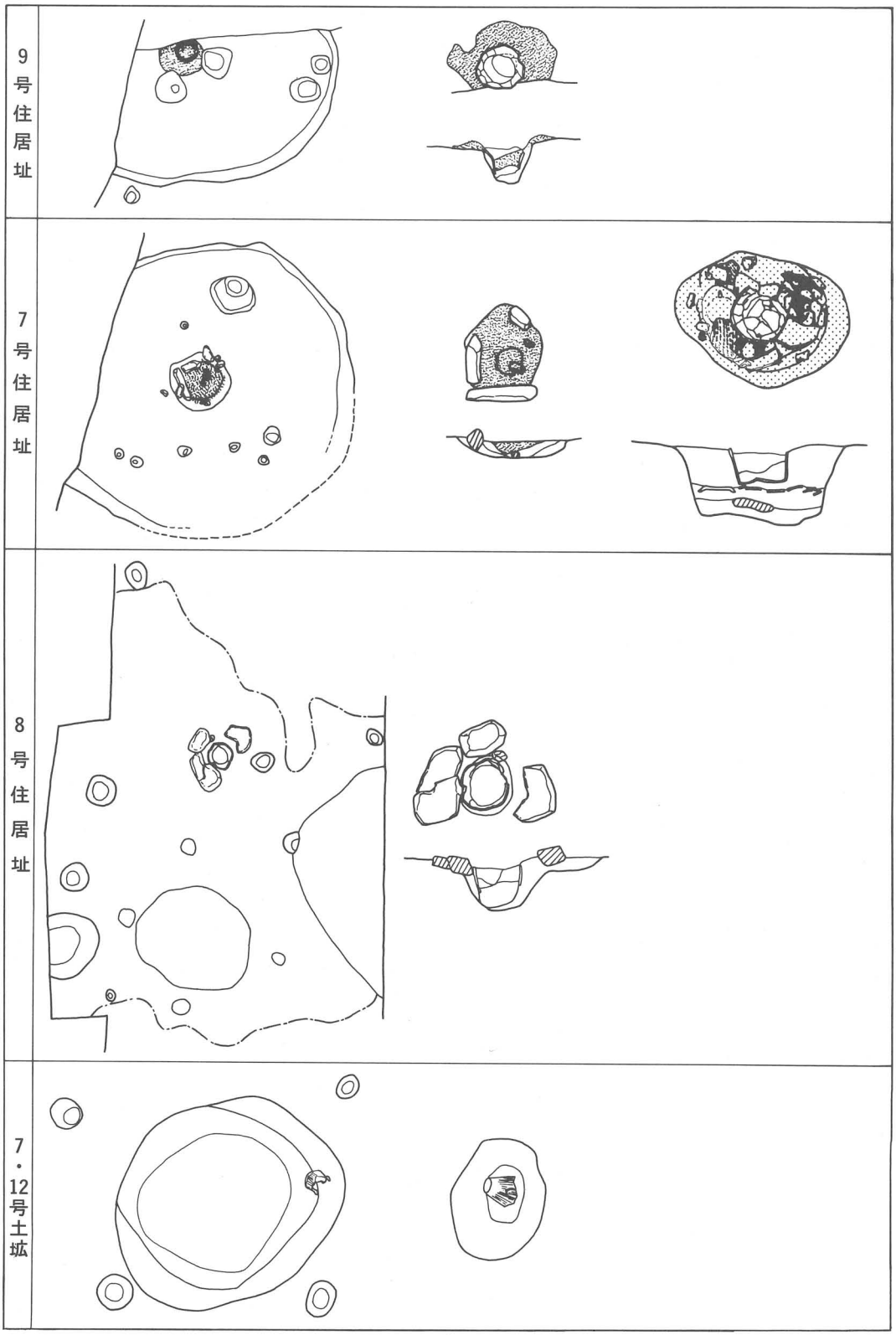
炉址は扁平な大形礫と口縁部および胴下部を欠く深鉢形土器とによって石囲埋甕炉としている。

本来は現存するものと同様な大形礫が全周していたことが考えられ、略円形、石の内辺40cm程をなしていたものと思われる。縁石上端よりの深さは35cm程と深めである。

以上、今回検出された縄文時代の住居址について、時期を追ってその概略を述べた。そこでも明らかなように、良好な保存状態を保って検出された住居址が皆無であったことから、時期を異にする各々の住居址の総括的な検討は困難といわざるをえない。とはいえ、次に列記するように、いくつかの問題点を指摘することは可能であると思われる。

(1) 中期前半～中葉の所産である３軒の住居址は、ともに、柱穴配置が規則的とはなりえていない。

(2) 新道式期に比定される第９号住居址と藤内式期に比定される第７号住居址は、ともに程度



第46図　縄文時代遺構変遷図

の差こそあれ、ローム層を掘り込んでいるのに対し、井戸尻式期の中でも新しい段階に帰属する第８号住居址はローム層上面を床面としている。ローム層を掘り込まずにその上面を床面としている例は、井戸尻式期末における住居址に多々見られるようであり、中期中葉～中期後半に移り変わる変革点として、住居址構造の変化にとどまらず、集落構造ひいては集落相互の諸関係に大きな変動が認められる該期の一様相を物語るものと解することもできよう。

(3) 炉形態については、新道式期―埋甕炉、藤内式期―（方形）石囲炉、井戸尻式期―（円形）石囲炉埋甕炉という変遷が認められる。本遺跡で確認された、この埋甕炉→（方形）石囲炉→（円形）石囲埋甕炉という新道式期～井戸尻式期における炉形態の変遷は、おおむね、それぞれの時期における一般的なあり方として理解できる。

(4) 藤内式期と曽利式期には、それぞれ前代とのあいだに、土坑群を含めた集落構造の変化が想定される。先にも述べたように、住居址への土坑群の接近・重複、さらに、土器の分布上の差違などによって示されるこの変化は、発掘区域が幅４ mのトレンチ状をなすにとどまることから、一概に断定すべきではないものの、土坑・集石の多くが墓坑的・祭祀的様相を強くもつことを重視するならば、居住域の墓域ないし祭祀的な場への変化、すなわち、日常的な空間から非日常的な空間への変化、あるいは居住空間の移動として把えうる可能性を多分に内包しているものと考えられる。藤内式期の中でも古い段階および井戸尻式期末から曽利式期にかけての段階、さらに、曽利式期の新しい段階において把えられるこの集落構造の変革は、本遺跡のみならず、八ヶ岳山麓を含めた長野県域でも同様に認められ、今後は、こうした前提に立って、そうした“うごき”をもたらすことになった社会的背景を、旧来の視点にとらわれないより広い視野から探ることが強く要求されよう。

以上、本遺跡から得られた縄文時代の遺構・遺物についての雑薄な整理を行ってきたが、その検討の曖昧さや不十分さは別にして、第８号住居址一括出土土器や13号土坑など従来類例に乏しかった資料を提出しえたことの重要性は高いと考えられる。（百瀬　忠幸）

第２節　古墳時代以降の遺構と遺物

今回の調査によって検出された古墳時代以降の遺構は、住居址６軒、土坑３基、溝状遺構17本を数えた。特に溝状遺構は約300 mの発掘区のほぼ全域に亘って検出され、その有様は本遺跡の特異性を示すものである。ここでは住居址（集落）、溝状遺構との二種に大別し、その関連性をも考慮しつつ若干の検討を加えたい。

a　住居址（集落）について

本調査によって検出された住居址は６軒を数える。しかし発掘区が４ m巾であるという条件に制約されて完掘しえた住居址はない。また、前述した溝状遺構の存在、耕作による削平等により、遺存状態は極めて悪く、遺構本来の姿を窺うには充分とはいえなかった。検出された６軒の住居址のうち、その１／２以上を確認したものは３号住居址１軒のみであり、推定を加えても住居址

の形態、規模を判断しえるものは2号～5号の各住居址の4軒である。そのうち3号住居址が不整円形を呈し、他は隅丸長方形を呈すると考えられる。規模も明確にはしえないが、3号住居址が径2.5～3㎜を測るものと考えられ、他は全て一辺のみの計数値であるが、4.1～5.1 m程で県内当該期の住居址例に比較してもほぼ平均的な数値である。主軸方位もN－20°－Eを中心に集中しており僅か4軒の推定値による検討ではあるが、ほぼ同一方位をとるものといえよう。

住居址の時期については、時代決定の根拠となりうる土器の出土が少なく、住居址間相互における前後関係の確定も不可能であり、切りあい関係にあった1号住居址→2号住居址、5号住居址→6号住居址の前後関係が確認しうるのみであった。県内特に峡西地域に於いてその土器内容が明らかにされている遺跡は甲西町・住吉遺跡、櫛形町・六科丘遺跡、同曾根遺跡等があげられるがそれらと本遺跡とを比較すると、台付甕、小型壺など住吉遺跡例とは系統的に異質であり、時代的にも本遺跡例は後出するものといえる。六科丘遺跡例とも若干平行しつつも、やや後出するものであり、古墳時代初頭の年代を与えておきたい。

ところで一般的に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居址形態の変遷は関東南部・静県東部では、小判形・不整円形から隅丸方形へ移行するといわれている。本遺跡においては3号住居址が不整円形を呈し、規模も他に比し小型である。土器からみる限り、3号住居址が他住居址に比し、時代的に遡るとは考えられず3号住居址に認められる形態的な特殊性は同一時期集落内における社会構成上の何らかの要因を考えるべきものといえよう。

遺跡は東一西にのびる台地の北縁に位置し、東端には小谷が刻まれている。集落は遺跡の東半部小谷を望む台地縁辺に形成されている。更に漆川によって開析された谷をへだて、北方六科山丘陵南西面には六科丘遺跡が存在して相対している。台地上に巾僅か4 m区域を設けただけの発掘であり集落の一部を確認したに過ぎず、本来の集落の規模、形態等は勿論明らかにしえたわけではない。その段階で集落の内容、性格等に言及する事は避けねばならないが、ともかく甲府盆地西縁の丘陵縁辺に位置する上の山遺跡の存在は、近隣する住吉遺跡、六科丘遺跡、曾根遺跡等と共に甲府盆地における古墳時代成立を考えるうえでその社会の発展・成熟の過程、あるいは多様性を窺わせる点でも興味深い。

b　溝状遺構

本遺跡から検出された17本の溝状遺構にどの様な年代を与えるべきかについては判断資料となりうる遺物に乏しく判断をなしえないのが実情であるがとりあえず遺構の断面形態、覆土等から若干の分析を行なった。まず断面形態であるが、Ⅰ類として1・2・7号の各溝状遺構は漏斗状を呈している。Ⅱ類として3・4・9・10・14A・14B・17号の各溝状遺構は逆台形を呈し、Ⅲ類として6・8・11・12号の各溝状遺構は深鉢形を呈している。

尚、8号溝状遺構は何本かの溝状遺構を収束した様相を示しており、W字状断面を持つものともいえる。次いで覆土の様相についてであるが、A類として2・3・4・9・10・11・12号の各溝状遺構は黒褐色土層の堆積が顕著である。B類として6・7・8・14A・14B・17号の各溝状遺構

はローム粒の混入が顕著で黒褐色土粒は混入するものの単一層としての形態をなしてはいない。最後にC類として1号溝状遺構ではロームブロック、黄白色軽石ブロックが人為的堆積の様相を示している。また、14B、17号溝状遺構はその状態は異とするものの覆土内に礫の存在が顕著である。A類の黒褐色土は本遺跡基本土層中には見出されず、14号土坑を除く古墳時代初頭の所産とした住居址、土坑覆土に認められたものである。勿論肉眼観察によるもので、土壌学的分析を経たものではないが示唆に富む様相といえよう。出土遺物についても3・4・9・10・12号の各溝状遺構からは、古墳時代初頭の遺物を中心として、2・7・14B号各溝状遺構からは中世以降の遺物を中心として認められている。特に3号溝状遺構覆土からは焼成後底部穿孔された大型壺が遺棄された状態で検出された。壺は2／3個体程出土しており、完全な球形の胴部からやや内湾気味に立ち上がって折り返し口縁部に至る形状を持つもので古墳時代初頭の年代を与えたい。平面的には、9・10号及び11・12号溝状遺構が興味ある状態で検出されている。すなわち、9・10号溝状遺構は両者で「ハ」の字形を示しており、発掘区北側で直交する位置関係になる。前述した様に覆土、断面形等などからも別個の溝とするより同一の溝と考えた方が妥当性がある。また11・12号溝状遺構についても11号溝は「く」の字形に折れ12号溝に対して一辺は平行し、他辺は直交する関係となる。この両者も覆土、断面形など共通する要素をもち、一辺9m程を測り平面「コ」の字形或いは方形を呈する同一の溝と考えたい。更に各々の内側にあたる壁が外側の壁に対して、急角度の立ち上がりをみせ同一の溝とする傍証ともなろう。道路巾の発掘の為、全容を確認する事は不可能で、推測にたよる部分が少なくないとはいえ、底部穿孔土器を出土した3号溝及びそれと共通する覆土を持ち、前述した様な傾向を示す9・10号及び11・12号溝状遺構に関して方形周溝墓の可能性を指摘しておきたい。

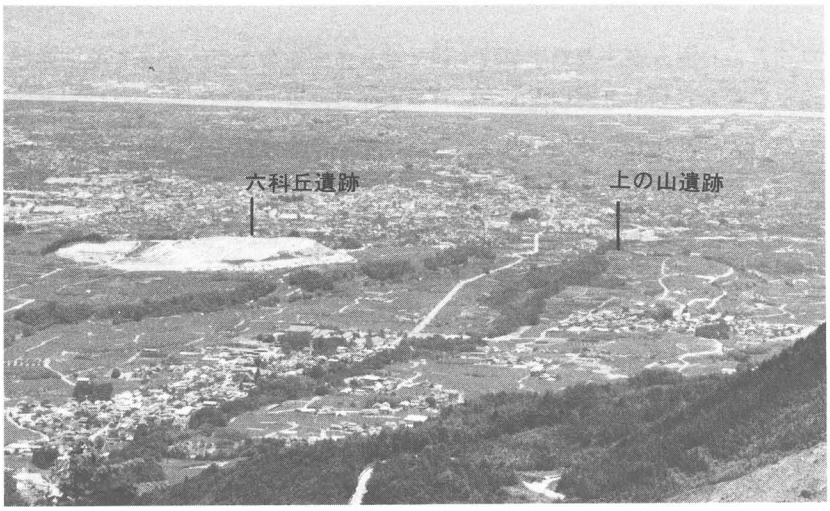
仮にこの二者を方形周溝墓とする事が可能であるならば住吉遺跡から検出されている方形周溝墓などと共に、県内における弥生時代末期から古墳時代への過程を検討する上で重要な資料で提供したものといえよう。

紙数の関係上、方形周溝墓と集落址との関係、それらの山梨県内における歴史的位置、また中世の遺物を伴う溝状遺構の問題について全く言及できなかった。それらについては今後、検討・報告する責務のあることを最後に明記しておきたい。　　（清水　博）

引用・参考文献

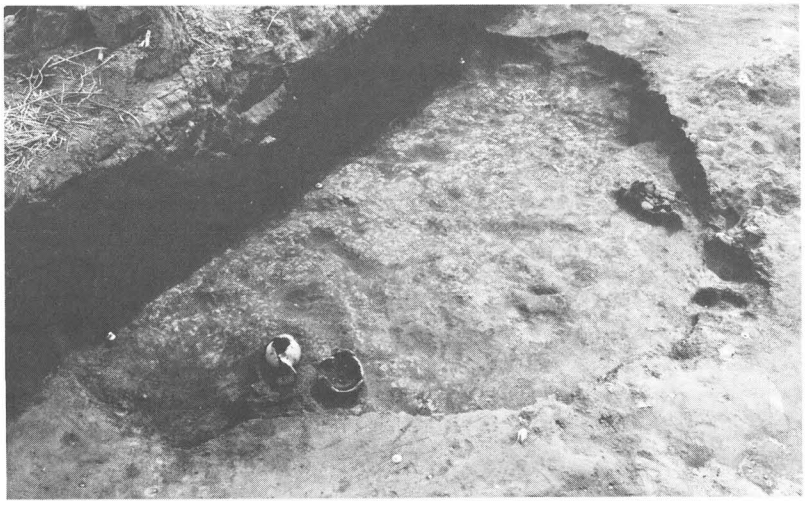
① 文化庁、文化財保護部「全国遺跡地図―山梨県」　国土地理協会　1981
② 松浦宥一郎他「物見塚古墳」　櫛形町教育委員会　1983
③ 関根孝夫他「六　科　丘」　1983 六科丘遺跡調査団
④ 住吉遺跡調査団「住吉遺跡」　甲西町教育委員会　1981
山崎金夫「西田遺跡」　山梨県遺跡調査団　1978
未木健也 他「山梨県敷島町金の尾遺跡調査略報」『長野県考古学会誌』36　1980
〃　「豆塚遺跡」　山梨県教育委員会　1984
小林広和他「上 の 平」山梨県教育委員会　1980
佐々木藤雄他「帷子峰遺跡」　横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会　1984
橋本博文　「甲府盆地の古墳時代における政治過程」
『甲府盆地―その歴史と地域性』　地方史研究協議会　1984
佐原真　他「弥生式土器、Ⅰ・Ⅱ」　ニュー・サイエンス社　1983

図版 1



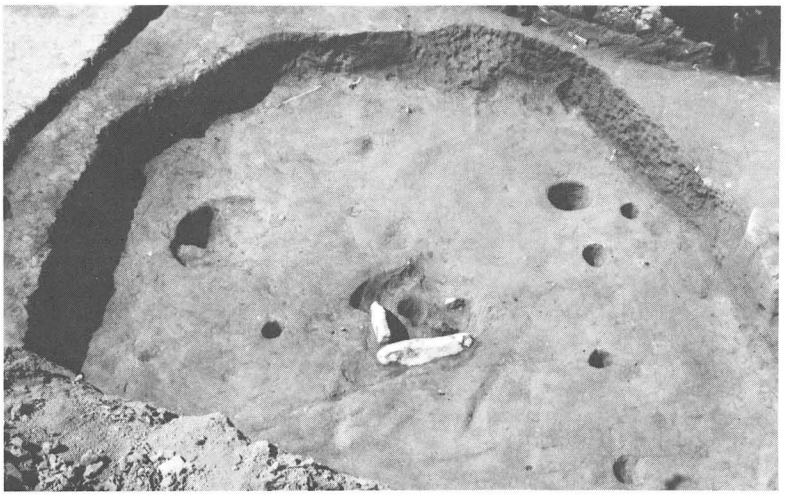
上の山遺跡
遠景

上の山遺跡
近景



3 号住居址

図版 2

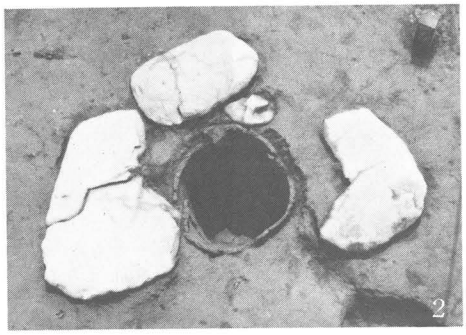


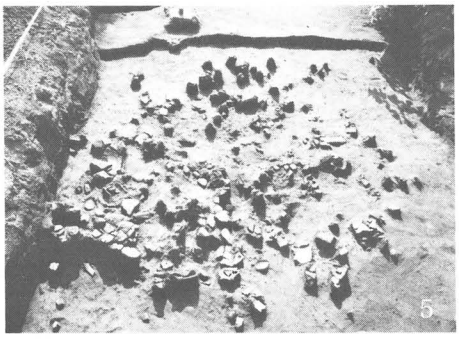
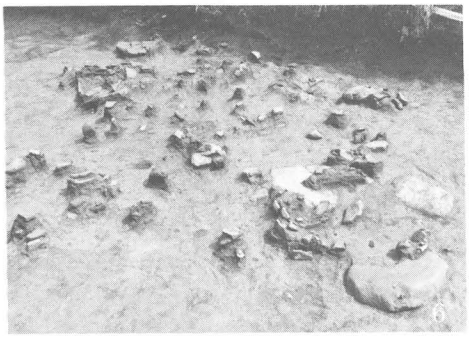
7 号住居址

8 号住居址

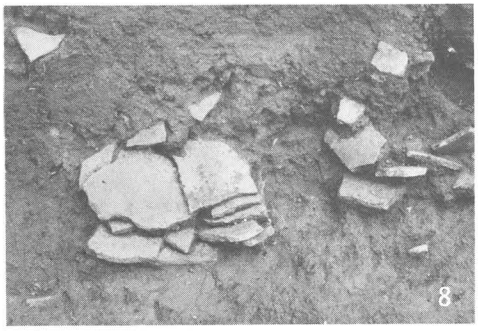
9 号住居址

図版 3



1：7号住居址炉址　2：8号住居址炉址　3：9号住居址炉址
4：1号集石遺構　5：7号住居址遺物出土状況　6：8号住居址遺物出土状況

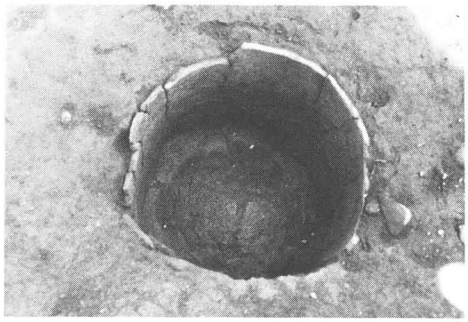


7：3号溝　8：3号溝遺物出土状況

図版 4

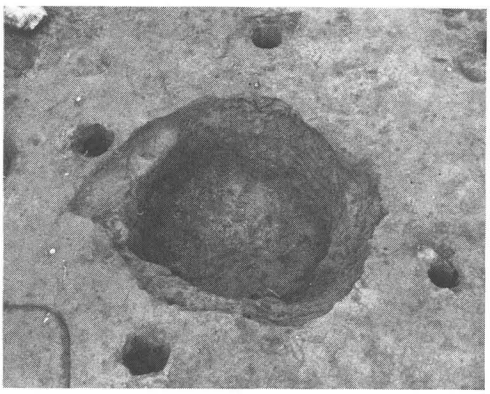
4 号土壙

7 号土壙



上）13号土壙、埋甕

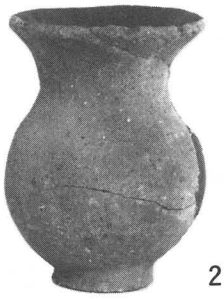
下）13号土壙

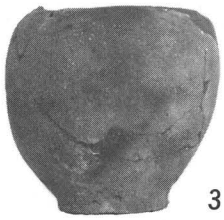


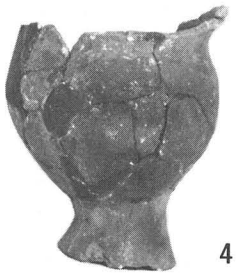
12号土壙

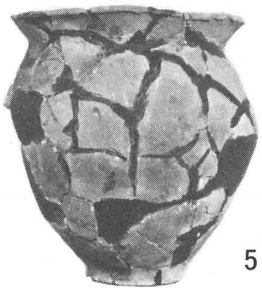
17号土壙

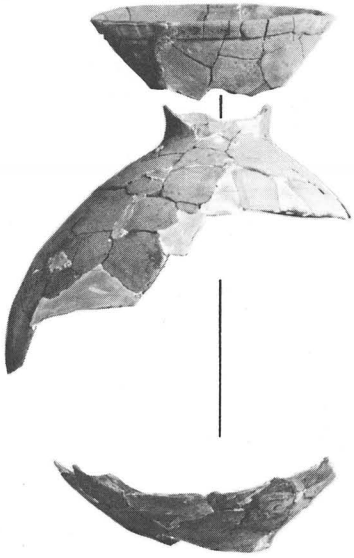
1


2


3


4

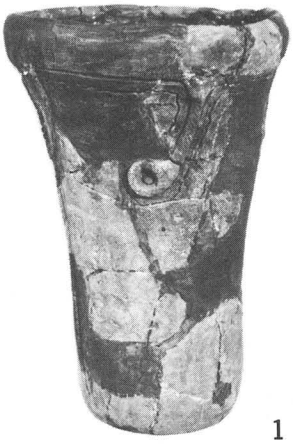

5



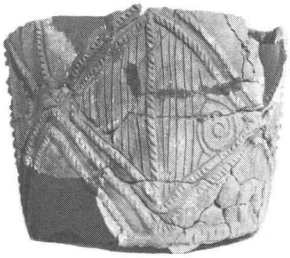
6

出土遺物　―土器(1)―

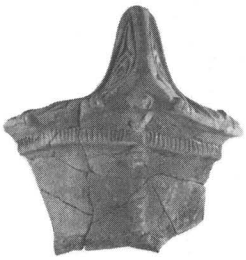
1：2号住居址　2・3：3号住居址　4・5：4号住居址
6：2号土壙　7：3号溝


1

2


3

4


5

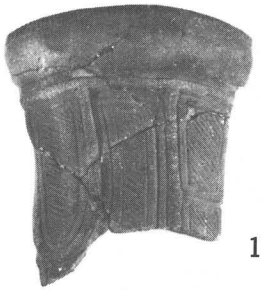
6

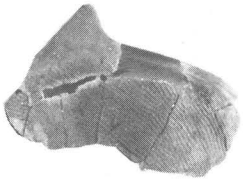
7

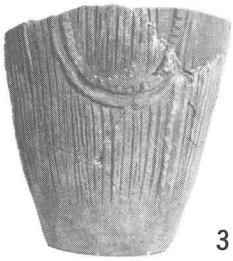
8

出土遺物　―土器および土偶(2)―

1・2：7号住居址　3～7：8号住居址　8：9号住居址


1

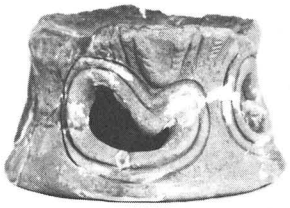

2


3

4

5

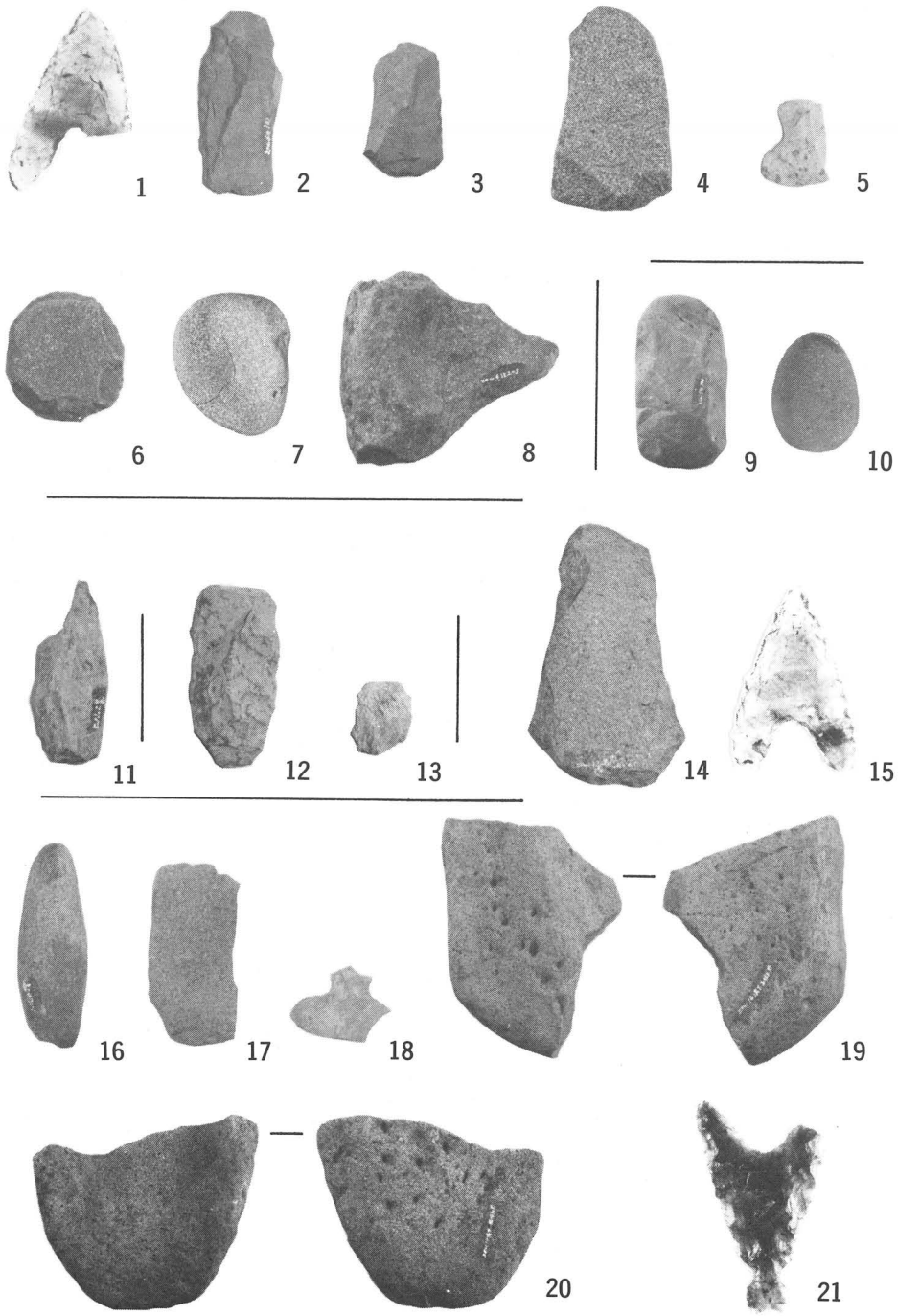
6


7

出土遺物

—土器(3)—

1 ：1号集石遺構
2 ：5号土壙
3 ：7号土壙
4 ：12号土壙
5・6 ：13号土壙
7 ：14号土壙



出土遺物 —石器—　1～8：7号住居址　9・10：8号住居址
11：1号集石遺構　12：4号土壙
13：5号土壙　14・15：12号溝
16～18：13号溝　19・20：14号溝　21：17号溝

櫛形町文化財調査報告書　No. 2

上　の　山　遺　跡

昭和60年３月31日発行

編　集
発行者　櫛形町教育委員会
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原

印　刷　野中印刷，櫛形町小笠原